

特 231

253

周布村郷土誌

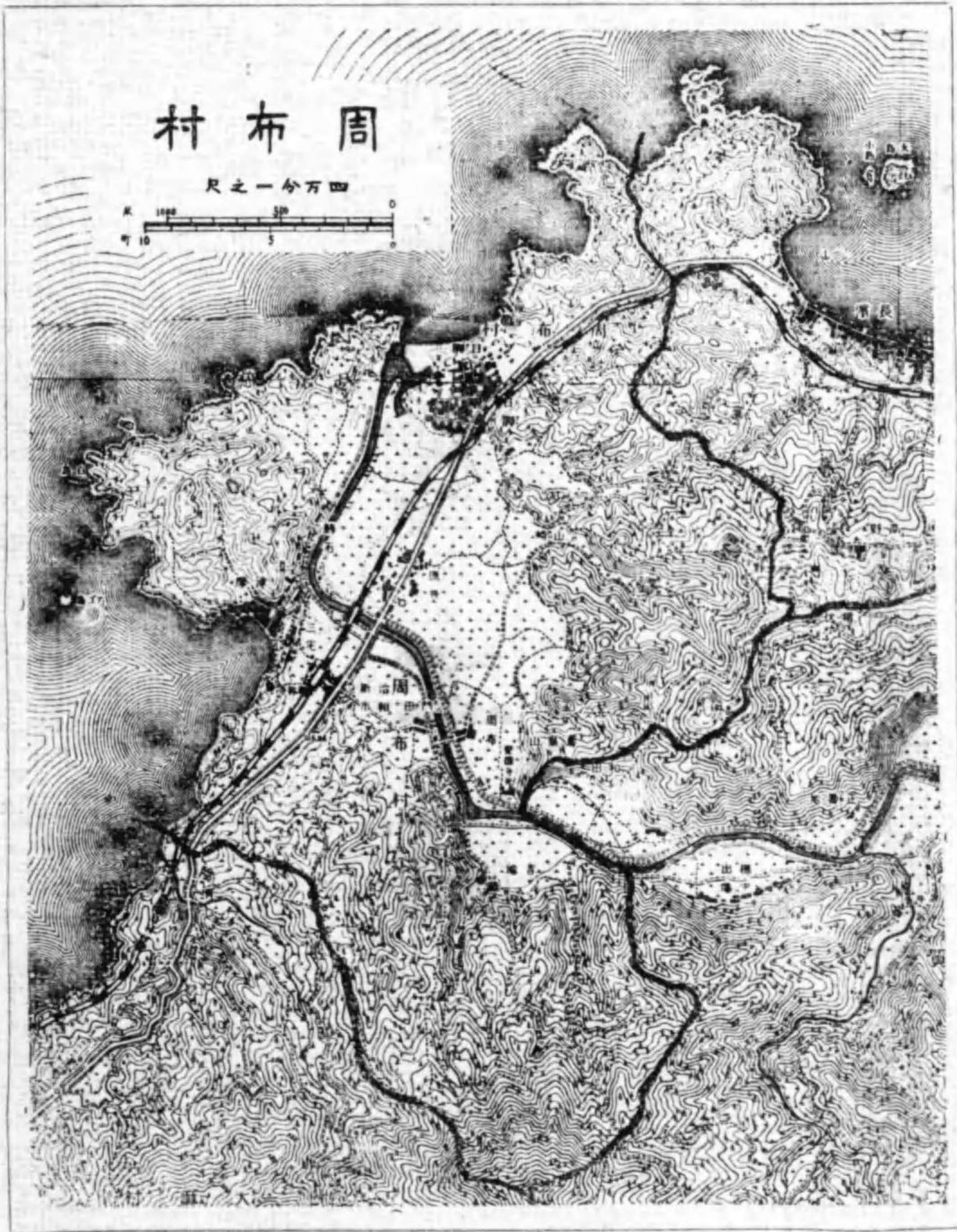
島根縣那賀郡周布村高等常小學校



始



特231
253



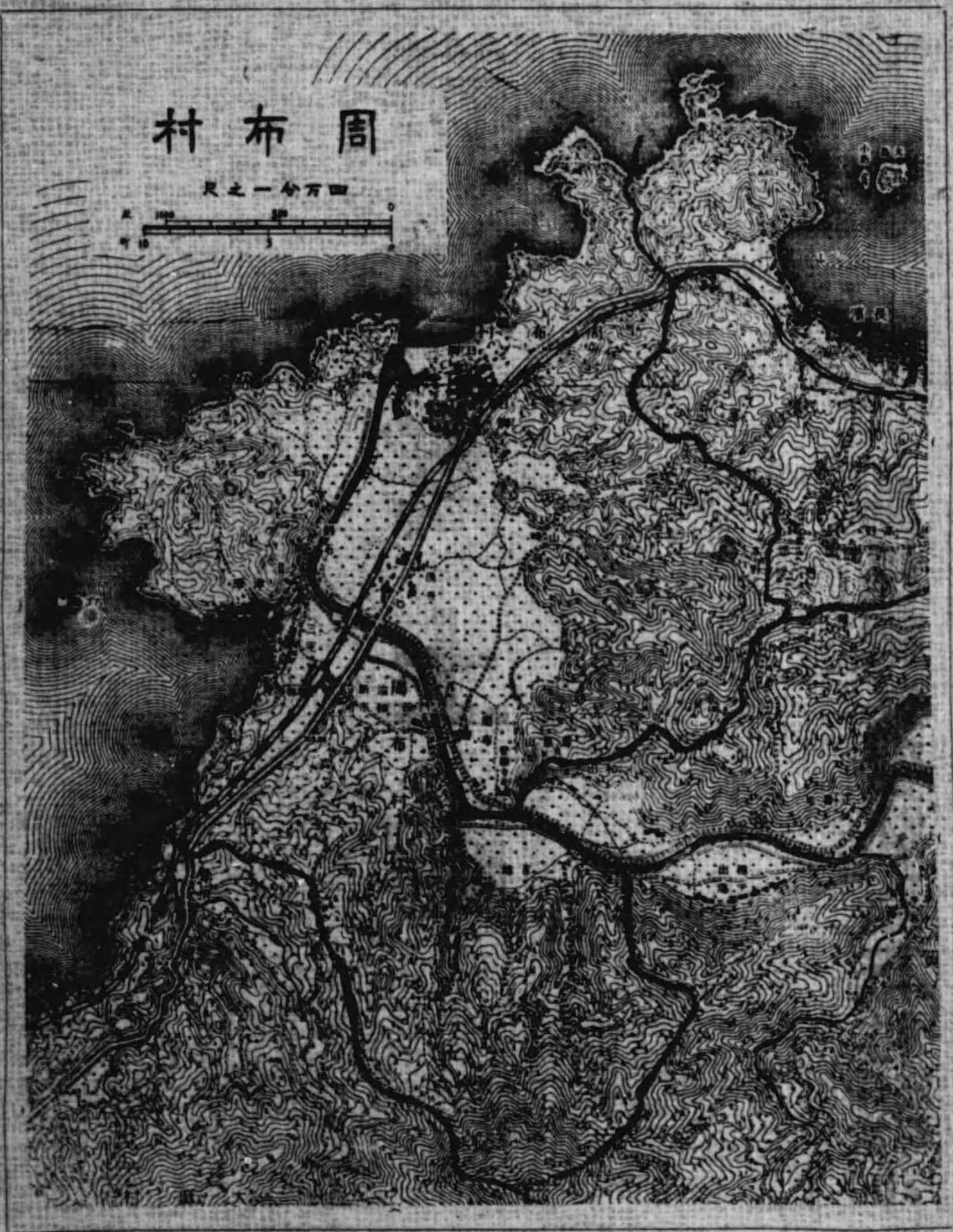
はしがき

人生に於て、終世忘れることの出来ないものとしては、誰しも先づ指を我が故郷に屈せざるを得ないであらう。それは我が呱呱の聲を擧げた處で、父母、兄弟、親戚、故舊の恩愛の裡に育ち、野に、山に、郷土に展開する大自然の懷に抱かれて楽しく嬉戯して大きくなつて來た懐しく慕はしい處であるばかりでなく、悠久なる郷土の歴史、祖先の業績によりて醸成せられた郷土精神と、現實の郷土環境による感化によつて郷土民性を通して次第に我國民性をもはぐくまれて來たのであつて、彼のナトルプが「人間は社會に於てのみ人間となる」と云つた如く、人間生活に於て最も關係深く最も印象の強いものであるからである。されば在郷の者がこの郷土と密接不離の關係に於て、その實生活を營むのは勿論、遠く萬里異域の客となつた者は更に懷郷の情愈々切にして、夢寐にも故郷を彷徨ふてやまざるものがあるであらう。かく故郷を懷ひ、故郷を愛する心は即ち國家を思ひ、國家を愛するの至情なるべきことは言ふ迄もない事である。

我が學校經營に於て、眞に兒童の生活指導によつて國民教育を行はんとするならば、どうしてもそれが郷土に立脚して行はなければならぬものであると思ふ。而して郷土に立脚するには、先づ郷土の實情を認識せねばならぬ。即ち遠く過去に於ける郷土文化の歷程より現在郷土に至る實體を精査し、之によりて村民の生活と兒童の生活の實相を知り、茲に現在及び將來に亘る學校經營の基礎を確立することが出来るのである。

斯る意味に於て、私は昨年四月本校に赴任してから、先づ此の郷土の實情を認識すべく、既に調査された二三の記録、其他

特231
253



はしがき

人生に於て、終世忘れることの出来ないものとしては、誰しも先づ指を我が故郷に屈せざるを得ないであらう。それは我が
 呱呱の聲を擧げた處で、父母、兄弟、親戚、故舊の恩愛の裡に育ち、野に、山に、郷土に展開する大自然の懷に抱かれて樂し
 く嬉戯して大きくなつて來た懐しく慕はしい處であるばかりでなく、悠久なる郷土の歴史、祖先の業績によりて醸成せられた
 郷土精神と、現實の郷土環境による感化とによつて郷土民性を通して次第に我國民性をもはぐまれて來たのであつて、彼の
 ナトルフが「人間は社會に於てのみ人間となる」と云つた如く、人間生活に於て最も關係深く最も印象の強いものであるから
 である。されば在郷の者がこの郷土と密接不離の關係に於て、その實生活を營むのは勿論、遠く萬里異域の客となつた者は更
 に懐郷の情愈々切にして、夢寐にも故郷を彷徨ふてやまざるものがあるであらう。かく故郷を懐ひ、故郷を愛する心は即ち國
 家を思ひ、國家を愛するの至情なるべきことは言ふ迄もない事である。



我が學校經營に於て、眞に児童の生活指導によつて國民教育を行はんとするならば、どうしてもそれが郷土に立脚して行は
 なければならぬものであると思ふ。而して郷土に立脚するには、先づ郷土の實情を認識せねばならぬ。即ち遠く過去に於け
 る郷土文化の歷程より現在郷土に至る實體を精査し、之によりて村民の生活と児童の生活の實相を知り、茲に現在及び將來に
 亘る學校經營の基礎を確立するこゝが出来るのである。

斯る意味に於て、私は昨年四月本校に赴任してから、先づ此の郷土の實情を認識すべく、既に調査された二三の記録、其他



機會ある毎に文献の涉獵に意を用ひたが未だ十分に満足すべきものを見るこゝが出来なかつた。茲に於て本學年の一事業として、あらゆる方面から、此の郷土を研究して其の實相を明かにする爲に郷土誌を編纂し、併せて郷土室を設置するの方針を樹立し之が主任を訓導小澤武君に委嘱し、全職員は之を輔佐する事とした。爾來小澤君の熱心なる努力は遂に一應の資料蒐集及び編纂を十月迄に終結する事が出来、次いで本月に入つては、原稿の淨書に、地圖、圖表の製作に、職員總動員の力によつて漸次進捗し、茲に本書を出版し、併せてさ、やか乍ら學校の一部を利用して郷土室を創設するに至つたのである。

本書編纂に當り、郷土誌に於ては前本校訓導驛田仁市君、郷土史に於ては同、中尾廣市君の研究に負ふ所が多く、本村事情一般に關して村當局並に各種官公署、団体及び有志諸氏より多大の便宜と後援を得、寫眞撮影に就ては濱田町藤井寫眞館藤井巧君の率仕的努力により、漸く第一期の事業を完成するこゝを得たのは、眞に欣幸の至りであつて、前記の各位へ謹んで本書を呈し深甚なる感謝を捧げるものである。

素より短日月の間に於て調査編纂したものであるから、不備な点も多々あらうと思ふ、之は此後の研究によつて逐次修正する事にしたいと思ふが故に、識者の批正を併せて希ふ次第である、

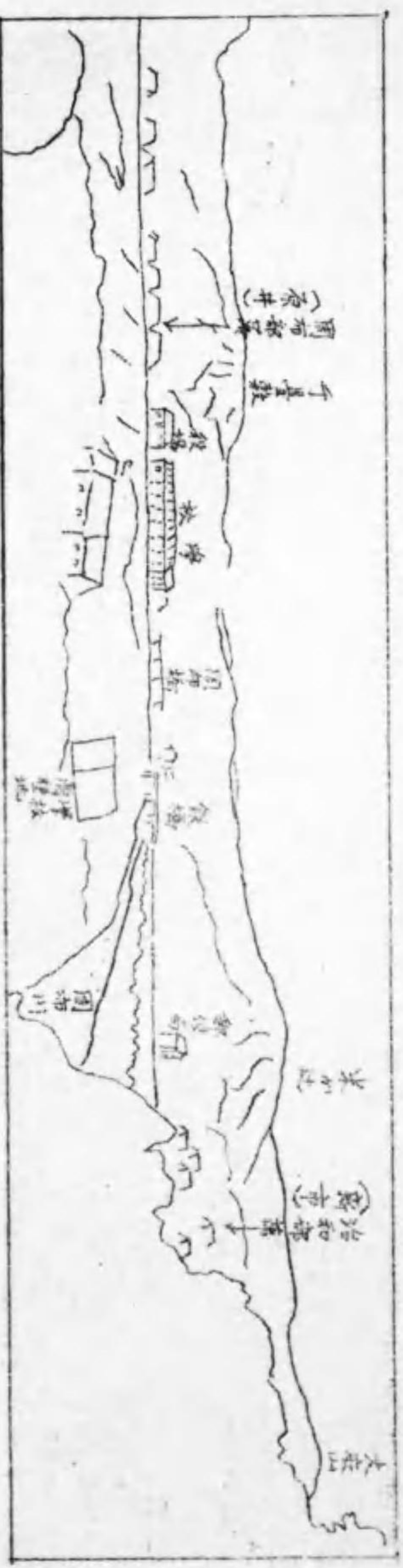
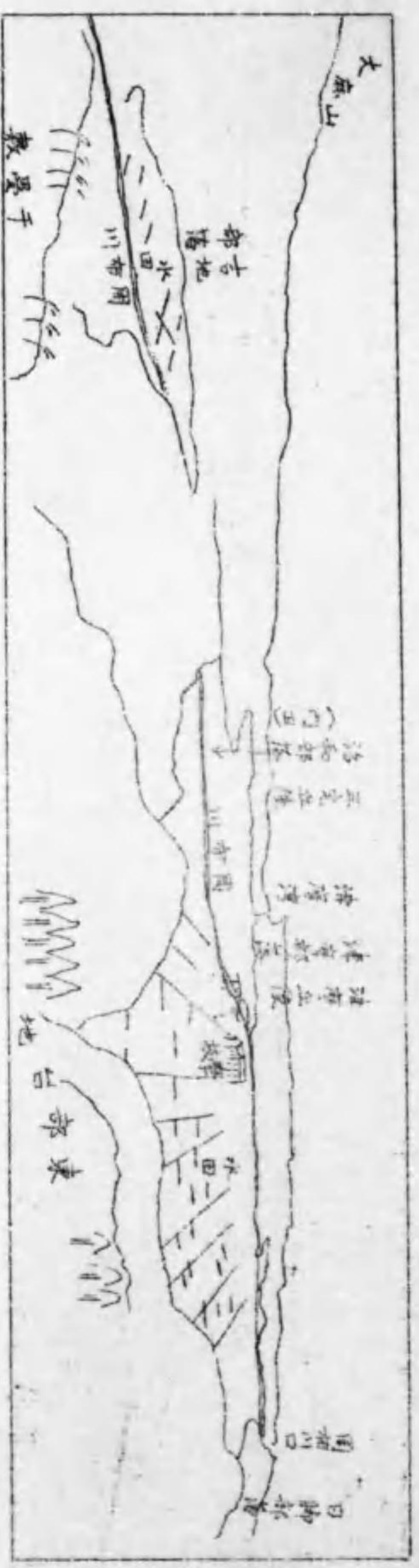
昭和十二年十一月二十日

島根縣那賀郡周布村^{尋常}高等小學校長 田中賢二郎

周布郷土誌 目次

第一章	郷土の概観	一
第二章	郷土の歴史	二
第一節	地名の起源	二
第二節	神代	三
第三節	國造時代	三
第四節	國司時代	三
第五節	守護地頭時代	四
第六節	群雄割據時代	六
第七節	大名時代	九
第八節	現代	二二
第三章	古墳	三
第四章	周布城址及城下町	一四
第五章	神社佛閣	一五
第六章	郷土の偉人	一七
第七章	口碑傳説	二一
第八章	周布村の自然景觀	二二
第一節	周布村の自然景觀	二八
第二節	地理的位置と面積	二八
第三節	地形	三〇
第四節	氣候	三五
第九章	周布村の人文景觀	三七
第一節	周布村の戸口	三七

第二章	農業上より見た村	四〇
第三章	水産業上より見た村	四九
第四節	工業上より見た村	五九
第五節	村の交通と商業	六一
第六節	村の商業	六五
第十章	聚落	六六
第十一章	自治	七〇
第十二章	郷土の各種団体	七八
第十三章	郷土の教育	八二
第一節	小学校	八二
第二節	青年學校	九六
第十四章	郷土民の生活状態	九九
一、年中行事		九九
二、郷土の人情風俗		一〇三
三、郷土の民謡		一〇五
四、新聞誌講讀状況		一〇八
五、食物の状況		一〇九
六、衣服		一一四
七、住居		一一五
六、郷土の方言		一一六
第十五章	衛生	一二二
第十六章	其他	一二八
第十七章	結び	一三九



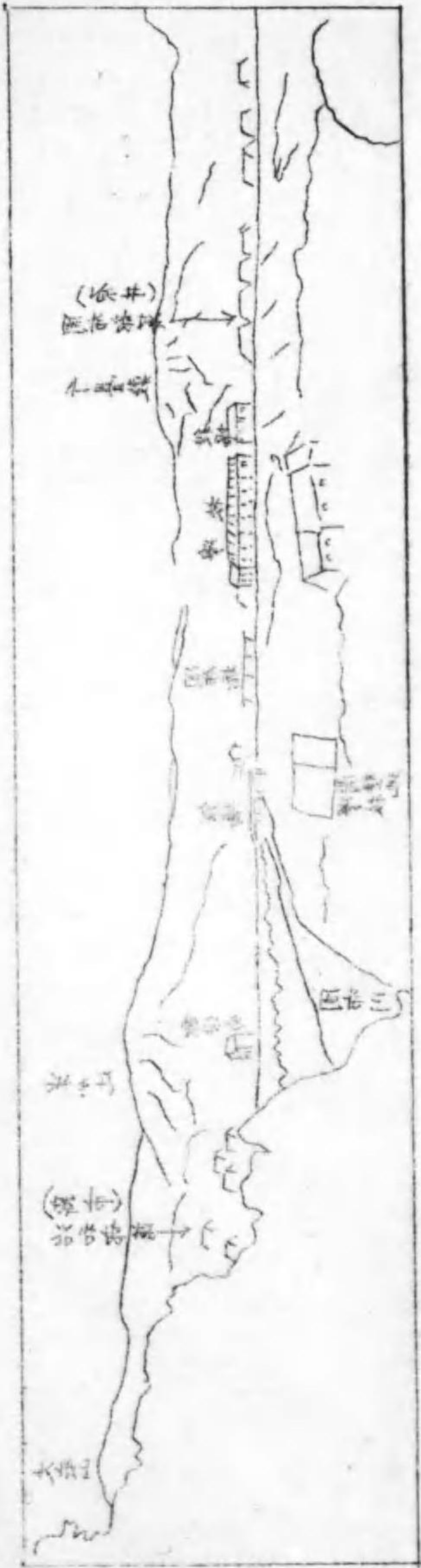
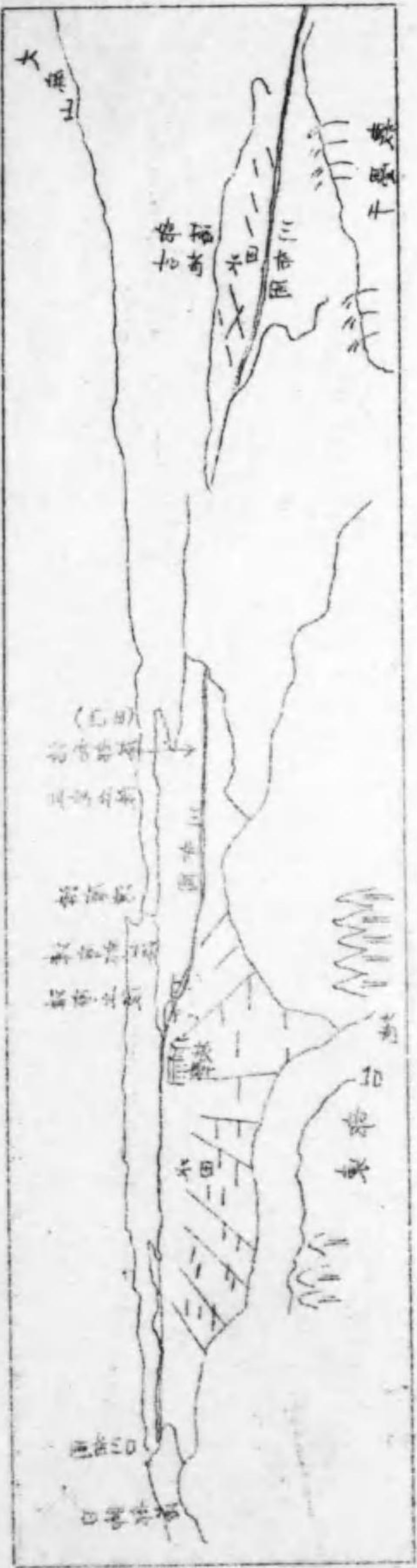


津摩丘陵より東南方を望む



千疊敷より西北方を望む

周布村全景



學 校 全 景

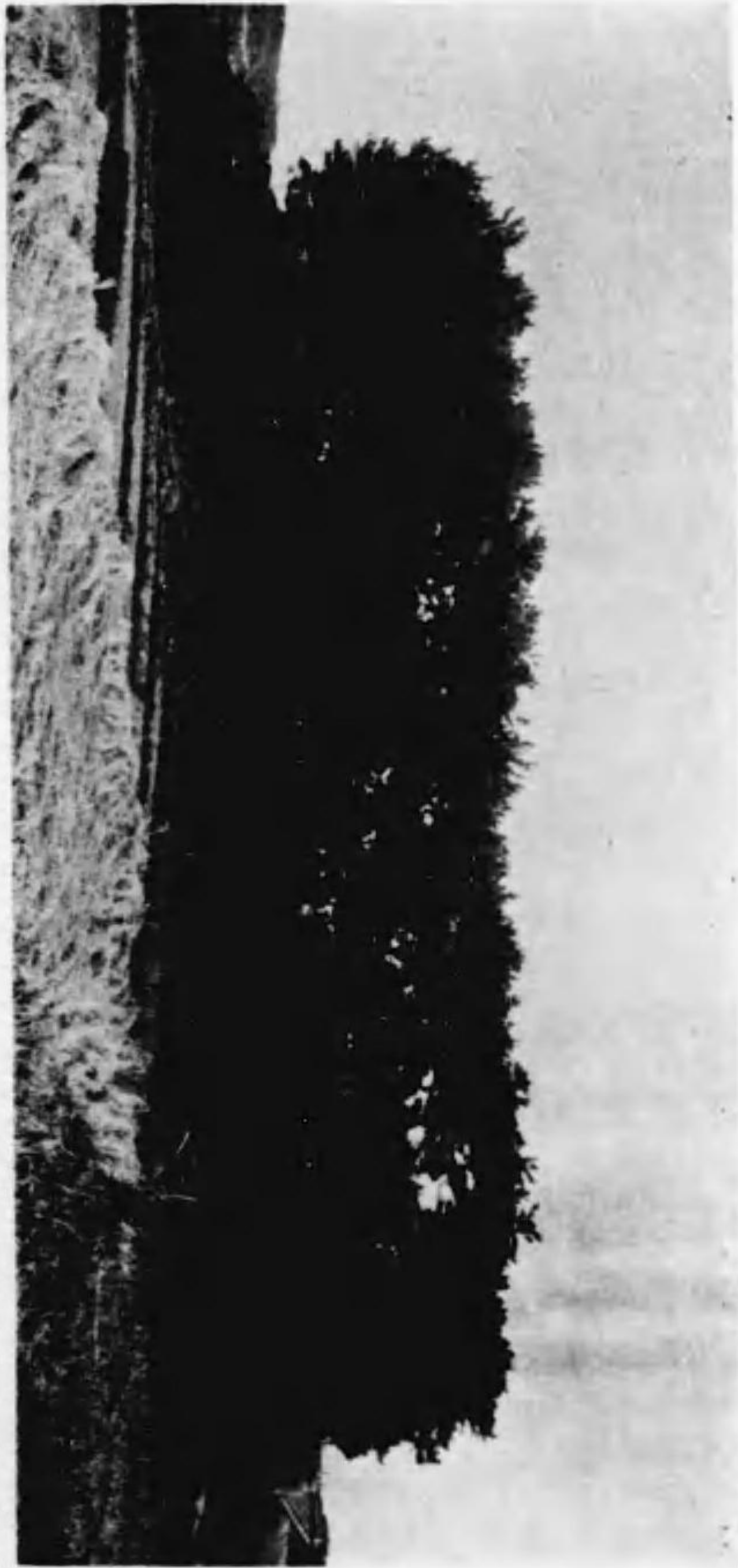


昭和九年春小松原虎雄大尉が飛行機
りよ機行飛が尉大雄虎原松小春年九和昭は之
るあでのもたれらせ贈寄し影撮



練訓体團の時動運間中

周 布 古 墳



昭和十年十二月十二日文部省より保
存法により史蹟として指定された周
布古墳は本村の西南部宮家台地にお
る。二段に築かれた前方後圓塚で、圓
形なしてゐるから瓢塚といふ、本村
にある他の古墳が圓塚であるのに對
して、之はよほど高貴な方の墳墓で
あることが察せられ千數百年前既に
本村が文化の中心地となつてゐたこ
そを物語るものである下の古土器は
この古墳より約一町下つた麓の圓
塚から發掘せられたものであつて右
よりいへば高杯、刀、埴杯で前方のは
劍である之は學校に保存してある



宮家古墳より發掘の古土器



志巢城址は前面に横はる志巢山の全部に亘るものであつて急勾配を以つて周布川岸に降る右手の山道を大手とした。之を登れば本旗櫓、本丸、二の丸三の丸の跡がある山上中央より左手に二本松樹左によつて天狗松の古松が秀でてみえたる其左に緩やかな山頂があるのでかしてゐるのが千疊敷である山麓の右手に樓門と白壁の塀をめぐらしてゐるのは稱徳寺で周布氏邸宅は此寺の境内及び附近一帯の廣い土地であつたのである。周布氏の墓は寺の左手半町位の山麓にあつて昔蒸し墓標は風化してどれが誰のであるか識別し難く又詳かに傳つてもゐない、前面の民家の向側を一直線に通ずる道路が昔祭えた城下町の通りであつたのである。

周布氏の墓

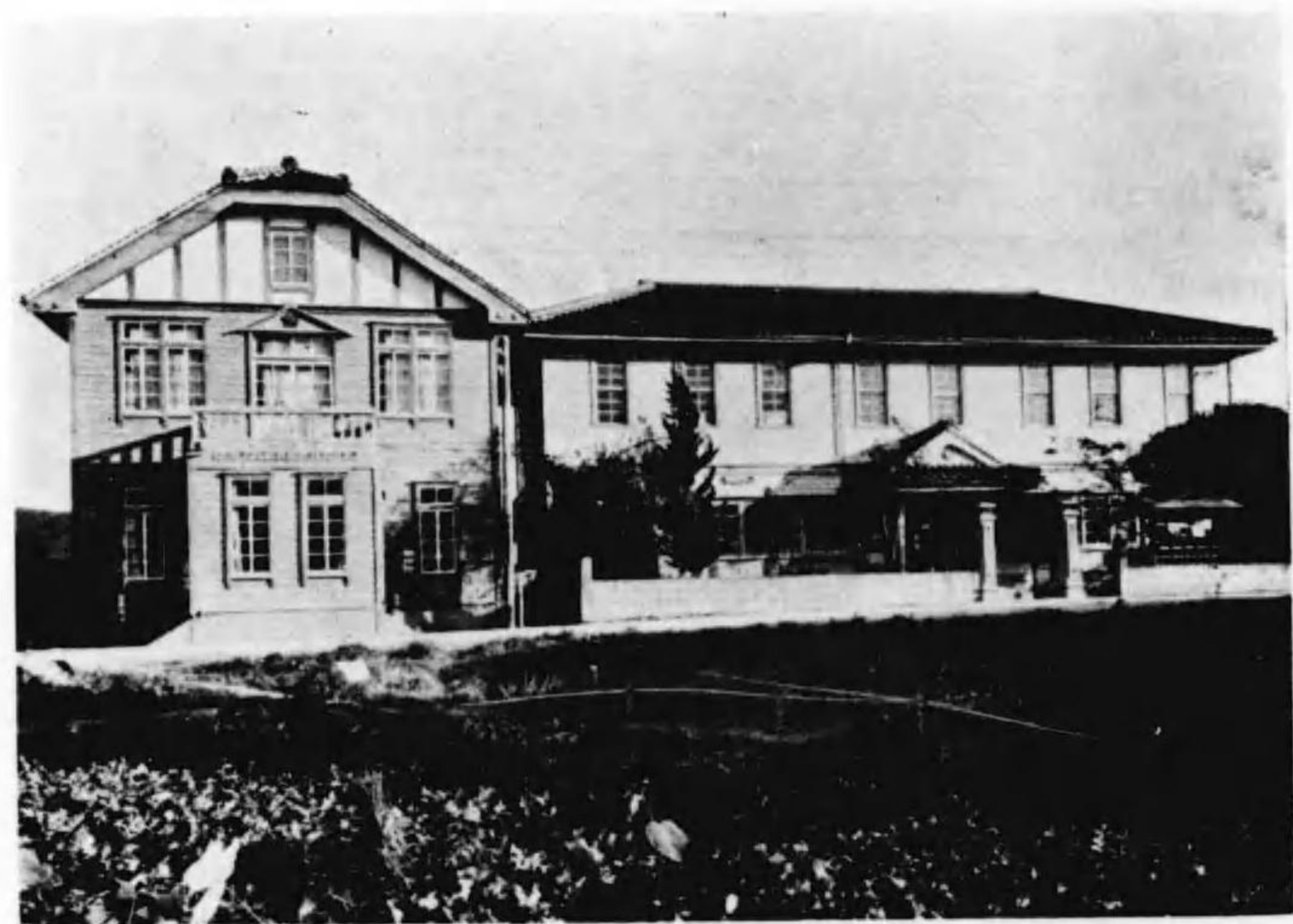


村社春日神社



郷社八幡宮





所務事合組業産村布周

場役村布周



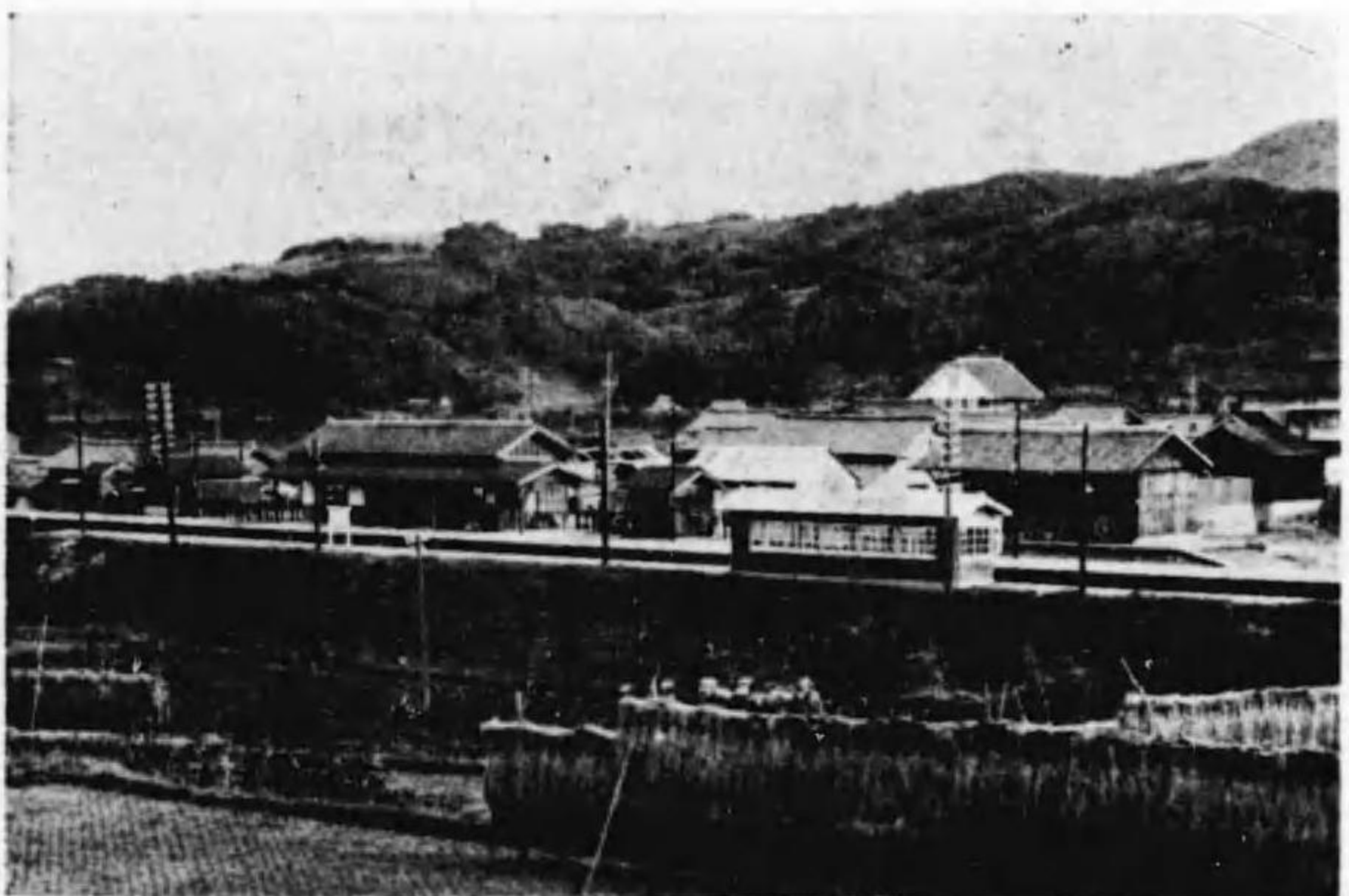
橋布周



寺德稱



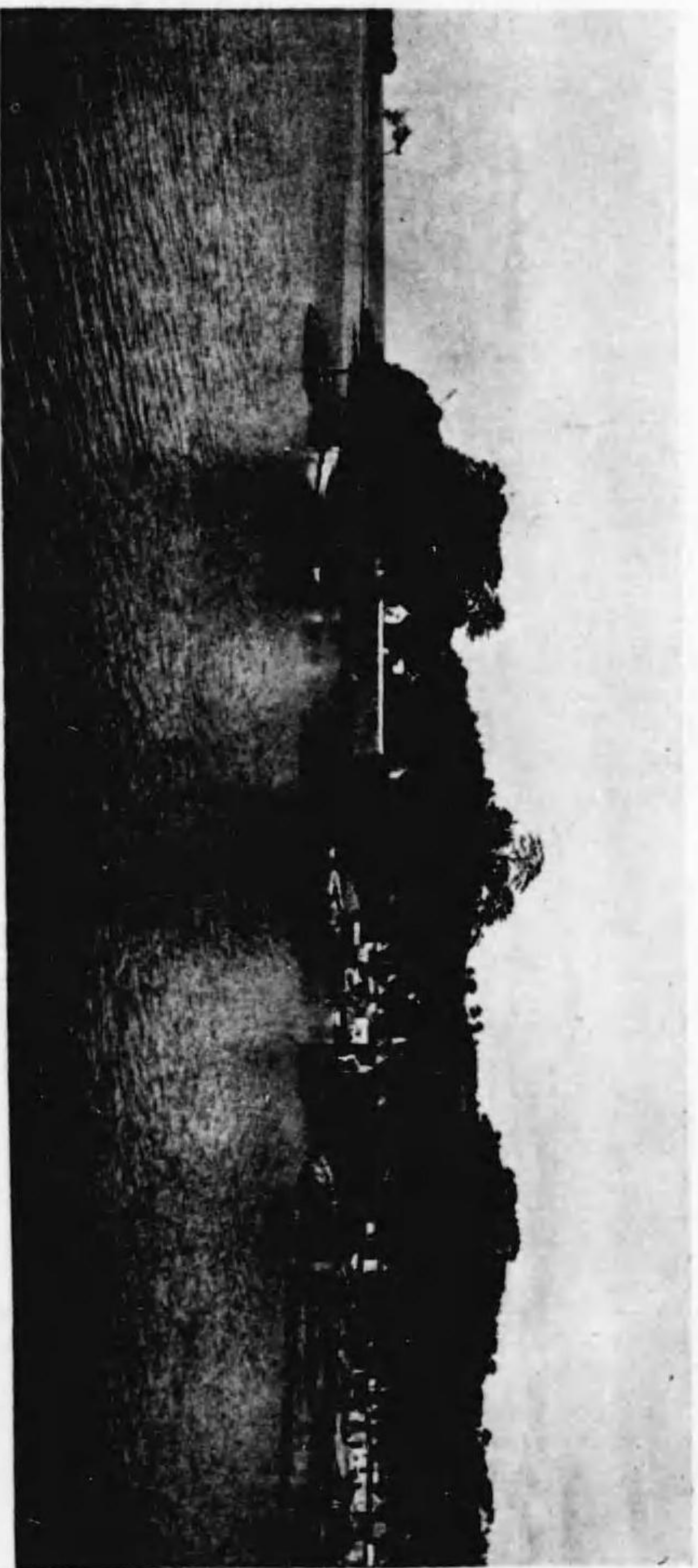
寺稱專



周 布 驛



周 布 郵 便 局



津 摩 漁 港

専稱寺横に立てば津
 摩漁港が全望される
 荒浪を助ぐ津摩丘陵
 風を避けて密集せる
 部落
 三万余圓を投じたと
 いふ防波堤
 青海に浮ぶ發動船の
 白い姿
 沖合はるか頸島を浮
 べ
 本村唯一の漁港の中
 心地である



釣 鮎



山 茸 松



場 工 造 製 器 陶 粗



場 絲 製

道の林の櫻



日脚光明院に櫻の古木がある。ある
尼僧が都の尊貴な方から贈られたと
いふ古い傳説から、御所櫻とも呼ば
れて名高いものである。春ともなれ
ば近郊から多くの人々が周布の櫻道
林の櫻見と群れをなして、あちらこ
ちらに賑やかな團樂も見うけられる。

周布村郷土誌

第一章 郷土の概観

我が周布村は日本海に臨み、山陰本線濱田より九・一杆の西に位し、汽車所要時間僅かに十七・八分であり、人口二千六百餘人、面積六方杆餘の小村であるが石見地方に於て最も早く文化が開け、然も一千數百年前に於て其中心地となつてゐた事は、昭和十一年十二月十六日付をもつて文部省から史蹟として指定された「周布古墳」が之を雄辯に物語つてゐる。これ此地方は古來文化開發に緊要なる地理的要素に頗る恵まれてゐるためであつて、試みに村東部臺地の中心、千疊敷に登つて展望すれば一見直ちに之を察知することが出来るであらう。即ち脚下に展開する肥沃な中央平原は耕地整理の跡目覺むるばかり美しく、四季折々の色彩を以て鮮かに錦を織りなしてゐる。

本村は、米、麥作を主とする農業地帯であり、其の東部日脚部落には桑園多くして養蠶を主とする農業地帯となつてゐる。此平原は平坦にして且廣く、其中央を北流して日本海に注ぐ周布川が豊かに之を育くんでゐる。

この平原の周圍は、周布川口附近を除いては概ね丘陵及山地であつて、北に津摩丘陵及三宅丘陵が峙ち、東は美しい草山の千疊敷を中心とし、北にむかつて本村東境に連互する東部臺地となり、遂に海に没し、南には鳶巢山を崛起せしめて周布川岸に急角度のスロープをなさしめてゐる。更に周布川を隔てて南境には米ヶ辻(三六七・二米)が高く聳え、其餘脈が東北に延びて周布川に逼り、西北に走つて本村の西境となつて遂に日本海に没してゐる。

此等西境の緩な丘陵の後方には隣村大麻山の秀嶺(六三〇米)が雄大なるバックをなしてゐる。而して鳶巢山は今を去る六百餘年前、足利氏が天下の覇權を掌握して四周悉くその麾下となつた時、敢然として勤王の旗を

挙げ三代の忠誠を全うした周布氏の古城址で、その武勇の譽は永く千載に輝き、後昆をして奮起せしめてゐる。彼の周布古墳は文化に於て、此の鳶巢城址は武に於て實に我が郷土の誇りの二大双壁であつて、我が郷土精神の根源をなすものである。この平原を圍む山地の中、東南部は特に松茸を生じ、周布川の鮎と共に其の名高く來遊する者が尠くない。更に目を遠く轉ずるに、北方に白砂青松の日脚の濱、西方に津摩の港灣を望むこゝができる。前者は砂濱、後者は岩礁を特徴する。この海岸一帯は水産業地帯として重視されてゐる。

この津摩の入江に周布川水流は、古及び現在に亘つて重要な場所であり、然も中央平原の廣い稻作地帯を有する。この地が古代文化の中心をなしたことは當然であると謂はねばならぬ。

人口密度は著しく大で、村民の大部分は農業を營んでゐる。氣候温和にして住みよい本村の産業は農業を第一とし、水産、工産、畜産、林産が之に亞ぐ。現在の形態上農業、水産業の方面を重大視して本村産業及び經濟の合理化を圖り其の充實と發展を期することが肝要である。

以上概観する所によつて、我が郷土は自然の恵を豊かに受け、眞に平和なる農漁村であることを知る、然し乍ら時代の進運に伴ひ我が郷土の文化を進め、其の發展を期せんには、我が秀麗なる郷土史の歷程に鑑み特色ある郷土相を審かにし、更に現代の時代相を洞察せなければならぬ。この意味に於て我等は以下章を追ひ、我が郷土の認識を更に深からしめんことを期すものである。

第二章 郷土の歴史

第一節 地名の起源

周布と謂ふ地名は、いつ頃起つたか明らかでないが、文献によつて見るに、

1 石見風土記

郡家正西一十里歩。和加布都主命。御狩爲坐時。則滿幕張度故和加布詔。故云我布（神龜三年改周布）とあり

「和賀布都主命ノ御狩仕給フ時ニ漫幕ヲ張渡ス故ニ周布ト詔リ云々」こある。

2 和名抄（平安時代）

「那賀郡ニハツノ郷アリソノ中ニ主万郷トイフ字見ユ。コレ後ニ周布ト改名セラル」こある。

3 八重律

周布村大字地名の起りが述べてある。

4 新撰姓氏錄

饒速日命（天火明命）の裔に周布連なるものあり。その子孫の住める土地であるが、又緣故によりて周布といふ地名が出來たのではないかといふ説もある。

以上の舊史より察すると、本村の地名は千數百年前既にあつたと思はれる。

第二節 神代

大昔、天豐足柄姫命の石見一圓御經營の當時は、その勢力下にあつたやうで、其の後は出雲朝廷（大國主命時代）の服屬に入る。素盞鳴尊の御子柁津姫命の傳説が津摩浦にあるけれども後に述べる事とする。（第七章 口傳傳説參照）大國主命第五子和如布都怒志命を祀れる宮が周布郷にある。命は本村の殖産奨勵上に多大の御治績があつた。神代時代は出雲朝廷の一部であつた。

第三節 國造時代

石見の國造が中央の記録に現はれたのは、崇神天皇の御代であるが、現在本村に存在を認められる古墳や三宅名からして當

時の様子を窺知する事が出来る。

本村は石見郷に於ける國造の支配下に朝廷の御料田として一部があてられてゐた時代があつたやうである。本村の如き邊陲の地迄も皇恩の惠温く輝いてゐたと思へば感慨の轉た深いものがある。

三宅の文字は宮家に通じ、倉田屯田を意味するものである。三宅の史上に現はれたのは、垂仁天皇の時を以て始めとされてゐる。

第四節 國司時代

鳥羽天皇の永久二年六月、藤原定道が國府に居た。定道通稱御神本二郎左衛門國兼といひ、任期満了後も土着して居た。その子孫の一人である兼定が本村に定住して周布氏第一代となつた。大化改新後約五百四十年間は本村も國司郡領の政下にあつた。

八重葎に見えたる周布村名の起源（原文に據る）

周布本郷 高二百一十一石二斗五升

抑周布本郷ト號所以者加布郡都主命ノ御狩仕玉フ疋ニ漫幕ヲ張渡ス故ニ周布ト詔リ我布神龜三年改ツテ周布トナル

日脚村 高二百二十石四斗四升

抑日脚村ト號所以者昔大木繁リ茂リテ品比少シ日脚照リ給フ故ノ名トス

原井村 高二百五十四斗四升五合

抑原井村ト號所以者昔此所原中ニ能水湧出ル井筒アル故ニ名トセリ

門田村 抑門田ト號所以者昔時御神本嶋集城ニ居玉フ時此里ニ門アリ其ノ所ヲ田トナシタル故ニ名トセリ 御世ノ

分村ナリ。

三宅村 高二百九十九石四斗五升

抑三宅村ト號所以者昔三宅ヲ建置玉フ所故ニ名トセリ。推古天皇十五年國毎ニ三宅ヲ建テ天子ノ御米ヲ入置キ貧民ヲ救ヒ玉フ其ノ藏ヲ三宅共文武帝ノ御宇儀藏トモイフ。

淡路廢帝ノ常平藏モ田施行米ナリ。三宅ノコト日本記ニ見エタリ。

津間村 高三十三石四斗三升五合

津間村ト號所以者東ハ角野津、西ハ高津ノ間故ニ名トセリ。

吉地村 高百三十五石六斗三升一合

抑吉地村ト申所以者往昔大穴持命 惣シテ國ヲ治ムルノ神吉祠ヲ八十ノ神々ト御儀有故斯云。其后三十七代孝德天皇大化元年御改ノ時吉事村四十三代元明天皇和銅六年御改メヨリ吉地村ト申ス由古老傳ニアリ。

西村 高三百四十七石一斗九升

抑西村ト號所以者屯倉有里ヨリ西ニアル故名トセリ。

和田村 高八十三石四斗七升九合

抑和田村ト號所以者川濁リ流ルル故ニ名トセリ。又嵯峨天皇ノ時、文屋和田麻呂石見守ニテ御下向ノ時此所ニ御留ヨリ名トモ申。石見軍記ニ叶ヘリ。左モ有可事ナリ。

中場村 高七十五石六斗四升

抑中場村ト號所以者山ノ崎出タル間ニ有里故ニ自然名トセリ

内田村 高二百十五石八斗六升三合

抑内田村ト號所以者内村ノ里分ニテ田ノ有所故名トセリ。

周布郷は一體され位の大きさであつたろうか、現在の周布、大内、漁山、三階の一部、大麻の東部に亘る地域であつたらしい。此の郷の中心は周布で司は三宅か門田か吉地に住んで居たと思はれる。

第五節 守護地頭時代

源頼朝が守護地頭の制を設けてから應仁の亂迄約三百年間、之が本村史中の華さもいふべき時代である。

A 鎌倉時代

周布殿の第一代は兼定で益田兼季の二子である。北條時宗時代分家して周布郷を領し地頭職となつた。村内高巢山に城を築いて之に據つた。

弘安四辛巳(一九四一)年兼時の二子末本兼直、多根兼政は各濱田及鍋島に於て蒙古軍を防いだ。兼定も津摩に砦を築いて蒙古の寇を防いだと謂はれてゐる。

B 吉野朝時代

第一代兼定第二代兼正は御神本氏名乗つたが、三代時兼に至り周布氏と改め領内の經營に當つた。時恰も北條氏の悪政に苦しみ京都に於ける英帝御醍醐天皇を中心とする政權回復の運動が起つた。時に元享三年藤原高持石見國守として赴任又藤原俊基が來たり兼連、兼家、高持等鳩首の上勤王を盡した。

主上隠岐國から還幸せられ船上山に在す時、三隅氏と共に兼家一族を引具して馳せ參じ京都に御供した。

建武二乙亥(一九九五)年足利尊氏が叛いたが、盡忠無二の忠臣のために延元元年正月遂に西走を余儀なくされた。

尊氏は上杉憲顯を使として石見の將士を招かした。兼連兼家等河内城、高巢城其他を嚴備して敵對行動にでた。

尊氏兵を率ゐる上途、五代兼宗父の志を繼ぎ備後福山に討つて出て大いにその先鋒を破つた。兼宗は右膝を射貫れ家子大貳法橋、若黨荒木刑部太郎宗盛等よく奮戦して戦死した。かくて必死的の攻防によつて見事敵を敗走せしめた。

延元元年七月二十一日兼宗、兼茂は三隅氏と連合して足利黨である益田城を攻撃した。兼連の長男兼和を大將、兼茂を副將として攻め城の一角を打破り、敵の部將大場篁房の首を得、大いに敵を惱して引上げた。その趣は周布家文書(萩藩閩録卷百二十一ノ四)

石見周布郷内田村地候孫六兼茂謹言上

右當國隆起元間屬三隅二郎入候信性桶籠河内城之處朝顔人大場益田二郎太郎兼行同舍弟三郎乙吉

十郎以上之祭率數千騎之軍勢等桶籠益田城之間今月二十一日押寄彼城擊破北尾崎水戸致散々合戦

大森代大兼房頭取畢仍大將三隅太郎兼和見知之上者早太郎一見狀爲備上覽粗言上如件

延元元年七月二十六日

承候畢

沙彌信性判

此の役に於ける兼茂の戦功を三隅兼連が認めて上覽に供したものである。如何に兼茂が奮闘したかを知る事が出来る。

延元二年四月上野頼兼は安藝、長門、石見の連合軍を率ゐる四月五日三隅に來り兼連兼宗に尊氏の書狀を示し、降伏加盟を勧めたが彼三隅一族は之を退け各地に轉戦し、五月小河關所を破り進んで長門阿武郡に入り彌富、福田、生質の各城を焼拂ひ二十二日賀年城を包圍した。この間に於ける周布兼茂の戦功に對して兼連が特に感謝狀を與へてゐる。

尊氏の書狀

石州凶徒誅伐事万廻時日馳下彼國相催一族等屬上野左馬助可致軍忠之狀如件

建武三年十二月二十三日

御判御神本彦次郎入道殿(周布兼宗)

尊氏 御判

兼連よりの感謝狀

石見國周布郷一分地頭孫六兼茂今月二十二日長州賀年城合戦之時家子内田彦太郎兼家頭打疵、中間平十郎頭打疵之條實檢畢

延元二年五月二十四日

石見守判(三隅兼雄)

興國元年(二〇〇〇年)賊軍上野頼兼、吉川經明等官軍工藤三郡を豊田城に攻めた。石見國司日野邦光、高津長幸、都野神主、周布、福屋、三隅入道等が援けたけれども遂にその効無く十月十五日豊田城陥落し、賊は勝に乗じて日野邦光を稻積城に攻め、興國二年正月十八日城を落した。

此項新田義貞の子義氏が石見官軍の總司令官としてやつて来て小石見城に入った。賊軍は福屋城を落した後全力を小石見城に傾注して来た。官軍全力を注いで防戦したけれども禦ぎきれず義氏は逃れて周布城に入った。

周布城主左近將監兼氏は賊軍の勢におそれ義氏に叛いた。兼家以後三代の孤忠はここに於て豹變してしまった。

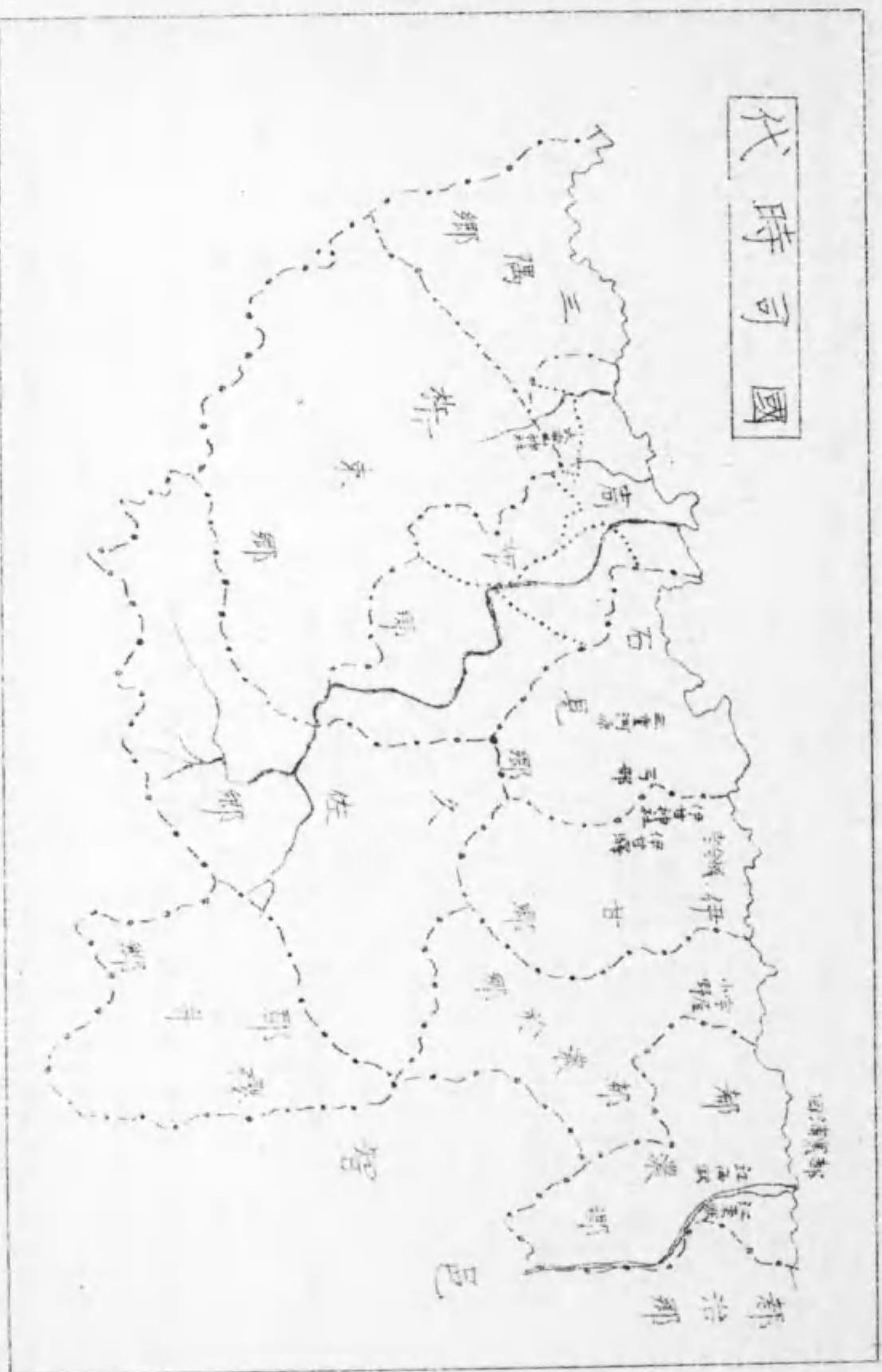
興國四年七月二十九日岡見の戦、八月七日黒澤城の戦闘の時再び周布氏は官軍に味方して奮戦。同年十二月二十五日井村城が賊の有さなつた爲、本村は又賊の手中に陥つた。

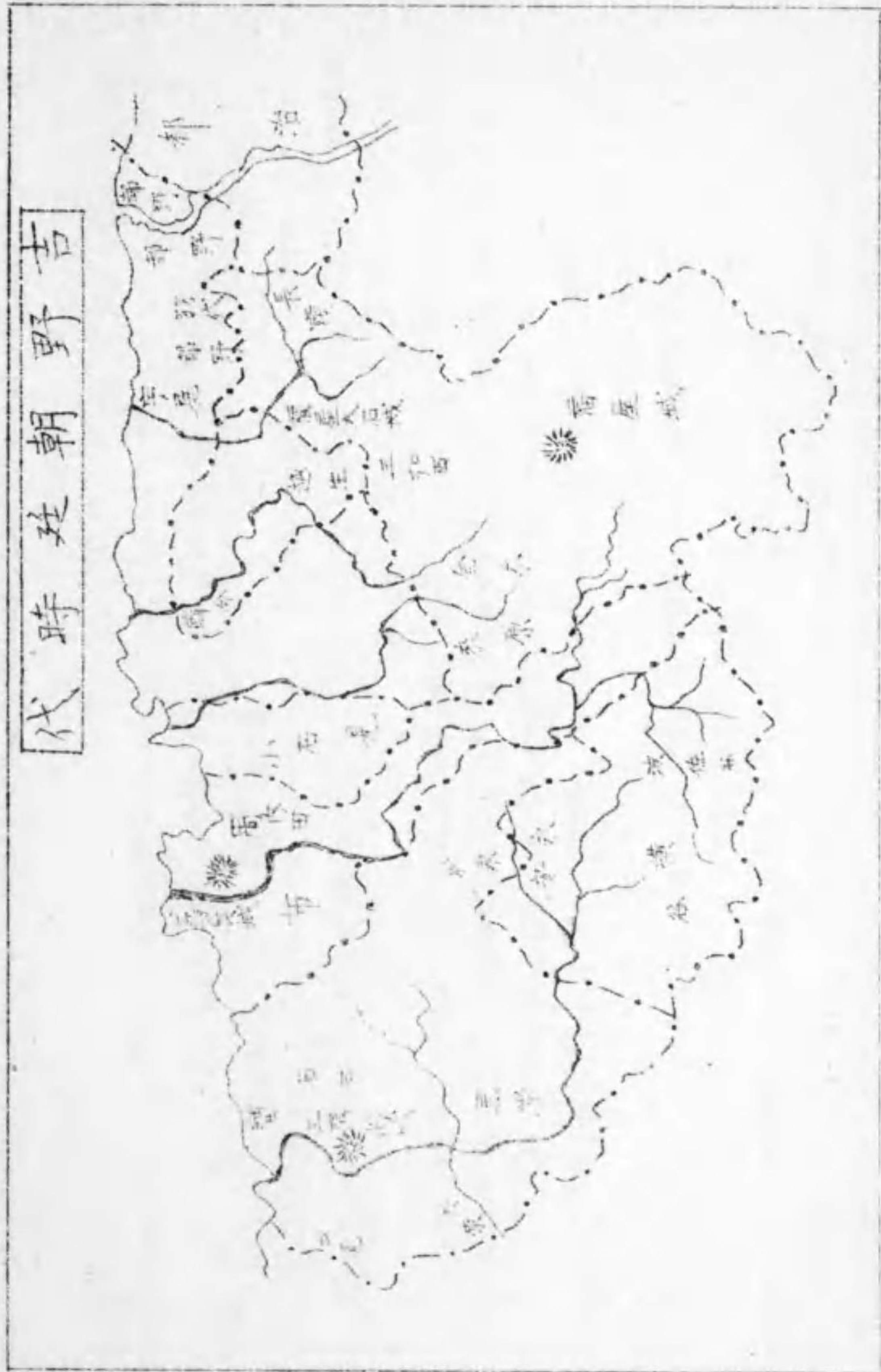
興國六年から正平四年迄の五ヶ年間は、周布より有福の一部に亘る那賀郡の中央部は殆ど賊軍の勢力下にあつた。其後正平五年は又官軍に味方した。六代兼長、七代兼氏、八代兼仲の三代である。其後賊軍三隅氏を圍み又々周布は賊の手に歸してしまつた。

要するに本村は吉野朝廷の初期に於ては兼家、兼宗、兼茂が勤忠を盡し賊軍を大いに破りよく奮戦した。けれどもその頃以後は三隅氏の強力に引きづられ或は武家の勢力に左右せられて極めて不安定、確固たる態度を探る事が出来なかつた。

G 室町幕府時代

應仁元年(一一二七年)細川勝元と山名持豊が京都で戦つた。周布氏は後者に味方し十一年間京都で戦渦の中に暮した。やがて勝元、持豊が倒れた。十一年の久しき戦闘に飽きた周布氏は歸郷し自郷の經營に力を傾けた。





第六節 群雄割據時代

應仁の亂に先きだつこころ二十年、文安四年丁卯（二一〇七年）周布氏第十代和兼は朝鮮と盛んに貿易をした。之は本邦貿易の急先鋒であつて、對島の宗氏におくれること五年、肥前の松浦氏におくれること僅かに約二年であつた。如何に時勢達觀の力があつたかを窺知することができる。

朝鮮申叔舟之海東諸國記

「丁卯周布兼貞子和兼親來受國書。書稱石見州因幡守藤原周布和兼約歲遣一船」

周布氏の御用船鑑札

御用船	天徳丸
周布家	監物花押

上圖は津摩浦米谷虫糞氏所有の御用船鑑札なりしが惜しい哉現今は紛失した事なり。

貿易品	輸入品	陶器類	緞子	繻子の絹織物の類	金製品等
貿易港	輸出品	刀劍類	紙	織物等	（刀劍は長濱に居住した刀工の製作したものが主である）
	輸入港	津摩	日脚		
	輸出港	長濱			

今日本村各地に發見せられる遺物の中に輸入された陶器と思はれるものが多い。津摩及三宅の畑中からも時々朝鮮焼、支那焼の器物が發掘される。尙ほ長濱の牛の首、及び津摩大崎の海岸にある「犬もどし」の金雞並に朝鮮釣鐘に關する傳説（第七章 口傳傳説）もこの周布氏の貿易の盛んであつた事を物語るものである。當時の周布氏の勢力は石西に於て第一位を占めるものであろう。明應年間將軍義種がその臣に追はれて本村葛巢城に來た時、和兼は厚く待遇し永正四年大内義興の命により京都に上り翌年

七月義種を復職せしめた。大内氏の後援があつたといふけれども、和兼がよく將軍を復職せしめたことは當時の周布氏の勢力の偉大さを示すに拾分なものがあろう。

大永元年九月二十九日尼子經久が石見に侵入してから、慶長五年關ヶ原の戦後、毛利氏が石見より手を引く迄約八十年間、大内、尼子、毛利等に周布氏は服屬してゐた。その中五十年は大内氏、尼子氏、毛利氏を代々盟主と仰ぎ後の三十年は全く毛利氏に臣事した。周布晴氏は山中幸盛等と尼子勝久を奉じて元龜元年五月濱田石川に於て毛利軍と戦つたが、衆寡敵せず退いて周布城に據り奮戦したが、晴氏は戦死し城は落ちてしまつた。山中幸盛は織田信長に助を求めた。信長、羽柴秀吉に命じて毛利軍を討たした。周布十兵衛元城、同左近將監元兼は毛利軍として従軍し、元兼はこの戦に於て華々しく討死した。

天正十年秀吉、毛利氏と和睦して世は大平なつた。
文祿元年秀吉が朝鮮征伐の擧を起すや、毛利軍として十五代元盛を始め武士及び軍夫、戦船、役夫等多數渡航した。
文祿二年六月下旬、朝鮮晋州城攻圍の時周布元盛は勇進奮戦し敵を惱したが、不幸敵彈に當り討死した。その激戦に使用した太刀は今尚ほ八幡宮の神寶として残つてゐる。その太刀には彈痕があつて當時の模様を追懐することが出来る。

慶長五年九月、關ヶ原の役が起るや周布氏は毛利軍として大阪に味方し出陣した。大阪方敗北の結果十六代長次一族を引具して山口縣阿武軍片股村に移轉した是に於て鎌倉時代以後榮へた周布氏なく、嵩巢の山のみ常盤に茂り昔時を物語つてゐる。

周布氏の家系

藤原定道—鎌足公第十七世の裔にして從二位大納言、人皇第七十四代鳥羽院の御宇石見の國司に補せられ永久二年申午六月下向、濱田庄一ノ宮濱に着居也。保安二年壬寅八月伊甘郷大濱に住耐故國兼云々。

二代 兼實

三代 兼榮—壽永三年四日源平戰爭の折、源義經に應じて出征し戦功あり。十一月二十五日兼榮、兼高父子宛、參河守源四代 兼高—益田に移り益田權介と稱す。建仁二年益田氏從來の佐々木氏に代りて石見守護となる。次子兼信は三隅氏を

三子兼廣は福屋氏を稱す。

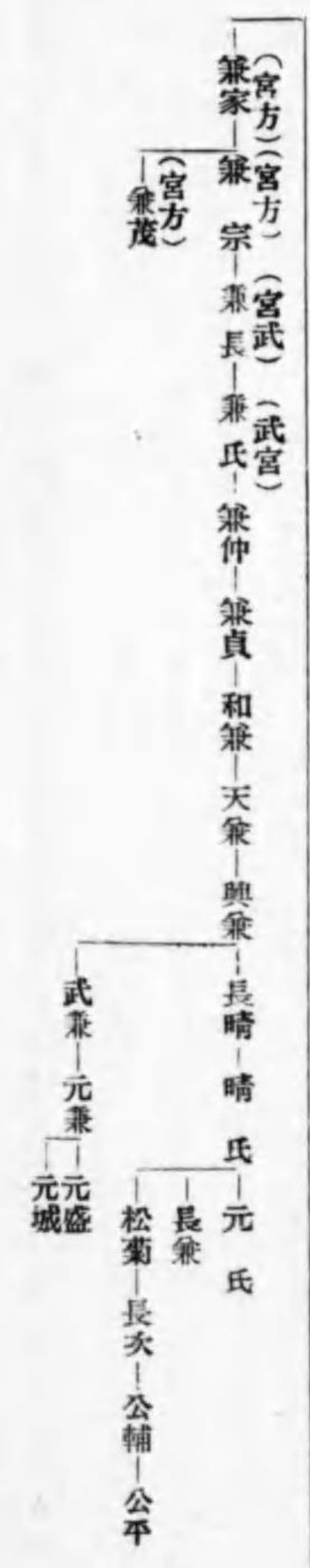
五代 兼季—益田右衛尉と稱す。次子兼定周布氏を建つ。

聖徳寺過去帳による周布氏家系

- | | | |
|-------------------|----------------------|-------------------|
| 一、左衛門兼定 (延暦元年) | 二、左兵衛尉兼正 (正應元年) | 三、次郎時兼 (永仁二年) |
| 四、彌次郎兼信 (元亨四年) | 五、石見守兼宗 (康永元年) | 六、彌次郎兼長 (觀應元年) |
| 七、因幡守兼氏 (康應元年) | 八、彈正少弼兼仲 (應永九年) | 九、因幡守兼宗 (永亨十年) |
| 十、因幡守和兼 (延徳元年) | 十一、左近將監元兼 (永正三年) | 十二、式部少輔兼 (亨祿元年) |
| 十三、左近將監武兼 (天文十九年) | 十四、兵庫頭元兼 (天正六年) | 十五、孫右衛門尉元城 (文祿二年) |
| 十六、吉兵衛尉長次 (慶安二年) | 十七、備前守元眞 (萬治元年) | 十八、吉兵衛尉就里 (貞亨四年) |
| 十九、孫右衛門兼寅 (正寶九年) | 二十、彦次郎定道 (寛延三年) | 二十一、吉兵衛兼達 (明和二年) |
| 二十二、勘解由 (文化元年) | 〔備考〕 數字……代數 ()……死亡年 | |



周布氏の系圖



第七節 大名時代

江戸幕府創立より大政奉還までをいふ。
本村は濱田領に屬し石高は一四二七・三四六石である。

内 譯	周 布	三三二・七五三石	日 脚	一三六・二八五石
	三 宅	三〇九・七一八石	門 田	一三四・六四石
	原 井	二五七・六七五石	吉 地	一三八・八七石
	津 摩	三八・一五四石	計	一四二七・三四六石

覺

石州濱田領
津摩浦作藏船

一貳人乗 三十日限リ

右ハ商用ニ付雲州宇龍港迄罷越
申候宗門以下相違無此候條往來
無滯御通可被下候 以上

右浦大年寄

桑原市郎右衛門花押

慶應二丙寅年

八月晦日

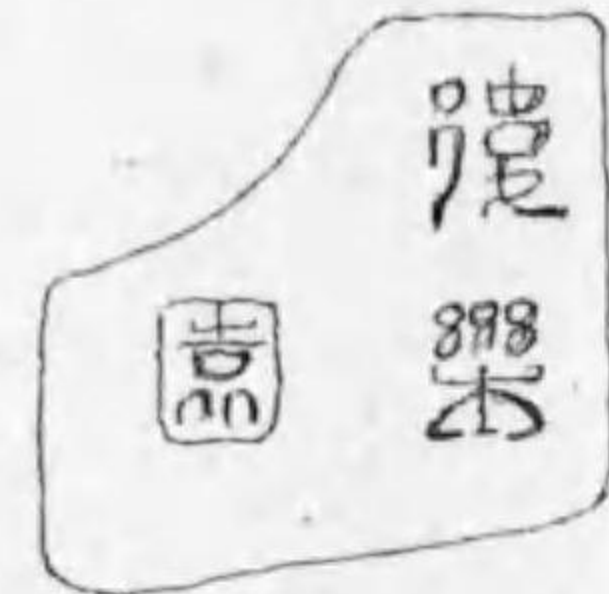
海陸御番所

大名時代になりても本村民の海國的氣象は益々旺盛にして、上欄に掲げるものは其の一端を語るものである。
これは米谷虫養氏の藏せしものなり。

松平齋厚は六代將軍の弟で、山崎闇齋の學を奉じてゐた。幕府の老中たるこ
こ三十余年、將軍の信頼を受け、藩の治政よく整ひ、永康倉を建てた。自ら
永康倉の文字を書いて額面に彫らせて村々に與へたといふ。本村は新市神明
山の下、今の駐在所附近にこの倉を建てた。此の地は今も倉地といつてゐる
額面は神明神社に奉納されてゐたが、今は三宅の宮に納つてゐる。横四尺、
一尺五寸、永康倉の文字は中心に、強樂園、從四位之少將源齋厚、石州濱田
大守、天保戊戌等の刻字がある。
左にそれらをか、けて見ん。



正 面



側 面



第二回長州征伐の時、幕府に與み
し長州軍ミ周布平原に於て激戦した
が、利非ずして敗れた。
聖徳寺の本堂の柱には其時の戦を
物語る彈丸の喰込んだ痕がある。
幕軍にミつて代つて入村した長州
軍は、吉地大谷氏邸を本陣として、
濱田に進軍した。幕軍利非ずして敗
走し濱田、大森一帯は長軍の手に歸
した。將軍家茂薨去するや兵を收め
戦は一段落となつた。此の戦は幕府
の威信を失墜せしめ、王政復古の大
事業を早からしめたのであつた。

第八節 現代

幕府が大政を奉還して慶應二年七

月十八日から濱田領、銀山領、山口藩の管理になり、明治二年八月二日大森縣の設置によりその管轄下になつた。
明治三年正月九日大森縣が廢せられ濱田縣となつた。明治五年に大地震があり海岸一帯が陥落した。明治九年濱田縣が島根
縣となり戸長役場が設置せられ、本村全部及大麻村の一部を支配した。

明治二十年自治制發布に際し現今の五大字を以て組織した。當時の村長は佐々木保太郎氏であつた。

第三章 古墳

千數百年前石見一圓の文化の中心地であつた本村には、既に幾多の古墳が発見されてゐる。場所は上圖に示すやうに主として鰐石、三宅、日脚、千疊敷等にある。其中三宅にある「瓢塚」は昭和十一年十二月十六日史蹟として指定されたのである。

周布村古墳分佈圖



瓢塚

周布村大字治和字三宅ノ根口一〇〇九番ノ一にあつて、前後圓型のもので封土は畧二段に築かれ南々東に面してゐる。長徑約百二十尺高さ約十四尺。表面に葦石を存し松樹等が生育して美觀を呈してゐる。後圓部の頂上に凹處がある。前方部の東側は隣接した宅地擴張のため削られた部分があるが、略全型を残してゐる。石見に於てこの種の代表的のものである。

官報 第二九八八號

文部省告示第三百六十七號

「史蹟名勝天然記念物保存法第一條ニ依リ左ノ通指定ス」

昭和十一年十二月十六日

文部大臣 平生 鈞 三郎

第一類

史蹟

名稱

周布古墳

地名、地域

島根縣那賀郡周布村大字治和字三宅ノ根口一〇〇九番ノ一

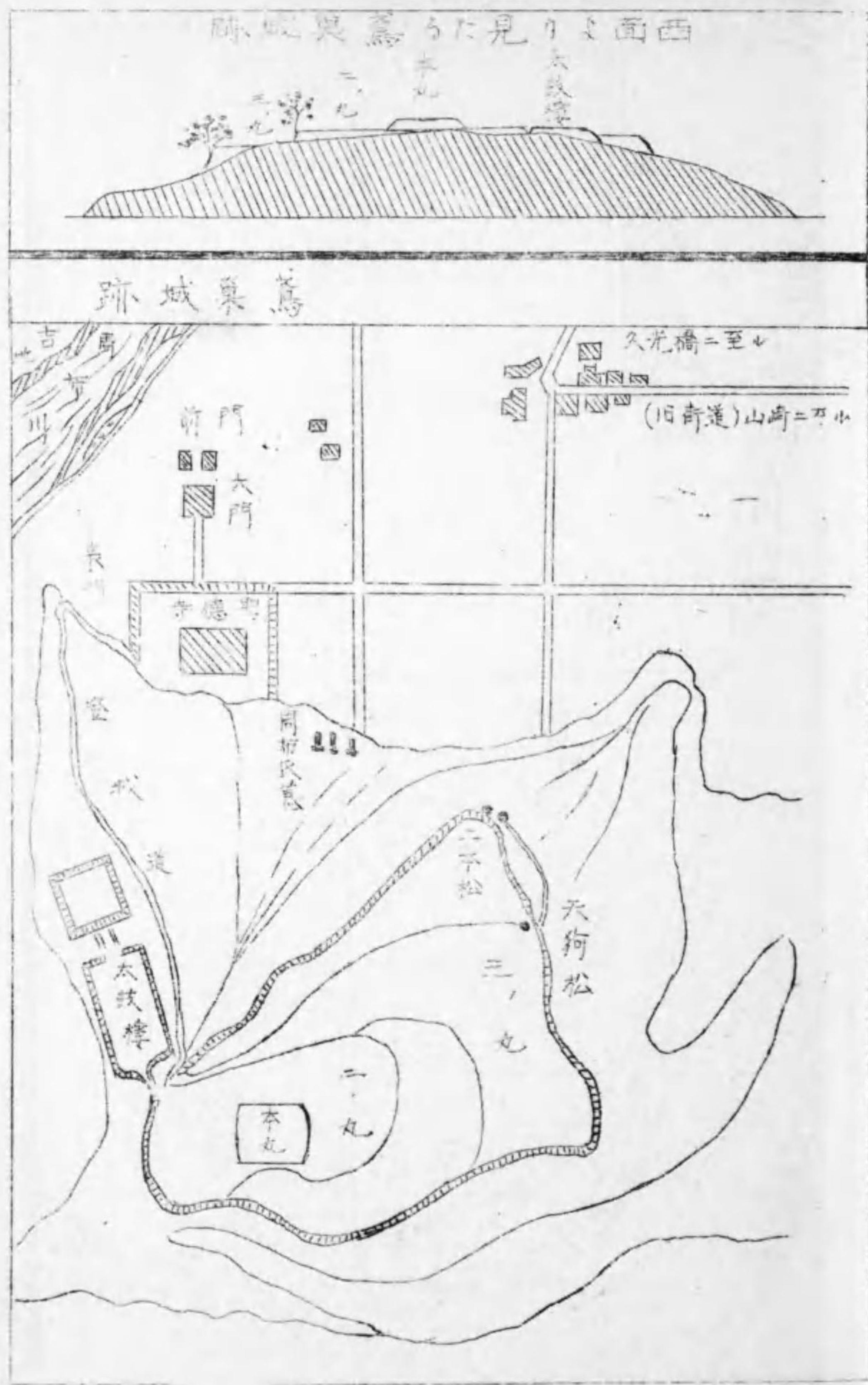
他の圓頂塚は山麓及び中腹に數個存在し、何れも直徑四五・六尺乃至八〇尺あつて高さも八・九〇尺のものである。其の頂上に立つて見る時、旭光に照り輝く景勝は繪の如く、双眸に收められ上古の聖地として選擇された由來が頷ける。斯如古墳の存在から見ても兎角本村に千數百年前、既に文化の相當發達した民族が居住してゐたと思はれる。

昭和五年十月三宮の古墳開掘の際に、杯、高杯、埴、刀劍等が発見された。之等は現在小學校に保存されてゐる。

第四章 周布城址及城下町

周布城址

周布城は本村東南隅に位する標高五十米の鷲巢山にあつた。鷲巢山は高野臺地の南西に突出した丘陵で、東北は廣々とし



城 下 町

た周布平野を望み、西は周布川を隔てて吉地部落を下瞰し、米ヶ辻、大麻の峻峯を望み南は和田を経て内田の盆地を展望する。眺望絶佳、見る者をして其の景勝の美を三歎させずに置かない地点である。昔時の表口であつたと言はれてゐる聖徳寺南側の墓場道から登るこま半町許りにして坦々たる廣場にでる。口傳に此處を太鼓樓といひ、昔、朝夕の時刻を知らず太鼓の音が此處から村全體に響き渡つたと。北に進むこと十米余りの所に廣い城趾がある。これが本丸、二ノ丸、三ノ丸である上城趾は東西約百米南北約百四十米の平坦地を劃して作られてゐる。

天狗松は昔時の庭松の成育したものであると言はれてゐる。東南千疊敷の丘陵に續く部分が城の搦手である。この搦手から千疊敷丘を通して水を引いたと言傳へられてゐる。

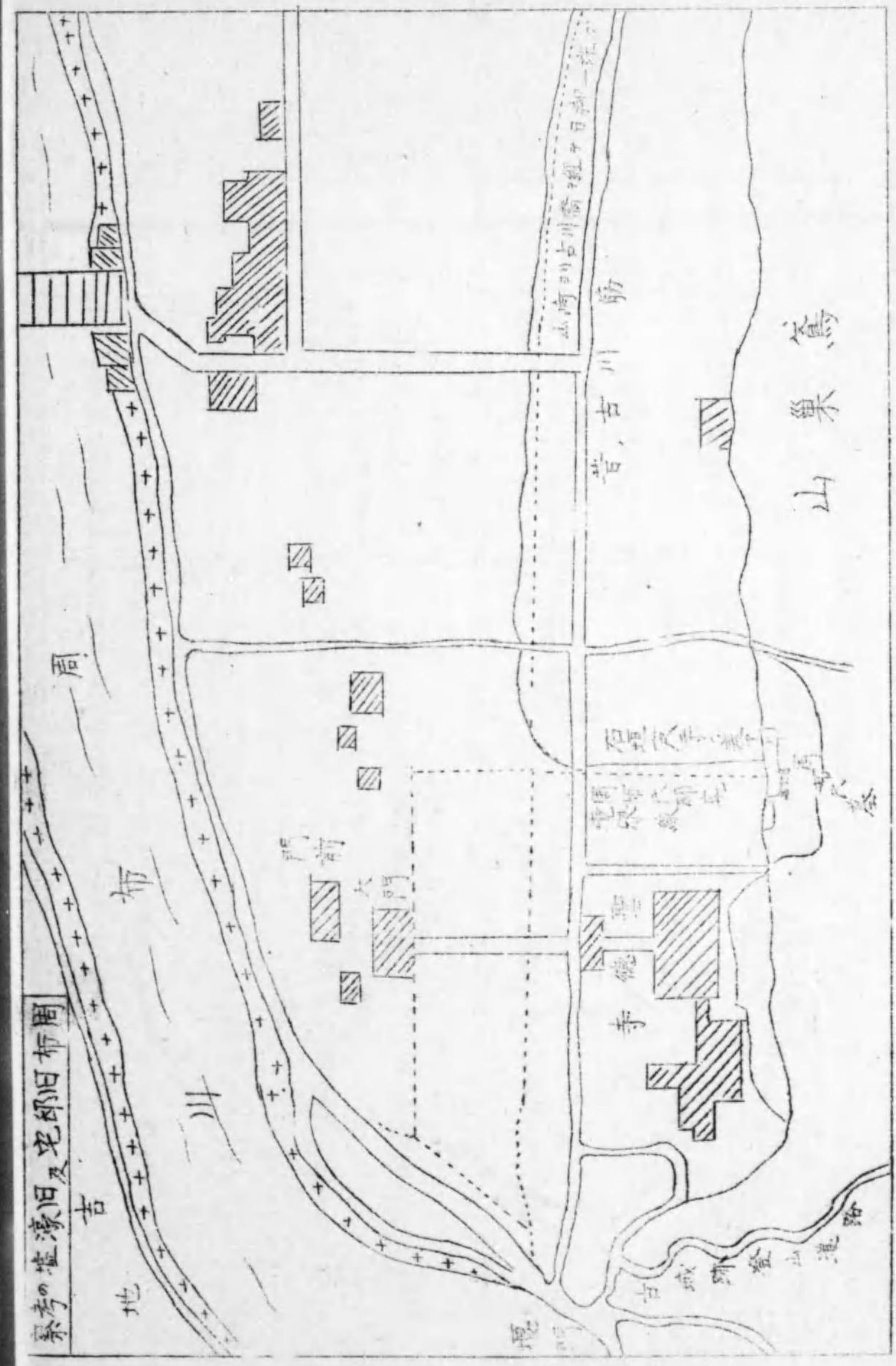
周布氏邸は現今の聖徳寺の境内がそれで、今の四、五倍もあつたと思はれる。この附近を中心として舊街道即ち山崎より來り久光橋を渡り三宅に出る道に沿ふて發展したものである。聖徳寺の正門の真正面に大門とか門前とかいふ家がある。此處は昔の大門のあつた所だと言傳へてゐる。

周布氏邸の近傍には重臣の邸宅があつて、舊街道に沿ふて繁華な民家が櫛比してゐた。今は昔日の面影もないが四、五軒残つてゐる家の中に「札場」とか「まぎや」といふ昔を偲ばしめる家號が残つてゐる。

本村と美川村の境界に残つてゐる堰は周布氏極盛時代に造つた濠溝、古川へ水を引いた堰門のあつた所である。古の濠はこの堰門から聖徳寺の門前を通る道に沿ふて東流し、山崎に出て西北に折れて古川橋に來り、日脚の川口に注いだものである。相當水深もあり幅もあつたをみて、古老の説による大型の荷物船も引き入れられたらしく、今も春日神社の近所に昔の船着場を意味する綱目といふ家號を傳へる家がある。

山崎街道は國司時代から重要な交通路で、隆盛の頃は長濱港に送る荷車や歸る馬、行交ふ人々で賑はつた。そして城下町の灯が夕になるに美しく、笑ひの聲も村に満ちてゐたことであらう。

周布川古地
 周布川古地
 周布川古地
 周布川古地
 周布川古地



2000 1900 1800 1700 1600 1500 1400 1300 1200 1100 1000 900 800 700 600 500 400 300 200 100

年
代
御
登
代
時
代
郷
土
時
代
事
蹟

神代

創

業

時

代

奈良時代

平安時代

藤原氏

平安時代末期

國府時代

代

時

造

國

素戔鳴尊津彥ニヨラレ。御子根津槿佐良ニ
殖産ノ智識ヲ授ケラル
石見天豊足柄姫命

大屋子命初メテ石見國造トシテ末リ跡ヲ

忌部一族来リテ大祭天石門彦神社大森神社ヨツル

柿本八森呂石見國府トシテ下向ス(一三六五)

國分寺ヲ建ツ(二四〇七)

新羅來寇ノ備ヨナス(一五八七)

日射ノ窟宮建立(一七七四)

生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)
 生天定禰石見守護トシテ(一八四三)



2800 2700 2600 2500 2400 2300 2200 2100 2000 1900 1800 1700 1600 1500 14

奈良時代

平安時代

藤原氏

鎌倉時代

北條氏

室町時代

安土桃山時代

足利氏

江戸時代

徳川氏

東京時代

明治時代

國府時代

平安時代

鎌倉時代

吉野時代

群雄時代

毛利領時代

徳川直領時代

古田侯時代

先代松平周防守時代

島根縣時代

現

國分寺ヲ建ツ(二四七)

新羅來寇ノ情ヲ示(一五八七)

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

第五章 神社佛閣

郷土民が幾百年の昔から親しく氏神として祀る鎮守の宮居、郷土民の純真無垢の精神を培ふ神社、郷土民の思想、信仰の中心である佛閣について述べる事とする。

▽天上ヶ岡八幡宮

場所 周布村大字日脚

社格 郷社

祭神 應神天皇、神功皇后、武内宿禰

由緒 人皇第七十四代鳥羽帝の御宇永久二年宇佐八幡宮より勸請したと傳へられてゐる。日脚外十五ヶ村の氏神である。元、周布城主藤原國兼以下代々鎮守神として崇敬し次いで松平周防守、松平右近將監諸氏の崇拜した神社にして、天養甲子年周布城主より田二町七段歩の寄附を受け、天正の頃には社領三十五石を給與せられたといふ。元盛以後減じて僅かに五石二斗となる。明治五年村社に編入せられ、明治四十三年神社合祀の令が下り津摩の假屋神社、三宅の神明宮、吉地の王子八幡宮、門田の大元神社と合併した。大正十年八月十八日郷社に昇格

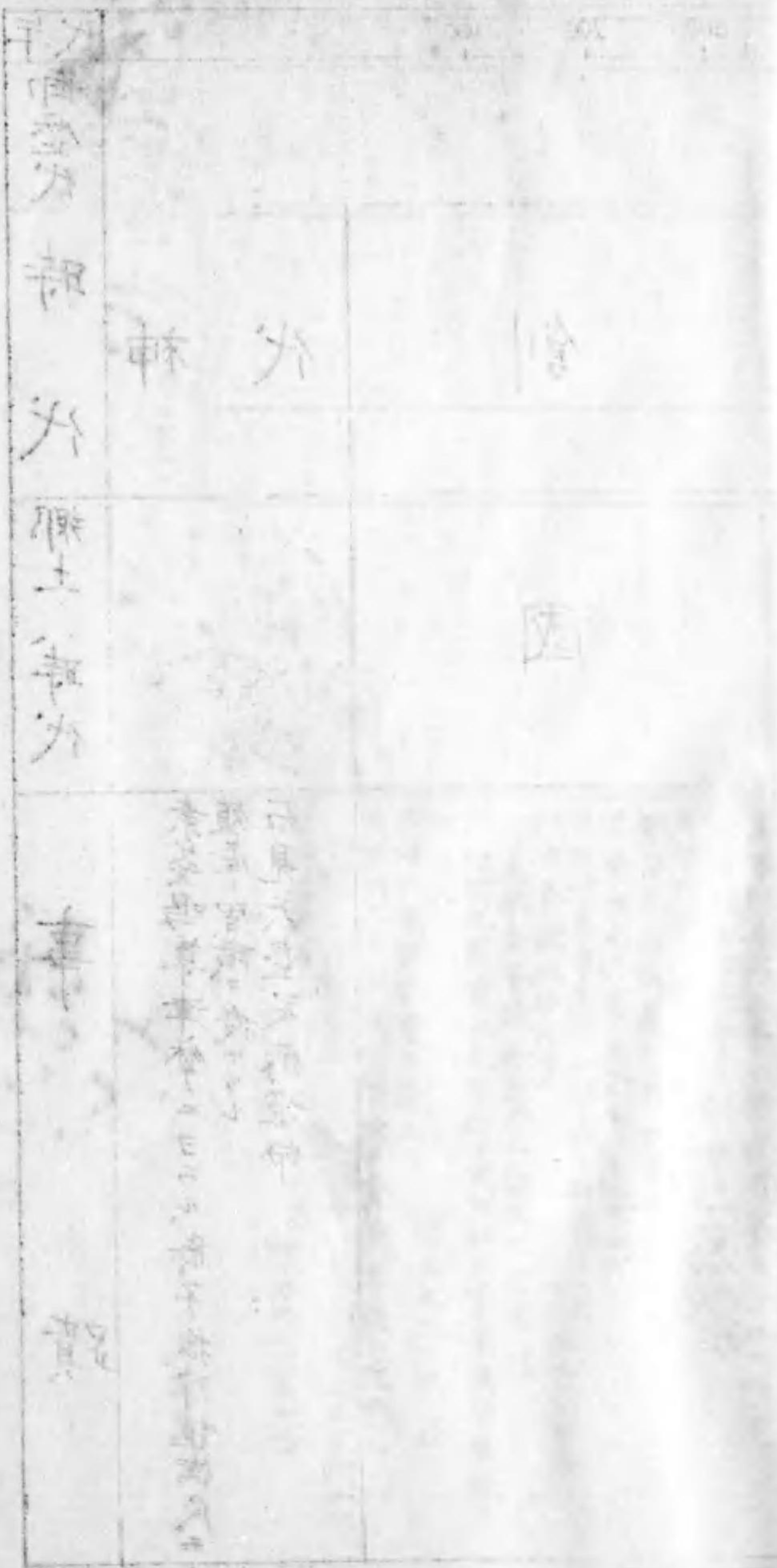
寶物 太刀二振 獅子頭二頭 其他二、三種

▽春日神社

場所 周布村大字周布

社格 村社

祭神 天兒屋根命、武甕槌命、經津主命、姫大神、齋主命



由緒

天兒屋根命二十一世大織冠鎌足公より十六代大納言從二位藤原朝臣國兼、永久年間石州の國司となり、益田七尾城に居住以降五代藤原兼時二男兼定が周布城主となつた。則ち周布氏の元祖である。故に當社を創立したと傳へられてゐる。勸請年月日不詳。

然るに周布家滅亡の後、之に隨つて當社も亦衰へ、神鏡の坐所も有名無實の折柄、神鏡が社殿の側の木にかかつてゐたのを、寛保二戊年領主松平周防守が社人牛尾重久に命じて近郷人に説かして再建したといふ。

明治四十三年原井神社（祭神水波能賣神）を合祀。

神社の境内に稻荷神社がある。祭神は稻倉魂神、佐田彦神、姫大神である。

▽徳寺

場所 周布村大字周布

宗門 曹洞宗

本山 補岩寺末派

本尊 釋迦如來

由緒

推古天皇十六年聖德太子の刻まれた佛像が安置してある。正中元年周布城主兼信が其の封七十貫を割いて莊を與へて一禪師を請した。其後應永年間洞雲胡泉禪師が錫をこの地に駐めて布教した。元盛深く之に歸依して再び百二十貫の地を寄附した。文祿、天正の頃から戦亂相繼ぎ領主封を他境に移したため寺運が大いに衰へた。此時幸にも泰屋雄禪師が來錫して古刹の頽廢を慨いて再興に勤め、經營二十年その努力が遂に報ひられて歸依する者が多くなり、又昔時の状態に復した。依つて彼を推して開山の祖とした。時に後水尾天皇の寛永三年であつた。

明治五年に至り不幸にも震災に罹り堂宇が全潰した。翌六年原光和尚が周圍の困難を排して再建に従ひ數年に

檀徒 四百二十軒

開山堂 本尊 開山洞雲湖泉和尚

由緒 創立文政十二年隻眼建立

地藏堂 本尊 地藏菩薩

由緒 創立天明三卯正月道球建立

▽淨琳寺

場所 周布村大字周布

宗門 眞言宗（高野派）

本山 正知院末派

本尊 藥師如來

由緒 維新の頃大麻山專稱寺の本尊であつた十一面觀世音を併せ祀つてある。久しい間無住であつて寂漠であるが境内に櫻樹立ち並び春時には遊客來つて賑かである。

▽常福庵

場所 周布村大字津摩字觀音山

宗門 天台宗

本山 明星院末派

本尊 聖觀世音菩薩
由緒 法孫開山護國法印寶曆十一巳年創立

▽光明院

場所 周布村大字日脚道林
宗門 眞言宗
本山 三寶院の末派
現在住職なく寂漠である。

▽専稱寺

場所 周布村大字治和
宗門 眞宗
本山 本願寺末派
本尊 阿彌陀如來
由緒 寛永年間開祖善知創立方今住職迄第十二世に至る。
檀徒 二百軒

以上の外に日脚靈光寺（聖徳寺の下寺）岡ノ根に光明庵がある。

第六章 郷土の偉人

本村義俠三郎右衛門

徳川幕府吉宗の享保六年の秋は大不作であつた。次いで翌七年は飢饉、此時に當り幕府は財政の困難に名を藉り、諸大名に對して祿高一萬石に付き百石宛の上納を命じた、生産者である百姓の生活にこの事が大いに影響し、それでなくとも困憊してゐる彼等の日常を一層おびやかす結果となつた。然も武士はその權力を恃んで苛斂誅求を事とし、恰も百姓を奴隸視した嫌ひがあつた。且つ檢地は屢々行はれ、役人は競ふて増高を出すを唯一の仕事と考へ、執拗に各地を檢分して無理強ひに租稻の増税を計り、爲に百姓の困苦はその極に達した。吉野以來正義を誇る本村民は何條これを黙視しやうぞ。一村の死活、引いては藩内百ヶ町村の死活問題である。ここに於て藩下幾十萬窮民のために吉地村庄屋兼原井組庄屋三郎右衛門を中心にして、頑強な對抗策を樹立したのである。

時恰も享保七年、周布郷檢地のある年である、檢地の前夜、本村庄屋の主だつた連中は三郎右衛門を首領として鳩首協議した。翌朝檢地官が本村に來て見るに、何たる狀影であらう。何れの田にも道にも人糞が山と積まれてあり、臭氣紛々として鼻をつき足の踏場もない。流石の役人共も竿入をすることが出來ず、避易して空しく立去つたのである。

其後享保八年三月六日、三郎右衛門斬罪に處せられ家族は所拂ひ、家産は闕所になつた。現在の吉地大谷家前の田圃がそれで、其後開墾せられて今日に及んでゐる。三郎右衛門の處刑にあつて、本村民は擧つて恩人の救命を叫び、減刑を嘆願したが遂に聞きいれられなかつた。

惟ふに三郎右衛門の義俠は元祿時代の情風、尙ほ覺めやらぬ享保の遊治武士に一喝を喰はした痛快な美事と言つても敢て過言ではなからう。周布淨琳寺に今も尙ほ彼の靈は靜かに眠つてゐるといふことである。

探玄和尚の功德

明和四年九月、光明院五世探玄如海法師は九州に巡錫し、その砌り甘藷の種子を携へて歸り之を邑中に培植せしめた。之より近里遠村に傳播した。以來不作凶年にも其の窮死から逃れる事が出来た、村民はその恩澤に感謝し醴金して碑を建て井戸氏と共に之を尊崇し、爾來毎年八月二十一日を「掘り初め」と稱して甘藷を光明院の彼の靈前に捧げ、報徳の祭祀を怠らないのである。

第七章 口碑傳説

▽津摩の名の起因(三説あり)

1 ツマの意味は津ミ津ミの間の港ミいふ説

津ミは港の事で昔から相當榮えた港を津ミいつた。古老の話によるミ東に江津、西は高津その中間であるから津摩ミいつたミ。現在江津も高津も港ミしては昔日の面影は更にはないが、古記録を調べてみると以前は相當隆昌であつたと明かに語つてゐる。今の津摩浦を見て昔時は相當な港であつたこは地形上から容易に判断する事が出来る。

2 ツマは妻の轉化したるものであるミいふ説

周布氏の時代、津摩のある大家の娘が寵愛を受けた事があり、それを無上の名譽ミ考へてこの部落をツマ(妻)ミいふやうになり、更に津摩と轉訛したミいふのである。

3 素盞鳴尊の御子、狐津姫の狐から來てゐる説

素盞鳴尊が朝鮮から出雲への歸途五十猛命(大屋彦命)、大屋津姫命、狐津姫命の御三方を伴はれて津摩に寄られ、狐津姫

が上陸されて住民に殖産の知識を授けられた。これよりツマの名が起つたミいふ説。

▽道林の櫻の由來

周布村大字日脚光明院の櫻はその樹齡すでに古く、枝葉茂りて春霞の候ミなるミ絢爛として滿開し、その名地方に喧傳されてゐる。

此の櫻を一名御所櫻ミもいふ、其の理由は昔、尼僧が上洛した時、尊い人と不思議に縁を得、御所の櫻の一株を贈られた之を持ち歸つて植え育てたミ言ふ事である。

「古の奈良の都の八重櫻 今日此處に來て匂ふ心地す」

(讀人知らず)

▽ミダレ橋

周布村大字日脚宇山崎の光明院を下るミ國道に架つてゐる小木橋がある、之が即ちミダレ橋である。

昔、和泉式部が筑紫の國に行つて居る夫を慕ひ、遙かに都から下り漂ひ歩く中、身重であつたので東の生湯の里で小式部を分娩した。其後幼兒を懐にして此の里に辿り着いた。日は暮れかかり五月雨は降つてゐるし、宿るにもそれらしい家が附近に見當らないので、大變心細く且つ寂しく思つた。其れにかへて加へて幼兒は泣き叫び、乳房をふくましましたが旅のやつれで一滴の乳汁も出ない。抱き上げてあやしたけれどもその甲斐がなく、途方に暮れてこの橋迄來た時、遙か夕陽の今將に水平線に没しやうミする方、日のはしに一点の灯が見えた。式部は非常に喜びその灯を指さし示して幼兒をなだめたら、不思議にも火のついたやうに泣いてゐた幼兒がピタツミ泣き止んだので、今迄の心の悲しみも亂れも去つたといふ。これよりこの橋をミダレ橋ミいふのである。後になつて誰が言ふたのか、此の橋を削り煎じて夜泣きする子に飲ますミ忽ち泣き止むミ。今になつても橋板を削る村人があるさうである。

▽大麻山神と須佐高山神との石合戦

大昔、大麻山神と須佐高山神とが互に高さを言争つた。そして終にその附近の石を取つて投げ争はれた。その時の石が今も尙大麻山の西麓に澤山ある。又高山の沖に散在する島はこの石だ。云ふ事である。

▽八幡宮獅子頭の傳説

昔、異國の船が或夜日脚川口に碇泊した事がある。其晩大水が出て流された土砂のため、船底がつかへて船を出す事が出来なくなつたので、如何すれば善いかを思案してゐた時、獅子頭を二個積載してゐた事を思ひ出し、それを八幡宮に奉獻して祈願したところ、翌朝不思議にも船を易々出す事が出来た。云ふ事である。現在獅子頭は寶物として八幡宮に安置してある。

▽蛇 島

蛇島は日脚から長濱に傳はる海岸の附近にある島で、風波の激しい所である。昔、朝鮮から歸つた船が此所迄來た時、俄かに水が逆巻いて其の船を水中に引き入れた。そして船中にあつた金の雞と金の釣鐘を奪ひさられて、今尙はこの二品は附近の海底にある。傳へられてゐる。又此所で雞の鳴聲を聞いた人はその場でたちどころに死ぬ。云ふ事である。

▽菅浦の傳説

津摩に屋敷を酒屋と稱する家がある。或時化の夜、晝の疲れでぐつすり寝こんでゐた枕元に現在の長濱村天満宮の御神體が現れて「菅浦の沖に泊つたが上陸するのに適當の地がない。何處かよい地がないだらうか」と宣はれた。主人は驚いて目を覺したけれども御神體は見當らず、組戸の隙間から洩れる冷たい風が身にこたへるだけであつた。之は不思議な事だと思ひながら夜が明けるや否や舟を出し菅浦へ漕ぎつけて見る。前夜夢うつつに覺えてゐた通り、御神體がおいでになられたので、持ち歸らうとして、ふと頭に浮んだのは自分の村に安置すべき靈地の無い事であつた。そこで「約二十町先に長濱といふよい港があります。其處においでなさい」と主人が申し上げる。御神體が現在の長濱に行かれた。云ふ。爾來長濱天満宮の祭典の折に酒屋の主人が列席しなければ式が出来ない。現在に至る迄その言傳へが残つて居り、神輿を擔ぐ者は津摩から行く事になつてゐる。そうして酒屋といふ家は今尙ほ現存してゐる。(この傳説は人によりて稍異なる点がある)

▽郷社八幡宮から日脚海岸に至る道路にある松の大木についての口傳

豊臣秀吉が朝鮮征伐をした折、本村からも軍夫を出した。戦が終つて之等の軍夫が歸郷したが、戦に従つて偉勳のあつた大場氏が之の松を植えたと言ふ事である。歳月の立つにつれて現在の如き大木となり、日本海から吹き寄せる風があたる度に恰もその昔時を物語るかのやうに颯々音をたててゐる。大場氏は今尙ほ存在してゐる。

▽神代神樂舞

一、いつ頃始つたか

神樂舞は劇的要素と歌謠的要素から成立つてゐる。この神樂はいつ頃始つたかは詳かでないが、その説を二、三擧げて見ることにする。

A. 神代時代の説

天照大神が天ノ岩戸に御入り遊ばされた時、天鈿女命がその前で舞はれたのが始めてである。

B. 鎌倉時代の説

神樂舞の台詞の中に候文のある事からこの説がある。平安時代、奈良時代には候文はなく、鎌倉時代以後に始めて候文が使用されてゐるからである。

例 「高き低きのまん中にもう一度据置き歸るべく候」
「……………の神にて候」

の如く主として結びに候があるけれども、それ以外に所々にこうした証明的材料が見受けらる。

6. 平安時代の説

神樂歌が平安時代に出来たといふ漠然としたものである。

何れにしても確固とした事は言はれないが、本村に神樂舞が入つて来たのは、徳川末期から明治初年にかけてであるらしい。

二、神樂舞の變遷

周布村大字日脚、大内村大字内、大内村大字牛谷が合併して一つの舞組を組織してゐたらしい。この舞組は大内村大字内の代官屋の廣篤氏から舞を習つたものである。明治九年頃、動作、台詞等の改正の必要を感じて廣篤氏が苦心慘膽の結果現在の如きものを作りあげたのである。

三、如何なる時に如何なる理由で

主として神社の大祭の時、奉納の意味で舞ふのである。昔は村に特別の慰安がなかつた。そこで村人が舞組を招いて一晩中舞を見て樂しみ舞組は通夜して舞ふ。この事が神に對して無上の御馳走と考へられてゐたのである。

四、神樂舞の題材

神代時代、平安時代にあらはれた人物、事件等に對する善惡を國民に告白するに適當したものを擇ぶのである。

盤シホ援ハク
神向シムカウ
眞マコト神カミ

初めに舞ふもので眞の神樂舞である。

天ノ岩戸舞 天照大神が岩屋にお入りになられた時から、諸々の神が評議をして大神が岩屋から出られるまで

四人舞 四人の神が現れ屋内の四隅に潜んでゐる惡魔を追拂ふ事を表す

天神舞 菅原道真公の物語を表す

日本武尊舞 日本武尊の物語を表す

惠比須舞 事代主命の物語を表す

素盞鳴尊舞(大蛇舞) 素盞鳴尊が出雲簸川上で大蛇退治をなさつた傳説を表す

人倫舞 人間の心を表したもので、昔支那の玄宗皇帝が病鬼神のために病に罹られた時素盞鳴尊が退治されて全快された事

五郎ノ王子舞 知行のないために争が起るといふ事を現す、

五郎ノ王子は季に又方位にも例へてある。即ち長男が東、二男が南、三男が西、四男が北、五男を中央にする。

鐘 魘舞 魔を驅る神が魔を退治する物語

國譲り舞 大國主命が瓊々杵尊に國を奉る物語

法 因舞

五、如何なる服装で如何なる樂器で舞ふか

樂器は大太鼓、締太鼓(小太鼓)、手拍子、笛(竹で作つた横笛)等を使用し、服装は大体古代のものに擬へたものを着用

する。金、銀のモールドで刺繍したものを着け、面を被り、カッソウ、ヒゲ等をつかふ
六、本村神樂舞の様子

本村の神樂舞は昔時より盛んで現在も依然として隆昌を極め、他町村へ舞にてかける。
舞組のある所は左記の通りである。

- | | | |
|-------------|------------|--------------|
| 那賀郡周布村大字周布 | 那賀郡長濱村大字長濱 | 那賀郡美川村大字田橋 |
| 那賀郡美川村大字鍋石 | 那賀郡石見村大字長見 | 那賀郡石見村大字細谷 |
| 那賀郡石見村大字長澤 | 那賀郡石見村大字後野 | 那賀郡今福村大字リヨウマ |
| 那賀郡今福村大字津井 | 那賀郡今福村大字久佐 | 那賀郡雲城村大字伊木 |
| 那賀郡雲城村大字七條 | 那賀郡雲城村大字小笹 | 那賀郡今市村大字下來原 |
| 那賀郡今市村大字上來原 | 那賀郡井野村大字井野 | 那賀郡杵東村大字杵東 |
| 那賀郡三保村大字西河内 | | |

第八章 周布村の自然景觀

第一節 地理的位置と面積

周布村は、石見の文化の中心地である。濱田町より西南に位し、養蠶と無花果で有名な長濱村。田ミ山の美川村、山の多い大麻村と日本海に圍まれた小村である。

村の經度緯度

- | | | |
|------|-----------|---------|
| 極東東經 | 一三二度二分三五秒 | 高野長濱村界 |
| 極西全 | 一三二度〇分二六秒 | 津摩アゴ島西端 |
| 極南北緯 | 三四度五〇分六秒 | 美川大麻村界 |
| 極北全 | 三四度五二分三七秒 | 大崎北端 |

時間的位置

周布驛を中心として左の如く我が國繁榮地帯から遠ざかつてゐる。

- | | | |
|-------|--------|--------|
| 周布東京間 | 六二七・二哩 | 三一時間行程 |
| 京都間 | 三〇一・〇哩 | 一五時間 |
| 大阪間 | 三一六・六哩 | 一五時間 |
| 松江間 | 八一・三哩 | 四、五時間 |
| 濱田間 | 五・九哩 | 二〇分間 |
| 下關間 | 一一一・六哩 | 七時間 |

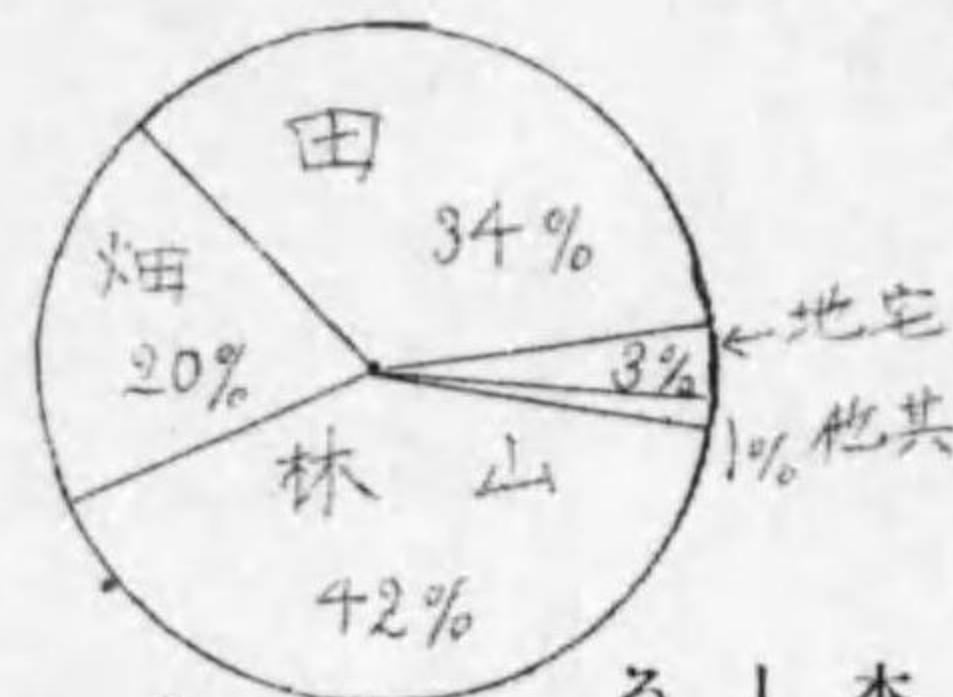
絶對面積

東西の長さ一・七四六軒、南北の長さ二・七二七軒で本村の面積は六・七八四軒で、那賀郡の約一七分の一を占めてゐる。

那賀郡村別圖



生産面積



本村の耕地面積(田畑)は本縣耕地面積の一四パーセントより稍大である。此の廣い耕地を有するのは清流周布川の影響するところ大である。

田 一六二九五・四 A 山林二〇七二・七 A
 畑 九三五五・五 A 宅地一五八一・六 A
 其他 三一六・八 A
 本村を地理的に大別するに、南部山地、東部台地、津摩丘陵、中央平原の四區なる。

第二節 地形

周布村は殆んき一〇米以下の平原で、東部に千疊敷(一八一・九米)南端に米ヶ辻が聳へ村の中央を周布川が緩に北流して日本海に注いでゐる。現在の周布平原が昔から今の廣さを有してゐたものは考へられない。地理學上第三紀生層に屬し、四繞してゐる高野、日脚、吉地三宅、津摩の各古生層地層が崩潰し、周布川が砂礫を運搬して出來た沖積平原である。昔は海岸線が現在よりすつみ内部迄入つてゐて現周布村の五分の二にあたるだけの廣さしかなかつたと思はれる。



千疊敷より眺むる古代圖

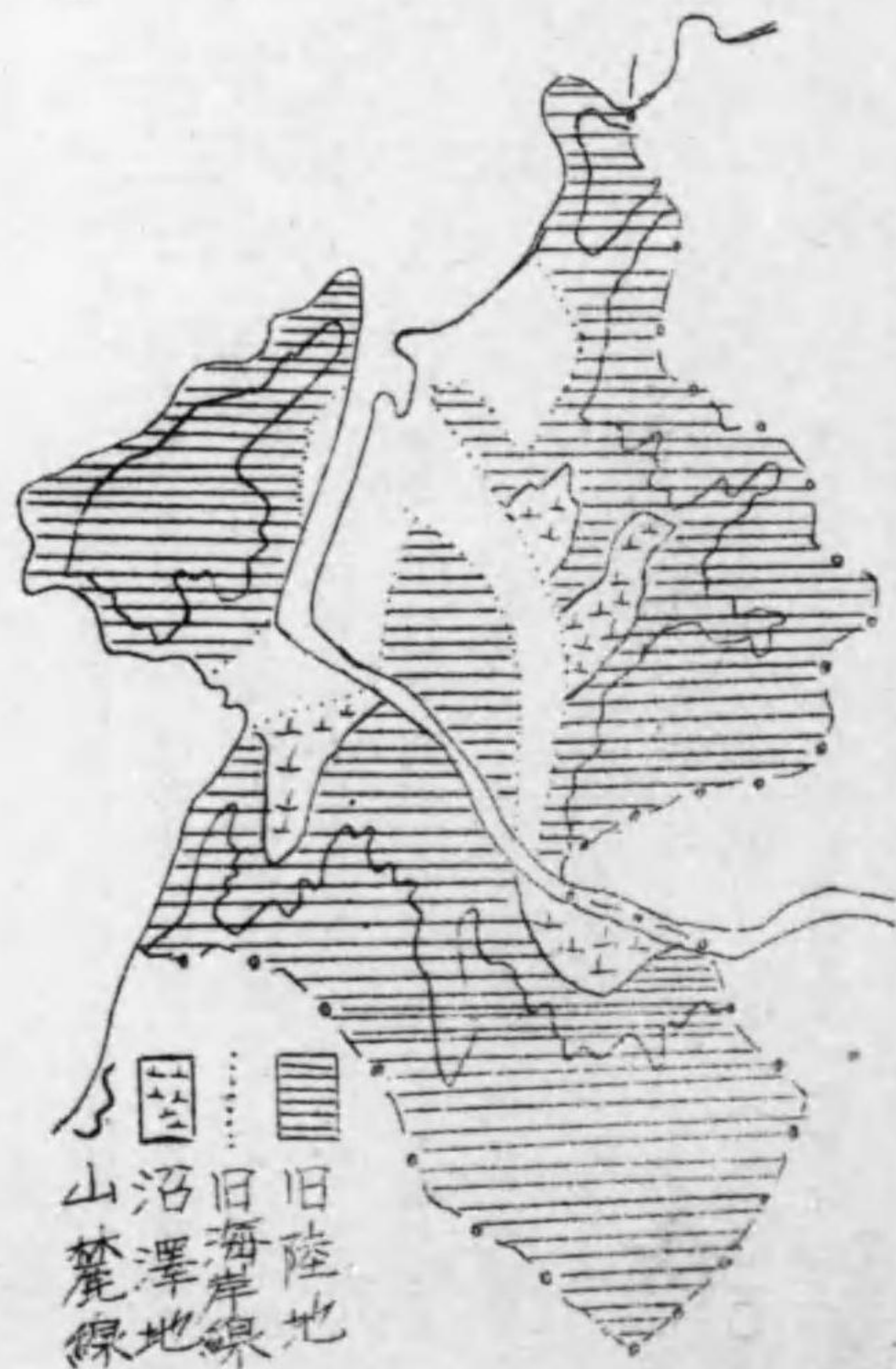
即ち周布川は川角の洲の所から二分し一部は本流となつて現在の状態に流れ、鰐石に於て津摩と日脚に分れたもので、津摩丘陵は一時全く本土から切り離されてゐたものと思ふ。他の一分流は川角の洲から東に曲り聖徳寺前から山崎を經由、西に稍々屈折して今の古川に出でて日脚に於て本流と共に海に注いでゐたらしい。之から推察すれば海岸線も現在より内部に入込み、今の國道附近迄來り山崎、吉地、専稱寺前の陝隘地は滿々とした沼澤であつたであらう。

次に日脚の變化について考へて見やう。現在の日脚聚落地は極めて新しく出來たもので、凡そ百年前迄は海水が國道に逼り今の八幡宮前の松林一帯が長い砂嘴となつて、突出してゐたらしい。周布村史より、この一〇米以下の平原の聚落を除いた他は大部分水田で二〇米以下の山麓地も水田として利用されてゐる。畑地は全面積の二〇パーセント位しかない。

南部山地

南部山地は美川、大麻の分岐山背でその末端周布平野に終る所は幾多の小分岐山背を分つてゐる。

古代地形圖



地質は大部分古生層で東部は石英粗面岩である。最高峯、米ヶ辻は標高三六七・二米閃綠岩から成り、最南部に聳へてゐる。浸蝕の程度は早壯年の狀貌を呈し小山脚群の間の谷に沿ふて狹長に耕地が開け、田畑として利用されてゐる。鞍部は峠で大麻村美川村への通路として發達してゐる。

三宅の丘陵は比高三〇米位の波状の丘陵で海岸に面した方は急傾斜して直ちに海に通り、南東側の諸所に聚落をつくつてゐる。

海波の洗ふ汀線附近は石英粗面岩で、其上は洪積期の礫層で古生層又は石英粗面岩の礫である。

東部臺地

高野台地は玄武岩で構成され美川、長濱兩村に自然境界をなしてゐる。この玄武岩台地の西南端は周布川に逼り、川を距て石英粗面岩の南部と呼應して隘路を作つてゐる、周布川はこの隘路を解折して周布平野に流れてゐる。最高点千疊敷は標高一八一・米九で諸所に玄武岩が裸出してゐる。此處に立つて目を西北に向けるに周布平野が一眸の中に收められ周布川が蛇行して流れてゐるのを見る事が出来る。此處から産する玄武岩は霞石玄武岩ともいひ、我が國でも珍らしい産地だといはれてゐる。石英粗面岩と山頂玄武岩との境界は海拔一二〇米位の處に於て明瞭に見出す事が出来る、即ち石英粗面の赤褐色の風化土壤から急に勾配をかへて玄武岩の黒色土壤になつてゐる。この玄武岩台地の北部は小地塊に分離してゐる。最北部は安山岩から成りこれが二地塊に分れてゐる。併し元は一塊であつたであらう。何れも高さは余り高くはないが、北の地塊に於て八二米南部宮山に於て九〇米である、南

地質畧圖



の地塊は大部分荒地や針葉樹林で鎮されてゐるが北の部地塊は頂上迄可耕地になつてゐる侵蝕程度は未だ若く谷の發達は著しくない中部は石英粗面岩から成り北部の安山岩との接觸部は非常に低く二〇米を僅かに超えるに過ぎない之は所謂地質構造線に沿ふて發達した谷で古來周布から長濱に越へる重要な交通路で舊道が此處に擇らばれたのは眞に故ある事である此谷の西方平原中に二〇米余りの小丘がある地質は石英粗面岩でその東部山地と同一地質である点から考へて切斷分脈であらう

津摩丘陵

津摩丘陵は輝石安山岩が基盤をなしてその上を石英粗面岩の礫層に蔽はれてゐる丘陵で、最高点も五〇米を僅かに出るに過ぎない。西部は海崖を以て海に接し太公望連中の喜んで釣竿を操る所である東部は浅い谷を刻んで周布平原に終つてゐる。この丘陵に古墳がある。

中央平原(周布平原)

南部山地、東部台地、津摩丘陵に圍まれた周布川流域の沖積平野で面積は周布川の五分の二を占めてゐる。肥沃な農耕地で周布村の生命線である。海拔二〇米以下は殆んど水田で周圍の山麓地帯は畑、桑園として利用されてゐる。赤瓦の屋根が隠見して排列してゐるのも地人關係を物語る面白い材料である。

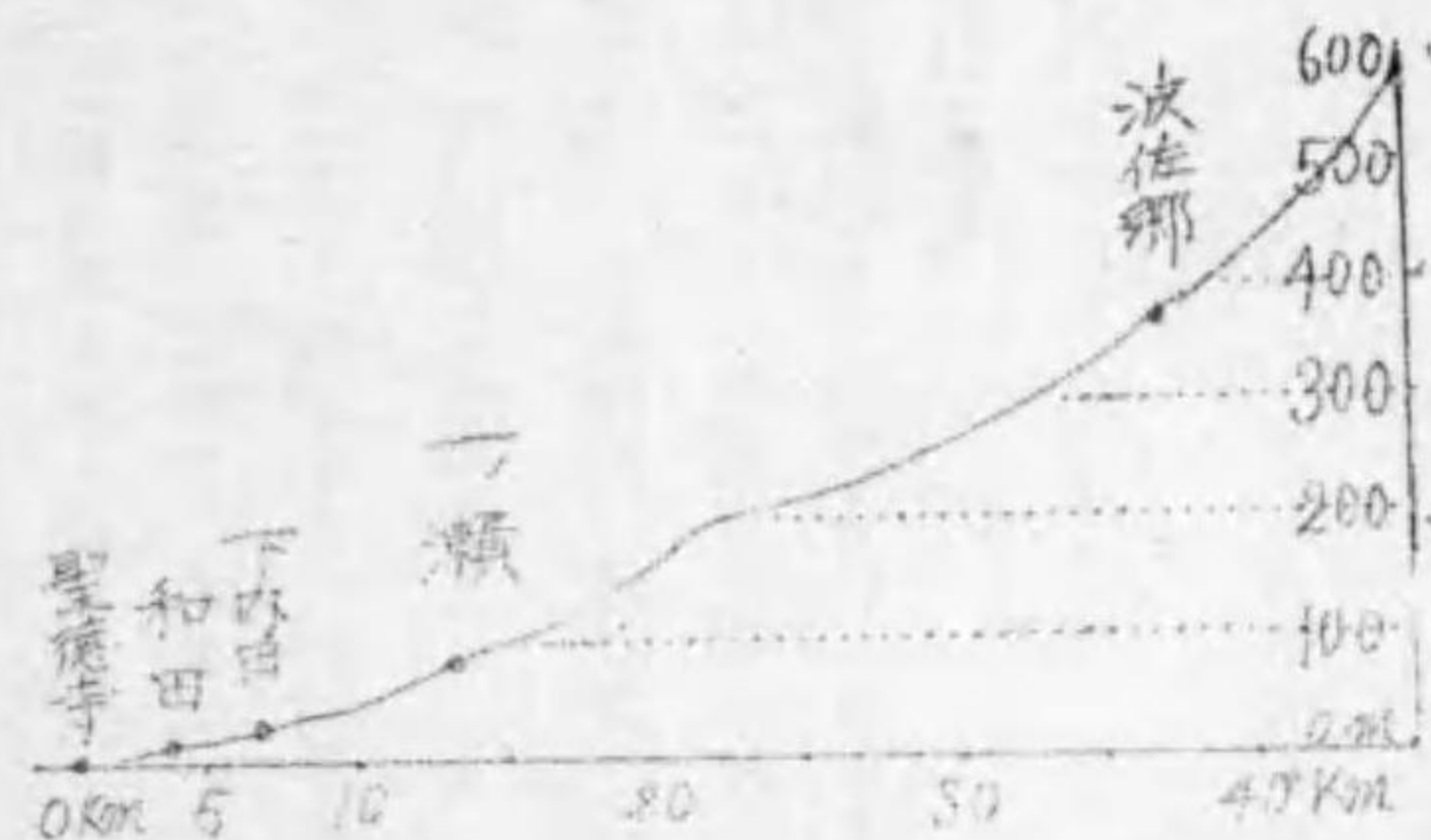
河川

村の中央を流れてゐる周布川は全村を灌漑して多くの溝渠を設けて灌漑に使つてゐる。この川は那賀郡第二の長流で流程約四五軒である。上流を波佐川といひ波佐村の南境大佐山の西山にその源を發し斑瀾岩、花崗岩、石英粗面岩等の火成岩で構成された地方に狭深な谷を作り變曲蛇行してゐる

石見長濱霞石玄武岩



周布川の縦断面



大長見、一ノ瀬地方は早瀬をなしてゐるので発電所が設けられてゐる。地形の関係上舟掛の便は無いけれども灌溉の利が大である。鮎、鰻、鱒等の魚族を供給してゐる。

海岸地形

海岸線は全長約一〇軒、實長一〇軒に對し二八である。通観するに大部分岩石海岸で二〇—三〇米の海崖、海に逼り岩礁が到る所に羅布して魚族の棲所を與へてゐる。

周布川東部海岸地形

河東約三軒を日脚浦といひ河口から四百米余は砂濱である。この濱は頭陸より運ばれたものが無いではないが大部分周布川の流下した土砂で

北西卓越風の影響を受けて灣頭に岩屑を堆積した變曲濱で西方輝石安山岩地との間に周布川が東方に吐口を向けてゐる。砂礁の内部には平穩な潟湖を形成して漁民に良好なる錨泊地を與へてゐる。これより東方は岸石海岸砂濱海岸が參差して複雑なる地形を作つてゐる。岩石海岸は烈しい海蝕のため凹凸を生じ岸下には僅かに海蝕岸卓があるか又は全然欠如してゐる。東北部生湯濱は地形學上所謂灣頭濱で、凸部は最も海水の侵す所となり爲めに岩体は破摧され易くその破摧物質は沿岸流のために比較的靜穩な灣内に運ばれて灣頭に最も多く堆積され



砂濱の形成

灣頭濱を形成したのである。

周布川以西の海岸地形



周布川以西津摩灣に至る間は殆んど岩石海岸である。北西卓越風に涵養された日本海の怒濤は遺憾なく海岸を破壊して凹凸を作つてゐる。更に海蝕はこれのみに止まらず、安山岩の節理面に沿ふて作用し無数の岩礁を基布してゐる。周布川口の西方には三〇米余の懸崖が屹立して崖下には相當廣い地域を占める海蝕岩卓があり、侵蝕前の一部の地表は軸として原地形の名残りを留めてゐる。更に西するに海面から一〇米の高所に平坦面が存在し、面上に無数の浪痕、小さい崩壊があつて以前の岩卓が地盤隆起に伴ひ、海岸段丘を作つてゐる所があり、或は下部の軟弱な岩屑が洗ひ去られて上部が残り自然橋を作つてゐる場所もある。津摩灣は西方に開口して彎入してゐる半圓形の滑らかな灣で、灣頭濱は津摩浦の聚落を作つてゐる津摩灣は卓越西風を防ぐため昭和四年工費三萬圓で防

湖沼

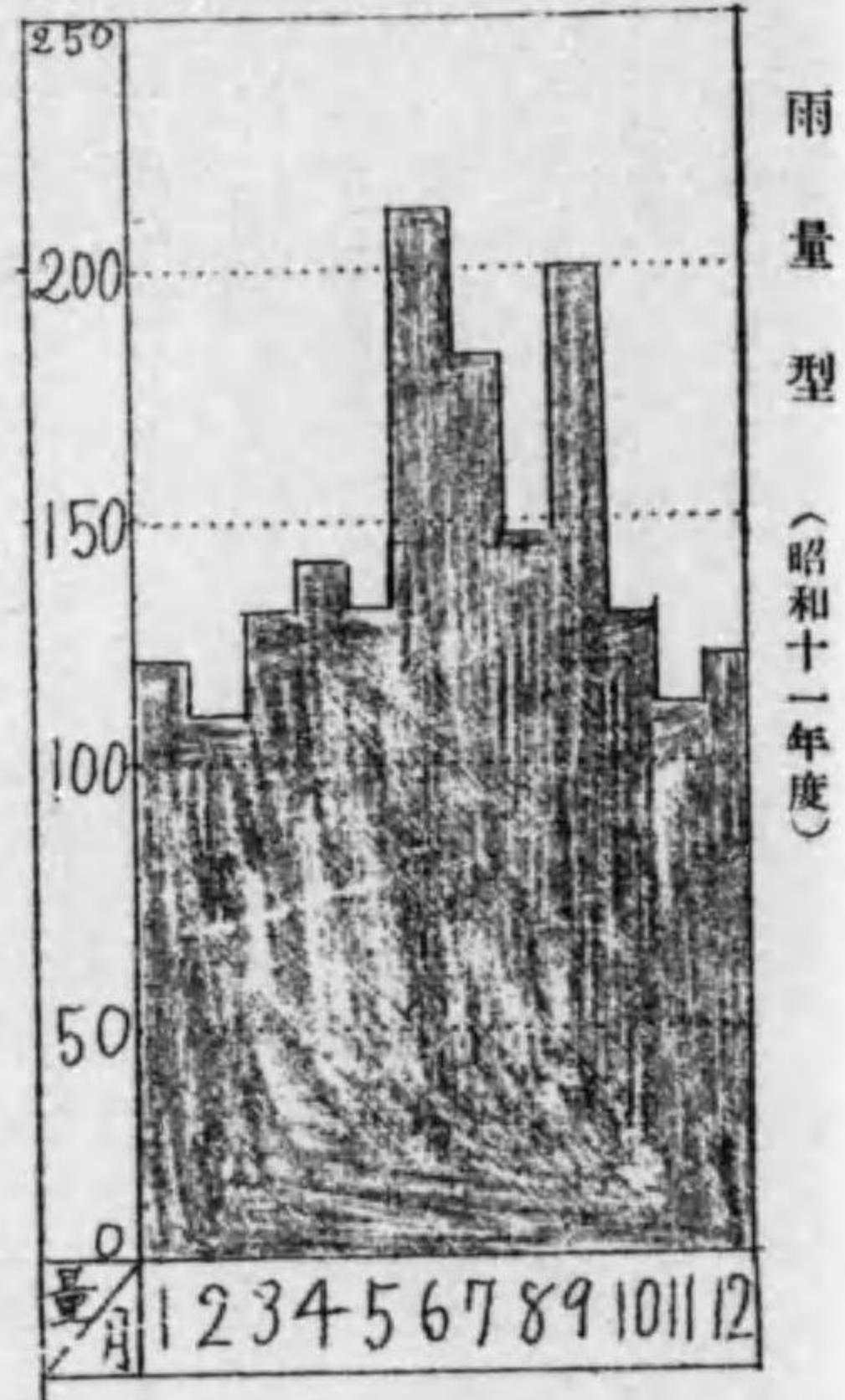
周布村の水田分布を見るに、大部分周布平原にあつて周布川に灌溉されてゐる關係上、人造湖の必要を認めない。平原中を數多の小溝によつて本川から配給されてゐるけれども、治和(三宅、鰐石)の丘陵地になると本川からの供給不能となり、僅かの泉水と蒸溜水とによる外方法がない、人造湖は鰐石に一ヶ所あるのみである。

第三節 氣候

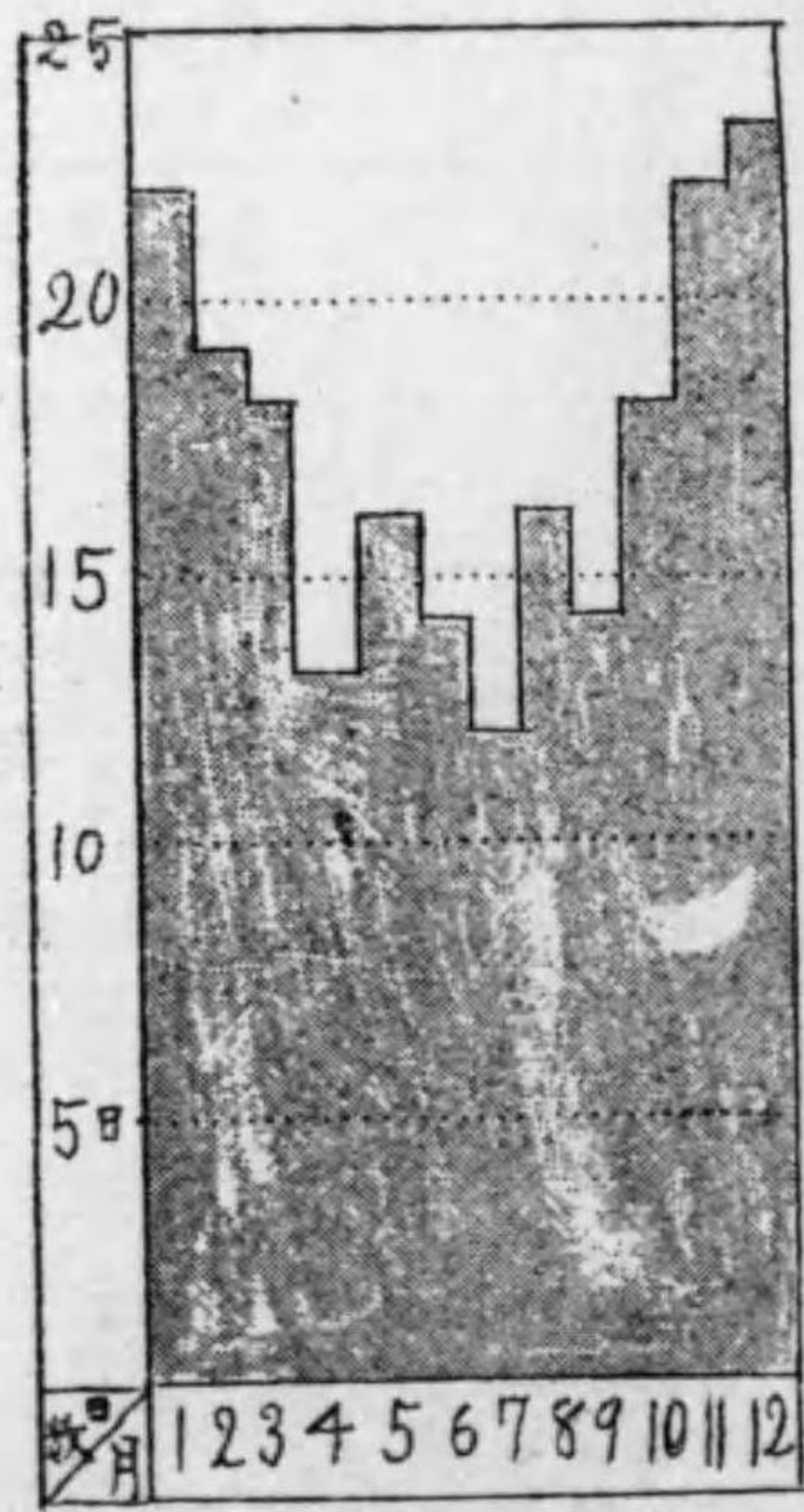
溫和な村

第九章 周布村の人文景觀

第一節 村の戸口

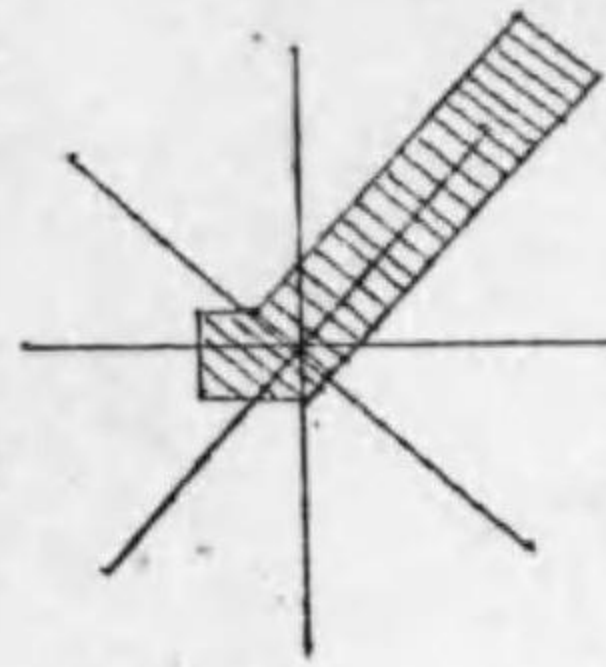


新様な氣候の本村は氣候溫和で、雨は夏に多いけれどもこれは生産的の雨であるから農業上には好都合である。故に住民はこの天恵に感謝して村の生命線農業にいそしんでゐる。但、六月九月の降雨期に周布川が氾濫して附近の人家に被害を及ぼす事がある。



であり、九月は農家が最も恐れてゐる颱風の襲來期である。降水日數は年一九〇—二〇〇日位で雨天や曇天の多いのは冬季で、夏季のみは例外であるけれども裏日本型の特徴を表してゐる。約言すれば、雨量に於ては表日本型であり、降水日數に於ては裏日本型である。

雨量



(二年間の風の方向)

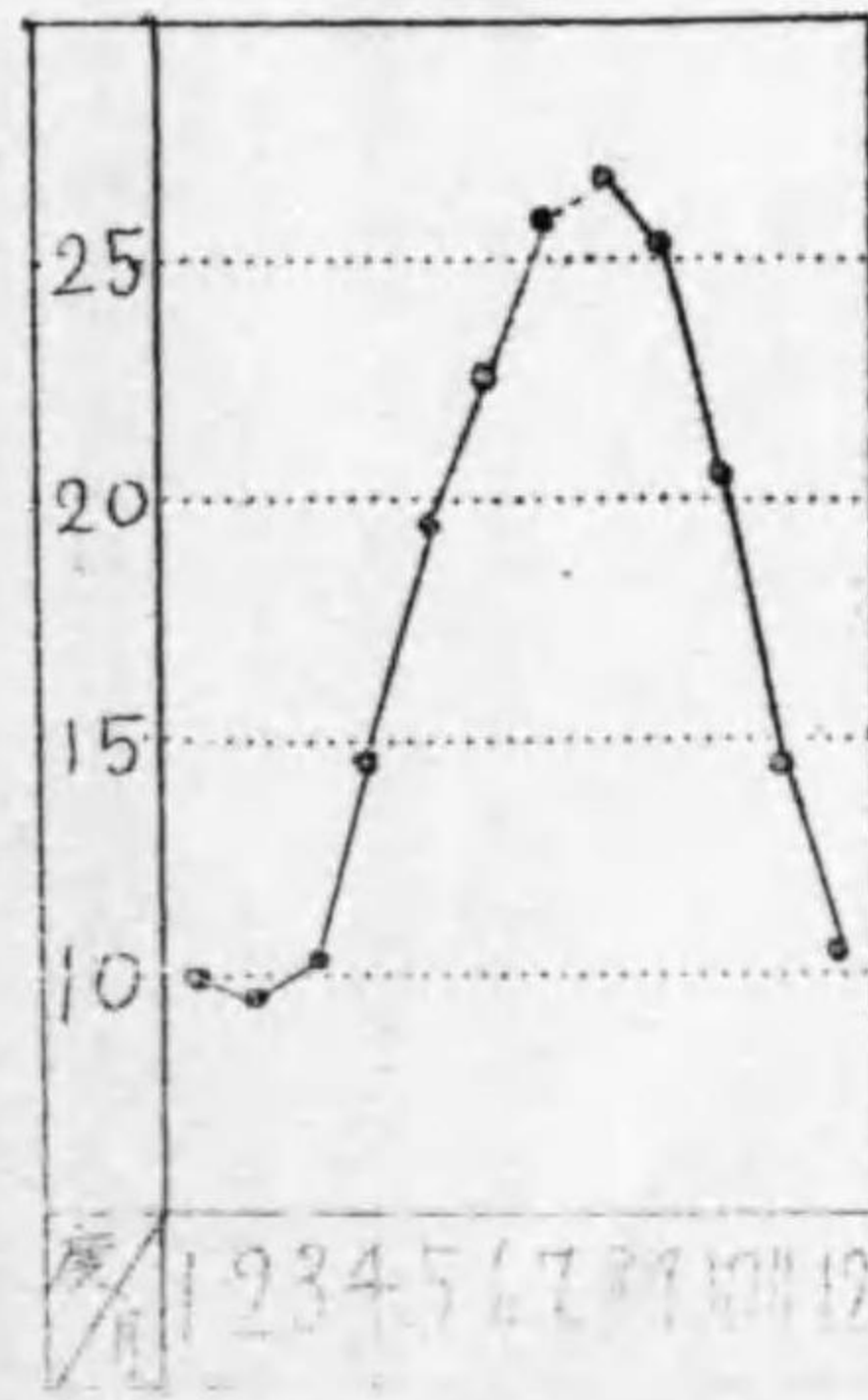
卓越風は北東風で全年の八割を占めてゐる。各季節について見ると春は北、夏秋は北東、冬は西風が卓越してゐる。但し日脚海岸地方は冬期北東風が卓越してそのために河口は非常に閉塞されて僅か間余になる。津摩等は冬季最も西風の逞しい所で三万余圓の費を投じて船溜の設備をしたのである。本村は大部分平原上にあるので冬期には強風が吹捲くり、特に日脚から原井に向ふ國道筋は通行に困難を感じる事が屢々ある。

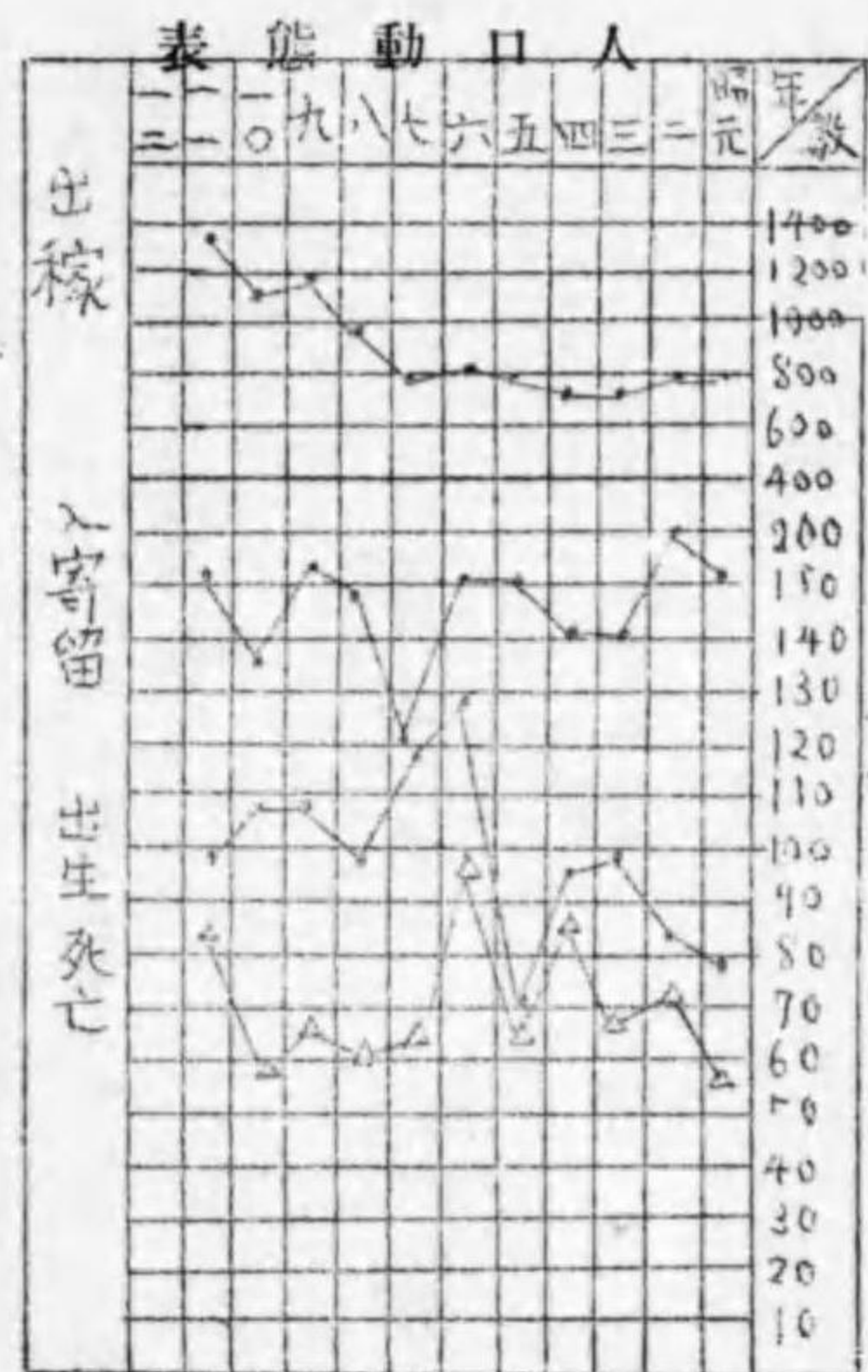
雨量の多いのは夏季で、一年の約三割はこの時季に降雨がある。反對に最も少ないのは冬季で年雨量の五分の一にも達しない。雨量型を些細に見ると、二回程多雨の月がある。即ち六月と九月で、六月は本州、九州の諸地方に來襲する梅雨の現象

風

本村の氣候は山陰固有の氣候で、沿岸は對島暖流の影響を受けて氣温、降水量が調和してゐる割合に、海岸性氣候で裏日本と表日本の中間性の氣候である。氣温は年平均攝氏凡そ一六度で、最高は八月の三二度、最低は十二月の二度である。奥部と海岸部とは差がある。奥部に入るに従ひ寒冷で海岸は暖い。それ故海岸部と奥部との田植は相違し海岸部は遅い。然し大体に於て人間生活に最も適した氣温を示してゐる。

氣温表 (昭和十一年)



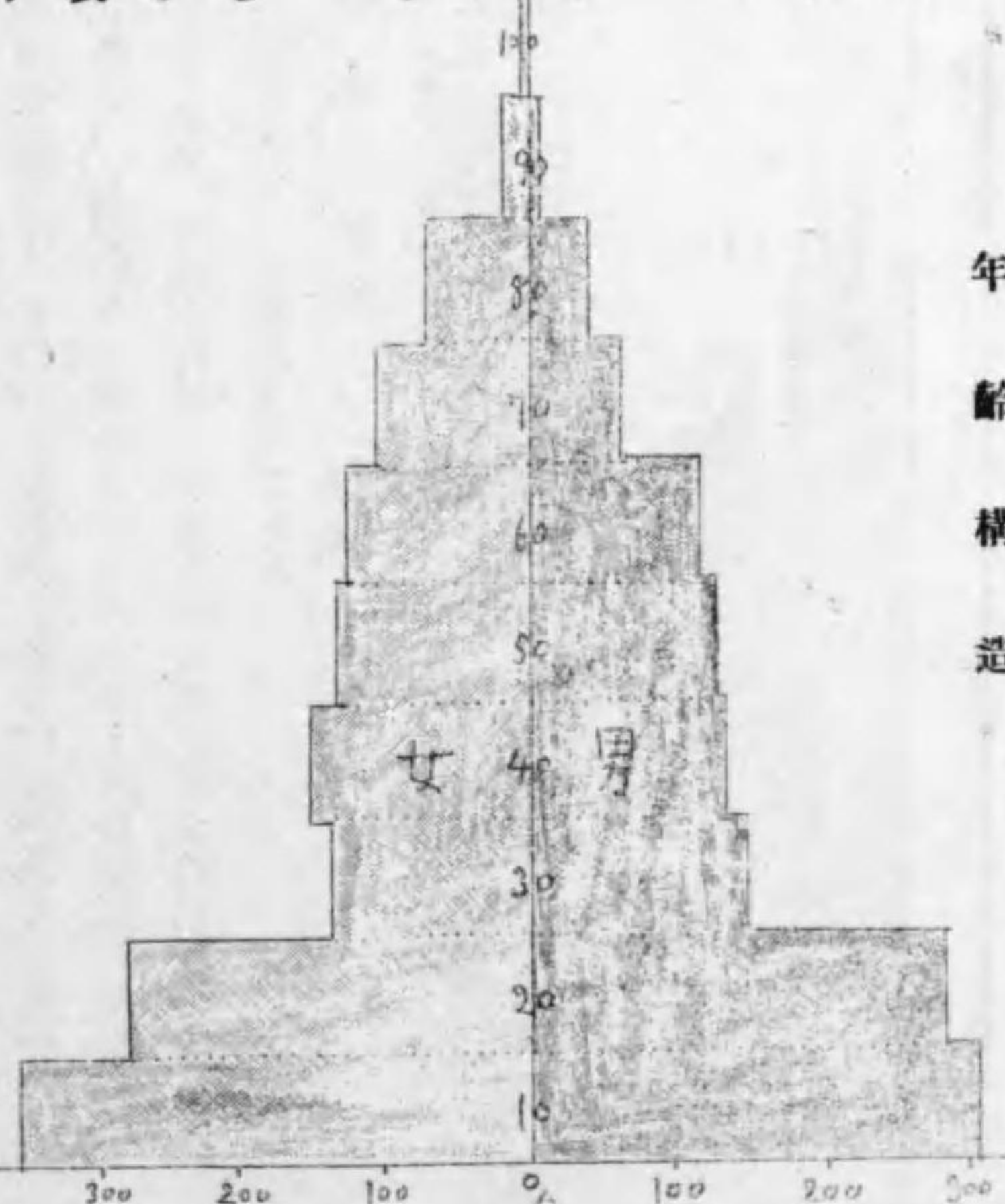


本村は地勢の関係上人口多く昭和十一年末の調査によれば、現在戸數五七五戸、人口二六六七人で男一三〇四人、女一三六三人である。人口密度は一方軒三八六人で一戸當り平均人口數は四・五人である。一ケ年の自然増加は二十人足らずで大へん少ない。亦之を耕地(田畑)面積で人口密度を表すに周布村は段當り一・二人を收容する、長濱村は一・五人である。段當り人口密度の少ないのは生活が長濱村に比べて樂であると言へる、併し人類生活

2 年齢の構造

村内に居住する人の年齢構造の状態を見るに、一六歳から三十歳迄は男が多く、其他は皆女子が多い、此の年に女子の少ない云ふのは高等科を卒業するに大部分の女子は工場に出稼するからである。

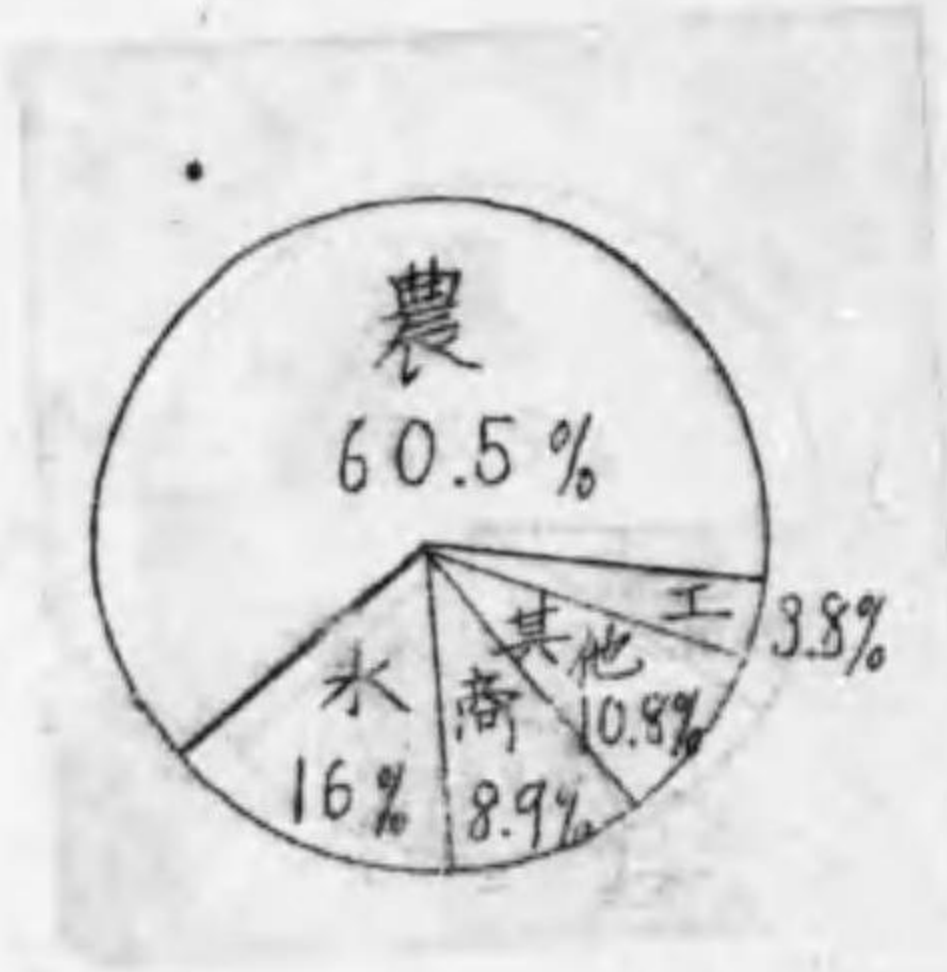
又全体の年齢構造を見るに、男女共に二十歳以上が著しく減じてゐることに注意せねばならない。此の形式は都市附近における農村の人口構造の形式で、其の村の經濟發展力の弱い事を表現してゐるものである。年が増すに従ひ女子が次第に多くなり女子に長命の者の多い事が認められる。男子の少ない云ふ事は、(1)出生者が男子が少ないか、(2)出生後男子が多く死



ぬるか、(3)又は出稼によるかである。本村は(2)(3)に相當してゐる。

3 人口と職業

職業別圖



本村の人口と職業の關係を本業について見るに、人口の七二パーセントは農業者で之を戸數の上から見た職業者百分比は六〇・五パーセントで、其の差十二パーセントである、村の大半は農業者である云つてもよろしい。従つて周布村は農村に言つてもよい。次は漁業者が多く村内の職業中第二位であつて一六パーセント弱である。水産業は相當盛んである事が知れる。次は商業八・九パーセン

職業別戸數累年表

計	其他	漁	商	工	農	昭和
五七一	二〇	七	三	五	二六	二年
五七八	二二	七	三	五	二七	三
五八五	二二	七	三	五	二九	四
五九二	二二	七	三	五	三〇	五
五九九	二二	七	三	五	三一	六
六〇六	二二	七	三	五	三二	七
六一三	二二	七	三	五	三三	八
六二〇	二二	七	三	五	三四	九
六二七	二二	七	三	五	三五	十
六三四	二二	七	三	五	三六	十一

ト工業の三・八パーセント等である。戸數からも人口上から見ても農、水、商、工、ミなつてゐる此の職業狀態から、村の都市指數(農水の戸數を除いた戸數を全戸數で除したもの)を見るに三十三パーセントで、濱田町の八十五パーセントに比すれば、僅かに二分の一にもみたない。依つて田園指數は六十パーセントとなり、農村であることが明瞭である。

4 出 稼

村の面積から人口密度を見ても、耕地面積から見ても村内で生活するものだけで人口は飽和に近い。其の上本籍人口は現住人口よりも遙に多いから其の多いものはどうしても

自分の生活の安易な土地を選んで他の地方へ赴くことになる。昭和十一年度の調による三縣内に男一六七人、女一五八八人、他縣へ男二四四人、女二一六八朝鮮へ男四四人、女三三八人、滿州男二三人女一四人其他男二四三人女二一二人、總計一三五九人、男七二一人、女六三八人男子の大部分は職人、職工、店員とし女子は女工、女中として元氣に活動してゐる。之等の人々は多くは年中其の地に止つてゐて、普通當分は歸つて來ない永久的のものである。一部は杜氏の如く一時的に或期間だけ出る者もある。此の期間には藏手傳として多くの青年が出て行き、村内に止る者は少數である。

出稼地方圖



第二節 農業上より見た村

本村は山林面積は相當多いけれども、耕地は全面積の五割以上に及び大部分は中央周布平原にある。ここは沖積平野で地味も肥沃、灌漑も周布川により十分である。又農産は各種産業中首位を占めてゐる。

1 耕地景觀

「水田の村」これは周布村の耕作景觀乃至は農業型を言ひ表すに最も適切な印象的な言葉である。實際に水田の多い村である。秋には黄金色に飾られ無言の中に米作の盛な事を物語つてゐる。

東部台地千疊敷より周布平原を視下す時、耕地整理の行き届いた水田は一目の中に收められ、南部山地の谷線でも水量の豊富なところは水田として利用されてゐる。

農業者は全人口の七二パーセントで、米は本村第一の農産物で總産額三、四七

土地利用状態

地目	面積	百分比
田	一六九五・四 ^A	二四%
畑	九三五・五	二〇
宅地	一五八・六	三
山林	二〇四〇・七	四二
其他	三六八	一
計	四八七〇・〇	100.00

見江津、都野津、波子、津和野等へ移出してゐる。

生産地帯は大部分十米以下の低地にあつて周布川によつて灌漑されてゐるから、夏の旱天時さいへども水の不足に苦しむ事はない。更に水田系を仔細に觀察すれば中央から放射形に谷間の濕地に沿ひ一八〇米の高所に及んでゐる。

水田分布



尙治和では丘陵地が水田に開かれ階段状に並んでゐる。是等の高地の灌漑用水は僅かの溜水ミ泉水ミに供給を仰いでゐるのであるから、一朝旱天に會するに忽ち乾田ミなつてしまふ、溜池を設けられてゐる處は殆んどなく僅かに津摩丘陵に小さい貯水池があるに過ぎない。

村内に播種される米の品種の主なるものは
 粳米 銀坊子 ノ錦 島根五號 雄町 旭四號 北部小町 小關取 大關 曲玉 八雲 龜治 愛國
 粳米 島根二號 神力 ベンケイ ユリマ 等
 糯米 太郎兵餅 關取 畦越 霜カズキ 龜治 赤餅 等

昭和十一年産米検査の成績によると

一等米 二俵 二等米 六俵 三等米 七四一俵
 四等米 三八四俵 等外 五七俵 計 四六五二俵

米産検査の結果を見るに一等米、二等米は少なく四等米が最も多い。將來乾燥に十分注意して優良なる米を産する様にならねばならぬ。

2 畑

土地利用表によつて明かである如く、畑は全体の二〇パーセントを占めてゐて水田三分の二の廣さを有つてゐる。此畑地は山麓及山間に散在してゐる、最も畑の多いのは高野臺地、津摩丘陵及南部山地の傾斜地である其の他人家の周圍にも畑地があつて日常必要な畑作物を作つてゐる。畑作物の主なる物は麥類、甘藷、豆類、粟、蕎麥、野菜類である、(粟は後述)一般に畑作物は豊かでない、其の中主な畑作物の年産額を見る

昭和五年以後米産年表

年度	收穫高	價額高
昭和五年	四二〇〇石	六四〇四五圓
六	三四〇三	五一二九五
七	四二一八	八四五三四
八	三七二九	七〇八五一
九	三〇七四	七七一六〇
十	二八六六	八一六八一
十一	三四七七	九四二二七

ミ麥類、芋類の多い事が知れる。

麥の收穫の多いのは米の收穫後殆んど全部の水田を乾田として二毛作を行つてゐる。故に畑地の收穫よりも水田よりの收穫が約三倍に達してゐる、近年はビール麥の産が増加しつゝある。

ビールの麥額産

年度	俵數	價格
昭和十年	五七俵	二九二・三六圓
昭和十一年	五九	九〇八・〇〇
昭和十二年	四一四	二七五四・五〇

3 芋類と蔬菜類

甘藷は昭和十一年の統計によれば三万六千貫、金額五千四百圓で米麥についての本村の産物であり、多産地は日脚である。これは明治初年探立和尙が九州より甘藷の種子を携へ歸り之を培殖せしめたのが其の始りである云ふことである。

地質は砂土で水田は少なく、畑地が多いため此地は甘藷栽培に最も適してゐるのである馬鈴薯は五千六百貫、八百四十圓の産額を有してゐる以上芋類は畑作として本村になくはならぬ産物の一である。

蔬菜類は畑地に關係し自然に少なく、地内の需要にミまらざる位である。品物によれば他地方より移入しなければならぬ物がある。

品名	産額
大豆	二八
小豆	一五
粟	二七
ソバ	二〇
甘藷	三六〇〇貫
馬鈴薯	五六〇〇

農會に於ては大いに奨励し將來相當なる産額を擧げべく努力されてゐる、主要蔬菜栽培生産高は表の通りである。

4 果樹類

果樹栽培は未だ顧みられない状態であるから産額に於ても著しいものは

野産高産表

品名	收穫高	價額
生大根	三〇、〇〇〇貫	一、五〇〇圓
カブラ	六、〇〇〇	三〇〇
人参	九〇〇	一三〇
牛蒡	二、七〇〇	五五三
里芋	一、六〇〇	二八八
葱	二、〇〇〇	四〇八
玉葱	一、六〇〇	一七三
キヌメ	一、〇〇〇	二二二
漬菜	四、一〇〇	二九四

ない。

第一は生柿七二〇本千五百貫で吉地、高野、山崎方面に多く産する。昭和十一年度統計によれば約四屯の移出をみてゐる。次は葡萄梨等である。本村の氣候が暖帯に屬してゐる爲に一般に暖帯性果樹が多い様で、吉地方面の氣候低溫なる處には柚子を少し出してゐる。

工藝農作物としては櫛、栝位のもので周布川沿岸に栽培されてゐる。

此等の果樹類は主として傾斜地に植へ土壤の流失や階段狀の土地の崩れるのを防いでゐる。

果樹類生産表を見るに如何にも貧弱なこゝがうなづかれ、將來益々發達する様に務めなければならぬのであるが、農會に於て果樹栽培を奨励してゐるから之等の産額が増加するのに近いこゝであらう。

果樹類生産表

生柿	七二〇本	一五〇貫	四二〇〇圓
葡萄	二〇〇	五〇〇	三〇〇〇
日本梨	一一〇	一九八	九九
栝	八反	一七六	六七

5 桑畑と養蠶

本村の養蠶業は各地に勃興した製絲工場の需要を充す爲に、生活の安定を得るために努力した結果、逐年盛大に赴きつ、ある。昭和十一年の蠶繭産額は五三九四貫で二六五四圓に上つてゐる。併し昭和九年を見るに今迄養蠶をしてゐる者の中には出稼者として他に移住した者を生じ一時衰へたけれ共、現在は他出者も少く漸次隆盛になりつ、あるこゝは誠に喜ばしいこゝである。

桑畑の分布を見るに周布川に沿ふた土地と山麓地方に多い、殊に日脚では人家の間は殆んど桑畑で、尙畑地を桑畑に變へた處が多い様である。これは土地が土砂で桑栽培に適し、畑所の日脚では生活安定上養蠶に着目し、之が飼料たる桑樹栽培を奨励した爲である。河岸は風通し良好で病虫害に掛る事が少ないが、梅雨期九月の颱風期には増水し桑をいためることがあ

桑畑の分布圖



中央部は水田である爲勢ひ山麓地帯が畑となり、この畑に桑を植えてゐる。養蠶戸数は一八九戸で全戸数の三二・八パーセントである。本村第一の養蠶地は日脚で、この部落には製絲場があつて絹織物をも産出してゐる。

昭和十一年養蠶成績及最近の状況

種別	春	秋
飼育戸数	一八九戸	一八九戸
飼立数量	四三三九瓦	二八八〇瓦
上	数量 二六〇貫	数量 二七〇貫
玉	数量 一六〇貫	数量 一〇五〇貫
屑	数量 一〇〇貫	数量 三〇〇貫
計	数量 五二〇貫	数量 一四七〇貫
昭和七年	七三三貫	二九八九貫
八	七四二貫	三九七九貫
九	六一六貫	一六六一貫
十	五七八貫	二八二六貫
十一	五三九貫	二六五七貫

6 林業

本村に於ける山林面積は二〇七二〇・七アールで全面積の四二パーセントに當つてゐる。村内の過半は農耕地として利用され山地は五〇米以上の地に限られてゐる。大部分は針葉樹林の中に潤葉樹、灌木類を混じた雑木林である。天然林のま、放置せられて顧みられない状態であつたが、近年は殖林に力を注いでゐる。林産總額は一一四〇圓、木材、薪炭材は六〇〇圓である。驛前の製材所では、安城村、大麻村、美濃郡等より材木の供給を仰ぎ製材してゐる。製材された木材は名古屋、湊町、天王子、佐野方面へ移出してゐる。昭和十一年移出屯数は三四二屯である。

松茸産地地圖



東部臺地、南部山地の山麓斜面には赤松多く石見地方では有名なる松茸の産地で毎年秋季には濱田地方から来て松茸狩で賑はつてゐる。これが主産地は春日神社附近一帯の松林で餘り大きな木の無い所である。山より持ち歸つた茸は自家用にす外に村内の家々に賣られたり、又濱田地方へ移出されたりしてゐる。昭和十一年の産額は五四〇圓で本村特産物の一つである。

7 家畜と養雞

本村の家畜の中では牛が一番多く一七匹で、周布、原井、治和が主産地である。此等の地域は主に農業を主として居り、牛の分布は農業者の多い所と一致するところに面白い關係がある。又これにより其等の牛が何の爲に飼育されてゐるかも推

測される。

馬は二匹で牛同様の仕事を主としてゐるが沿道附近の馬は駄賃馬として使役されてゐる。

豚は十八匹、山羊は一五匹で年々増加する傾向がある。

蜜蜂は日脚、吉地方面に飼はれ八十圓の産額をあげてゐる。

養雞は農家の副業として行はれてゐる、治和、原井には一室に百羽以上飼つてゐる家がある。卵は一日平均六・七十個を産み一日の飼料一斗五升位で、一羽につき約八厘を要する。昭和六年より門田部落に組合を組織し雞卵は農會で出荷して發送

牛馬分布圖



家畜累年頭數量

年 度	牛		
	牝	牡	計
昭和元年	二四	一五	三九
二	一九	一三	三二
三	二〇	一七	三七
四	二四	一六	四〇
五	二四	一六	四〇
六	二四	一三	三七
七	二五	一四	三九
八	三二	一四	四六
九	三三	一八	五一
十	三六	二〇	五六
十一	三三	二六	五九

してゐる。
牧畜業は大体に於て不振である。これは原野が少なく是等家畜の飼料たる牧草が充分でないのも原因の一である。

年	馬				豚				山				年
	戸数	計	牡	牝	戸数	計	牡	牝	戸数	計	牡	牝	
昭和元年	三	三	三	二	六	八	五	三	一	一	一	一	昭和元年
二	七	六	六	二	四	九	八	二	二	二	一	二	二
三	六	六	五	三	三	三〇	七	三	三	三	四	九	三
四	六	六	六	二	八	八	三	五	一〇	二	二	九	四
五	四	四	四	一	二	二〇	三	二	二	三	二	二	五
六	三	三	三	一	一	二	五	一	一	一	一	一	六
七	三	三	三	二	八	九	九	一	二	九	一	九	七
八	三	三	三	四	五	七	三	一	五	一〇	一	九	八
九	七	七	六	一	三	三	六	七	三	三	一	三	九
十	三	三	三	一	三	三	三	一	一	一	一	一	十
十一	三	三	三	一	三	三	二	八	一	一	一	一	十一

年	鶏				年
	飼育戸数	雛	雄	雌	
昭和二年	一七四	五八〇	二〇一	七三九	昭和二年
三	一九	三七〇	一四四	五二〇	三
四	二四	四六〇	一六四	五五五	四
五	一七	三七一	一六四	五八六	五
六	一八	三三〇〇	一三三	一七五〇	六
七	八	二〇〇	六〇	二七〇	七
八	八	二五〇	四五	二九〇五	八
九	三	八〇	三〇	一六〇	九
十	三	七〇〇	三〇	一七二〇	十
十一	一〇	一四八〇	五〇	一四四九	十一

第三節 水産業から見た郷土

農業についての産業は水産業で、津摩は其の中心をなしてゐる。昭和十一年漁業者は漁撈に於て本業とせるもの業主一二九人、被雇者八五人で副業者は業主七五人、副業者三九人で水産戸数一〇八戸である。

摩津浦近海に於ける魚族の集合する所は、おほぐり漁洲(バンク) いさせぐり魚洲、西の瀬魚洲、おしごぐり魚洲等である、以下其の魚洲について説明しよう。

1 おほぐり魚洲

周布川河口より約一哩沖にあり。このバンクは北に向つて十五町、幅十町位あつて深度は三六……四二尋位ある。魚族は鯛、いさきを主とし其の他かれひ、かな、あかみづ、鯉、鯰、烏賊等である。

2 いさせぐり魚洲

おほぐり漁洲の西方海岸にある小さいバンクで、いさき、が多い。

3 西の瀬漁洲

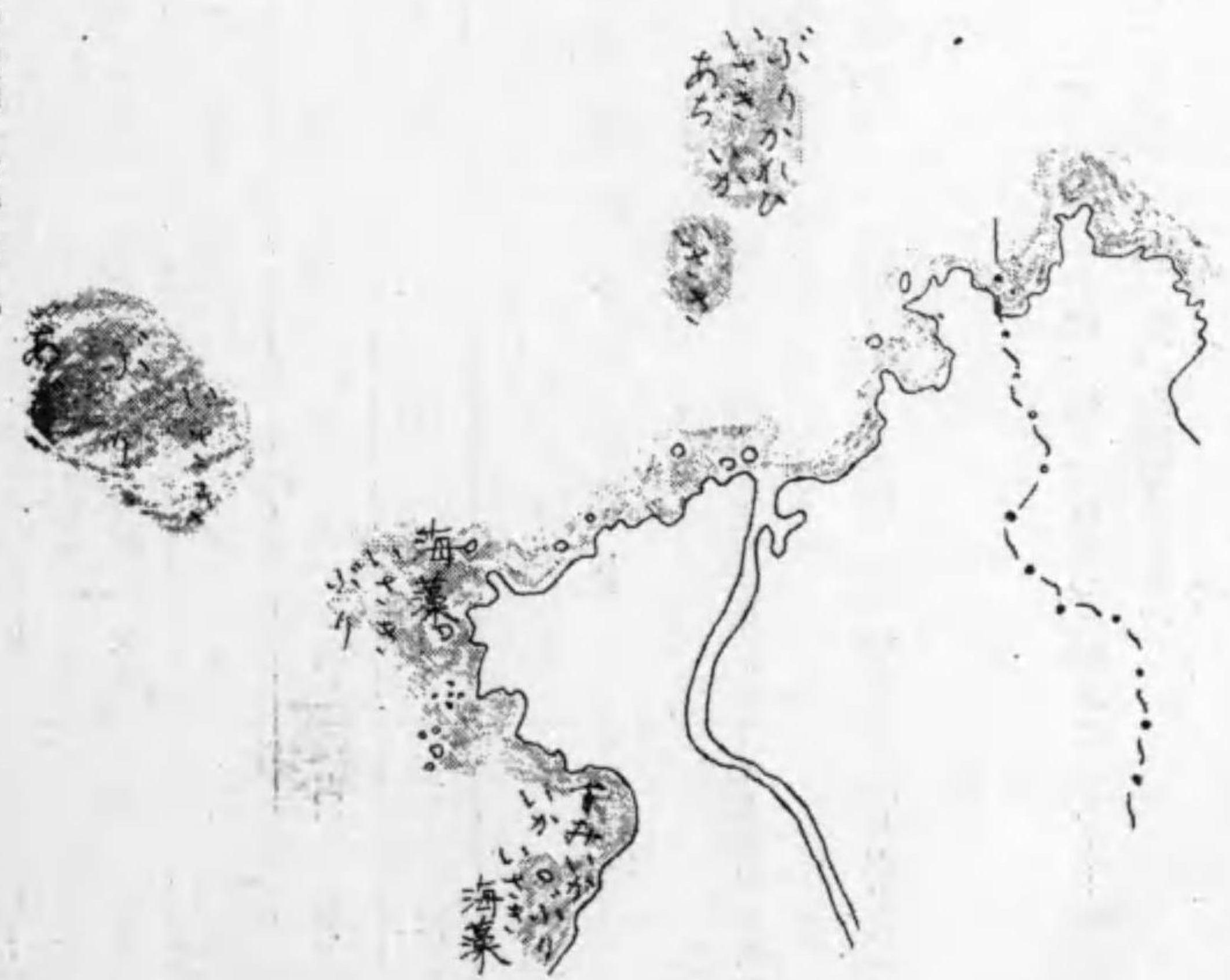
周布村近海に於ける漁洲と魚族分布

津摩灣から三湊沖合に擴がつてゐるバンクで、海岸より順次「地の穴」「ひらぐり」「中の瀬」「樋の目」「やつそうぐり」五つのバンクから成つてゐる。長さ二十五町幅十五町餘、深度は沖の瀬に於て四十六尋、中の瀬に於て四十尋を有してゐる。主な魚族は、いさき、鰯、鯨である。

4 おしこぐり漁洲

アゴ島の僅か沖にある小さいバンクで鰯、いさき、が主な魚族である。

- 近海漁業中第一は 鰯 (二二〇〇〇圓)
 鰯 (一八五二圓)
 鮪 (九〇〇〇圓)
 鯖 (四〇〇〇圓)
 烏賊 (五五〇〇圓) 鯨、
 鰻、飛魚、等で
- 遠洋漁業では 鯛 (二二五〇圓) 最も多い。
 貝類は 鮑 (二二五〇圓) さゞえ (三〇〇〇圓) 等である。



魚船の殆んど全部は小さい所謂漁舟で動力を用ひるものは極めて少なく、現在では漁獲物の減少と維持費との關係から衰頽しつゝ、ある様である。

沿岸漁獲の方が盛んで村人の生活其の物から見ても、此の小さい船で沿岸漁撈する方がより關心を持つてゐる。灣岸に並ぶ十餘隻の漁船、靜かな紺青の海岸に浮ぶ純白の發動漁船、人家の燈火が次第にはつきりして來る頃になるに、親子に或は妻に見送られつゝ、沖をさして漁りに出て行く逞しい男の姿、勇い櫓の音、暗い沖を美しく明滅する漁火、夜の明ける午前四時、五時頃獲物を積んで歸る船、籠に躍る銀鱗、魚市場に群る人、魚賣る聲、斯ふした漁業景觀は海邊に生きるもののみが知る新鮮な社會風景であり詩である。

水産製造物は盛んでない。大部分は食料品で本村で漁獲したもの、加工品である。夏期に於ける天草、若布、子供も青年も老も若きも海に出て採收する勇壯な有様、海岸には彼等の歸りを待つ女達の群、磯邊には一面に擴げられてゐる海藻、一步津摩に足を入れるに高く鼻につく磯の香、冬期に於ける甘海苔の採集、津摩でなくては味ふ事の出来ない景觀である。

近年は鹽抜き若布として京阪地方に送られてゐる。その他鰯、鹽乾鰻、煮乾鰻、節類、雲丹の加工等が行はれてゐる。遠洋漁業出漁地方は時季によりて異なり、冬期は大部分對馬方面に出漁する。出稼業としては長崎縣、對馬方面を根據地として漁業に従事し主なる魚獲物は鯛、鰯、烏賊等である。漁獲物は附近の地へ販賣され特に濱田へ活鮮魚として送られるものも最も多い。

周布驛發送先について見るに、石見益田、下關、松江方面を主としてゐる。京阪地方へ割合に少ないのは一旦濱田へ運搬して賣捌き、そこから阪神方面へ移送されるからである。

昭和四年六月起工、十一月竣工した津摩防波堤は、各種漁船の繫留避難に便利で近海の優良なバンクと相俟つて將來地方漁業の一中心として發展するであらう。

數ある魚獲物の中、鮑と甘鯛は全國的に品質の優良なるをもつて有名である。彼の鮮魚として濱田魚市場を賑はしてゐるばかりでなく、甘鹽、粕漬として遠く京阪地方に進出し名聲を博してゐる甘鯛の大部分は我が津摩に於て漁獲されたものである。

鮑は良好な瀬があるのミ潜水夫を入れないで保獲してゐる關係から、他地方には見る事の出来ない巨大なものがある。

本村に於ける主要魚類

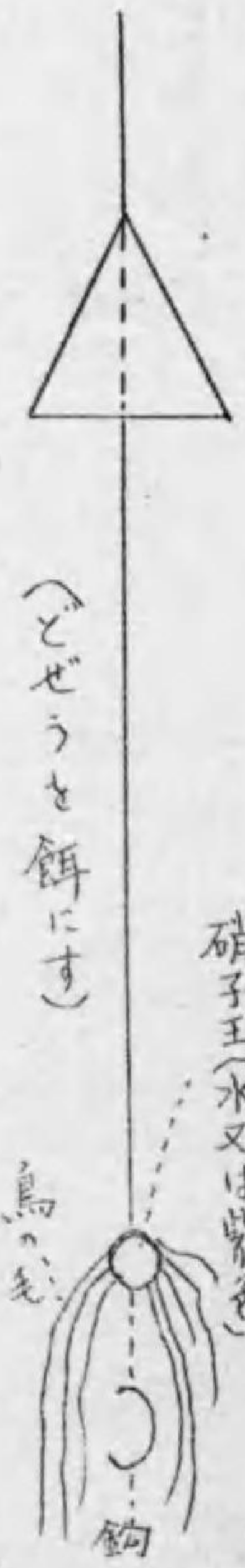
イワシ ツノギ ヤリモチ バンジロ ノドグロ イカケ エイ カレヒ タイ フグ イカ タコ エビ
 ホウボウ クズナ ボツコーバクチ メンバウ 銀ダチ ハモ シビ(マダロ) オコデ アナゴ サバ アジ
 モアヅ カツヲ プリ ヒラソ ゴチゴリ カワラケ イトヒキ(ハマヒコリ) モツチンメバル アカエイ
 モツ ヤリモチ シヒラ ミズイカ シラス サバ キスゴ イサキ ヒラノ スズキ ナマコ
 イヒダコ トビウオ イワシ ドジヨウ ボラ チダヒ ウナギ ネコザメ ロダヒ(チンダイ) ナマズ
 コブタヒ ウルメイワシ アナゴ サンバサウ
 貝類—アワビ サザイ タチカヒ セイ
 海藻類—ワカメ カジメ ホンダワラ

種類	昭和元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
イワシ	1100	1500	1100	2500	1100	500	200	200	200	300	100
サバ	1100	1200	1200	1200	1100	1500	1200	1000	2500	2500	2000
マダロ			1100	200	250	200	1000	100	1200	2500	2000
ブリ			1000	2500	2000	2200	2000	1100	1100	1500	2000
タイ	2500	2500	2000	2500	2000	1500	2500	2000	2500	1200	1800
クロダイ								100	100	100	100

高獲漁業漁洋遠				表 高 獲 魚															
其他	タヒ	カレヒ	ヒラメ	ナマコ	タユ	イカ	マス	カツチ	サケ	トビウオ	アジ	カレヒ	イワシ	サバ	マダロ	ブリ	タイ	クロダイ	
—	—	—	—	—	100	270	—	—	—	—	150	—	1100	—	—	—	—	—	—
—	2500	—	—	100	150	270	—	—	—	—	250	—	1500	—	—	—	—	—	—
1000	11000	—	—	100	100	2000	120	—	25	1000	250	—	2500	—	—	—	—	—	—
1000	2000	—	—	100	100	2500	20	—	25	1200	250	—	2500	—	—	—	—	—	—
—	1000	—	—	100	20	2000	200	—	100	1200	1200	—	2500	—	—	—	—	—	—
1200	2000	500	—	1200	50	2500	200	—	120	1500	2200	—	2500	—	—	—	—	—	—
1200	2500	200	—	100	150	2500	120	—	20	1000	1200	—	2500	—	—	—	—	—	—
1200	2000	2500	—	100	200	2500	20	—	25	200	1200	—	2500	—	—	—	—	—	—
2500	2000	2000	—	120	110	2500	25	—	25	200	2500	—	2500	—	—	—	—	—	—
2500	2000	2000	—	100	200	2500	25	—	25	1500	2500	—	2500	—	—	—	—	—	—
2500	2000	2000	—	100	200	2500	25	—	25	200	2500	—	2500	—	—	—	—	—	—

▽漁獲方法

1 一本釣



主としてブリ、ヒラソ、カツラ、ワカナ、シヒラ、等を釣る。

2 さびき

主としてブリ、ヒラソ、カツラ、アカバナ、シヨジゴ等を釣る。

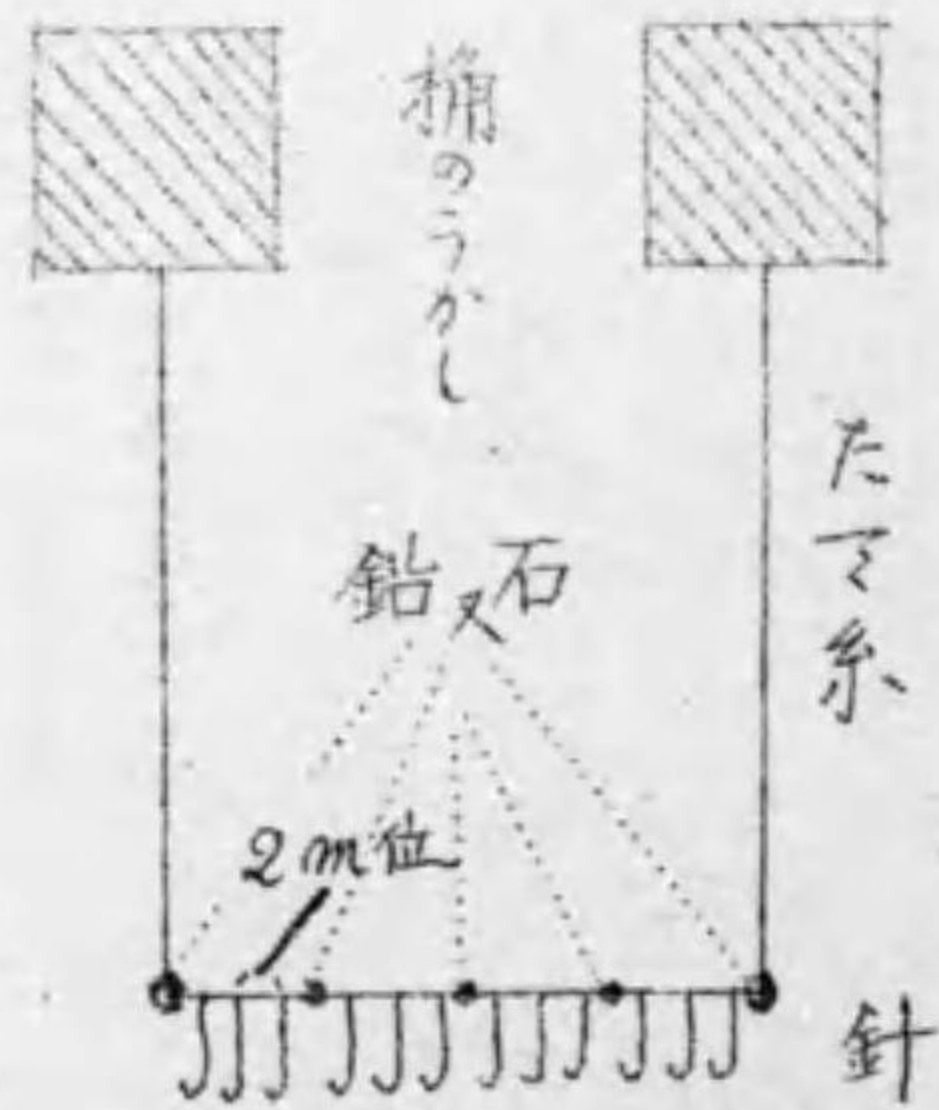
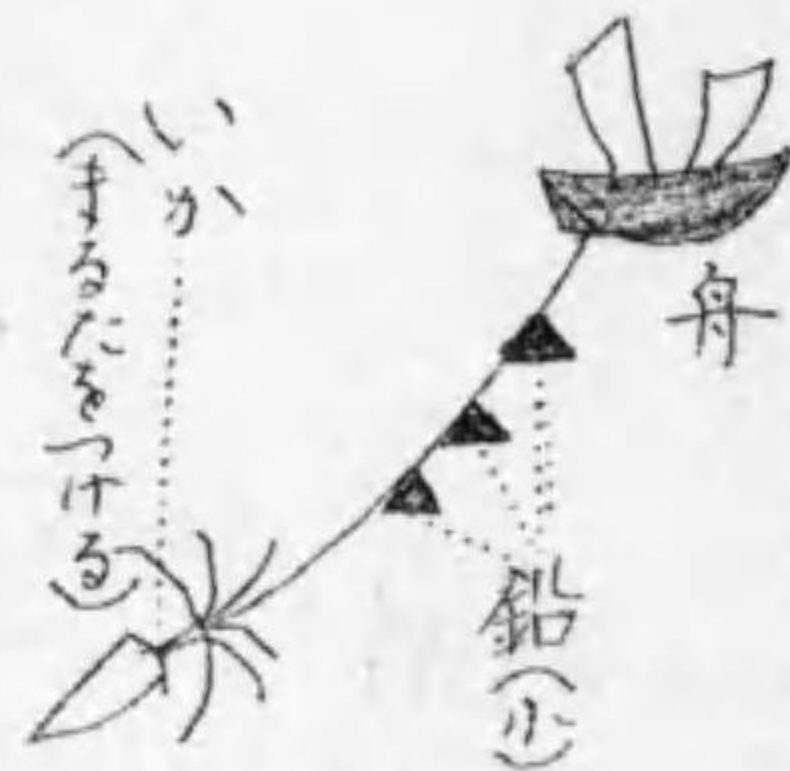
3 なわはへ

主としてタヒ、チンダヒ、アカミヅ、ボツコウ、モツ、カイミヨウ、ブリ、ツノギ、トンケイ等を釣る。

餌はイカ、エビ、アジ、イワシ等

4 よつばり

四角の網で上方より鏡で魚の入るのを見る。網の中央は袋になつて中に魚が入る。外の舟で引上げる。主としてモツチン、イサキ、アヂ、アイノイラ、キントキ等を獲る。



魚船噸數						海藻類漁獲高				
計	十噸以上	五噸以上 十噸以下	五噸未満	動力ヲ有 セザル船	種類	其他	テングサ	ワカメ	アマノリ	種類
六〇	—	—	九	△	昭和元年	二八七	一三五	三〇〇	—	昭和元年
△	—	—	七	△	二	三〇〇	二五〇	三六〇	—	二
△	—	一四	三	△	三	一五〇	五〇〇	四〇〇	—	三
△	—	一五	—	△	四	一五〇	五〇〇	四〇〇	—	四
△	二	二〇	—	△	五	九五〇	一〇〇〇	一〇〇〇	—	五
△	二	七	—	△	六	一八〇	三〇〇	四〇〇	—	六
△	二	七	二	△	七	一五〇	七〇〇	一〇〇〇	—	七
△	二	二〇	二	△	八	六〇〇	二〇〇	一〇〇〇	△	八
△	二	一〇	一	△	九	五〇〇	三〇〇	二五〇〇	四八〇	九
△	—	七	—	△	十	三〇〇	七〇〇	四三〇	三〇〇	十
△	—	四	—	△	十一	三〇〇	九〇〇	三七五〇	六〇〇	十一

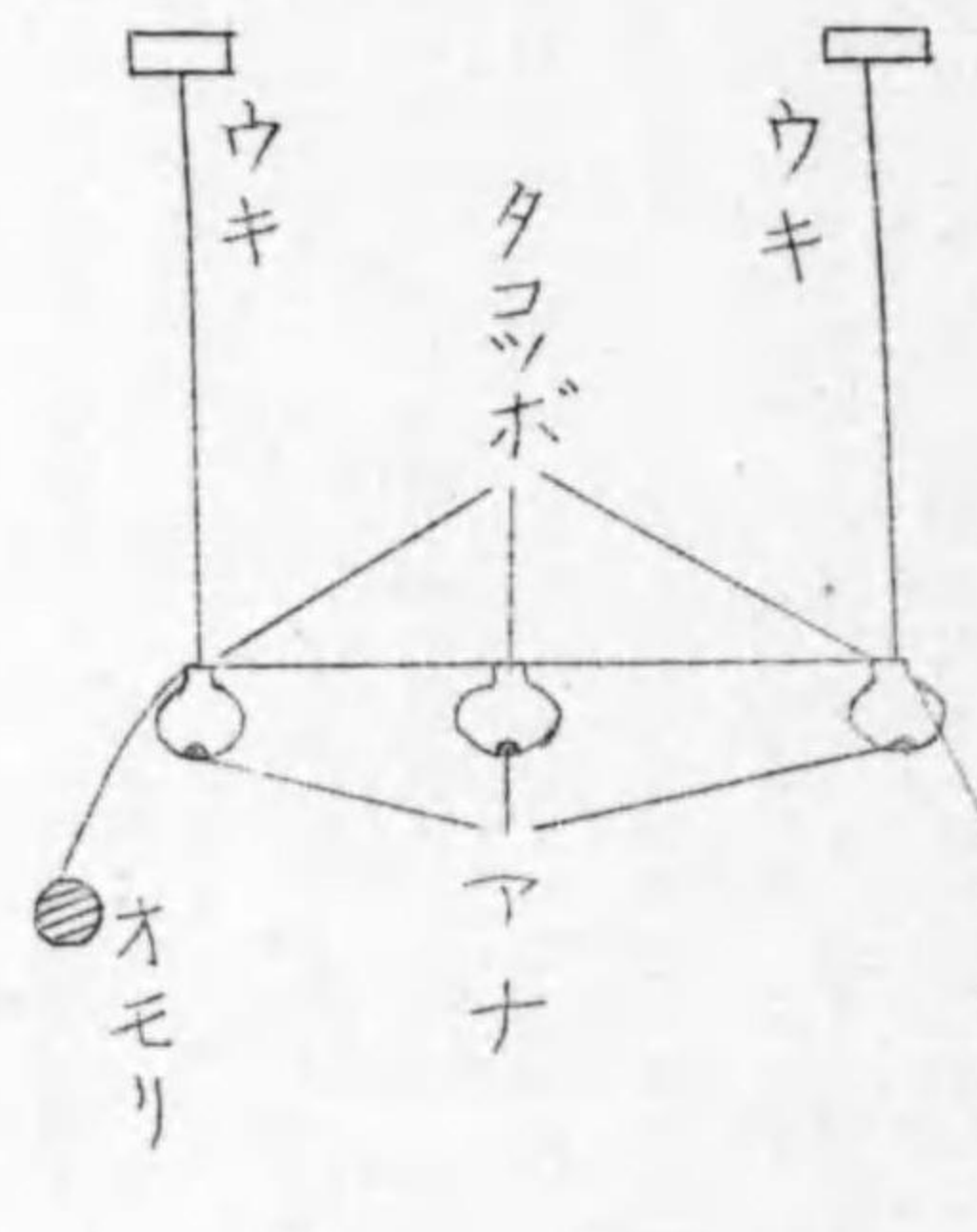
8 物 具



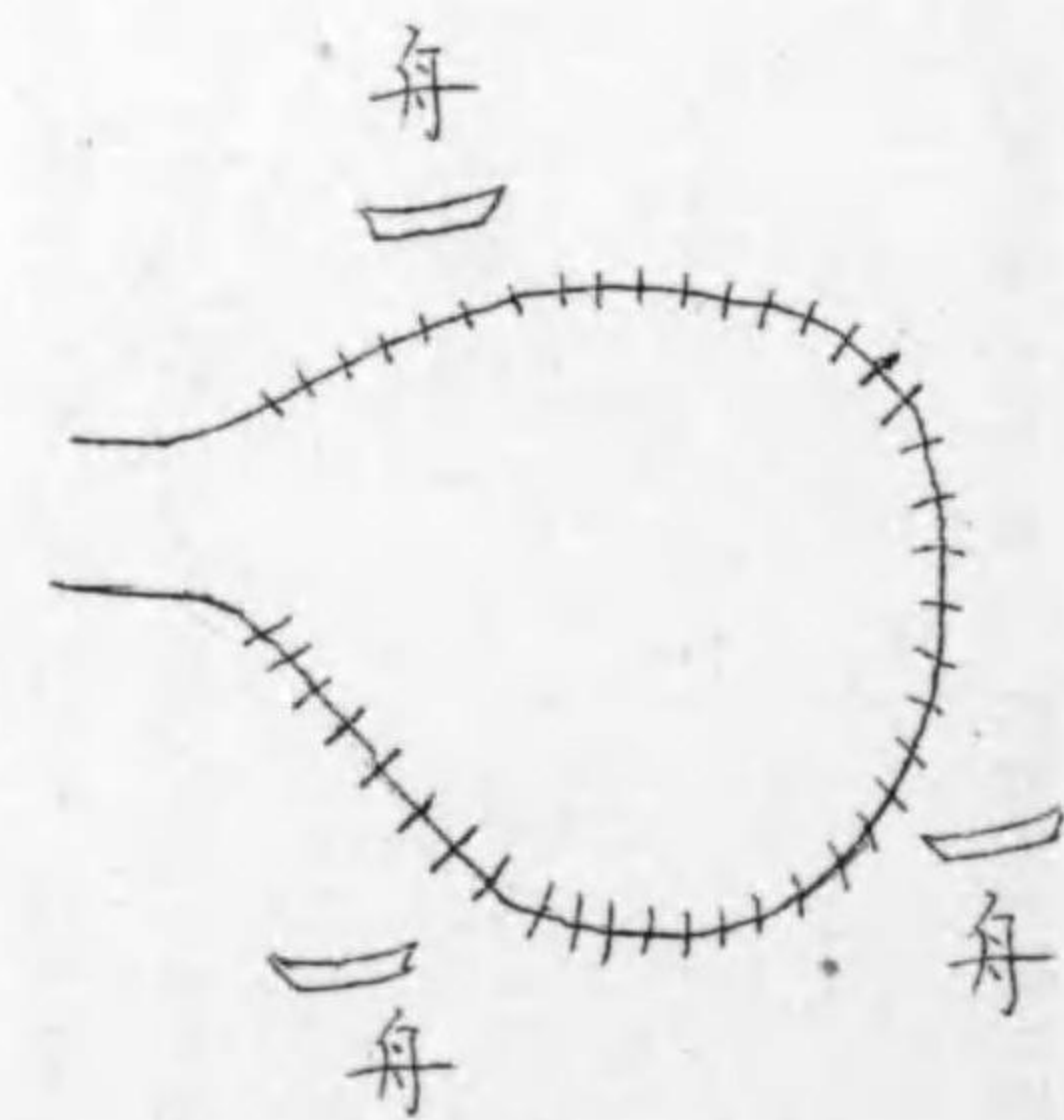
いかを
餌にする

主としていかをつる

9 たこ 壺



10 ぢびき網 (いわしあみ)



11 大敷網 (まぐる網)

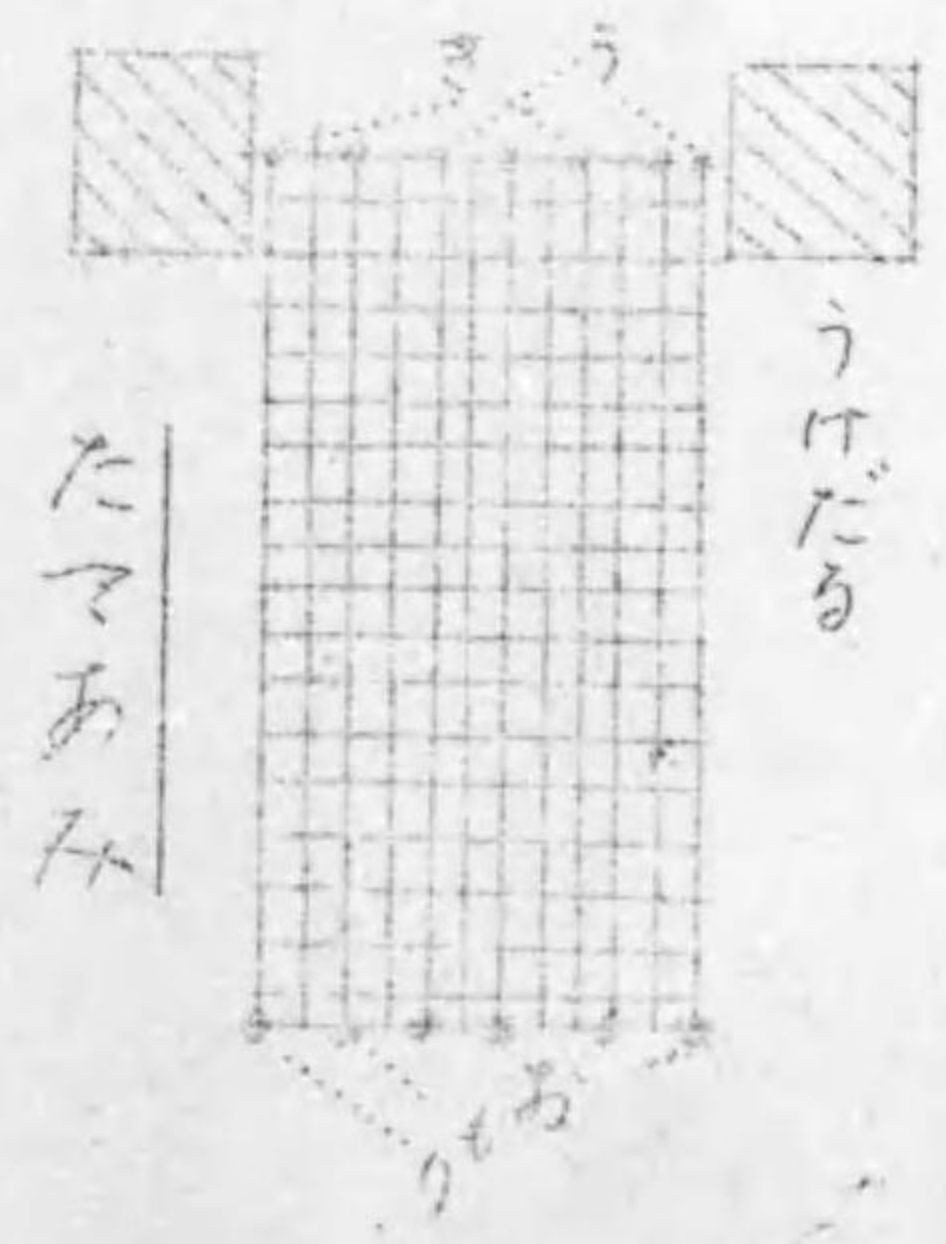
垣網にそつてはいる魚は身網に入る。

5 立てあみ

二つの方法。

1、夕方につて朝上げる。自然に魚が引か、つてゐるのをさる。
ロ、一方より魚を追ふミ網に引か、る。(魚の多い時)

6 きんこ



主としていかをさる。
(舟ではじきを引いて)

いか形 桐

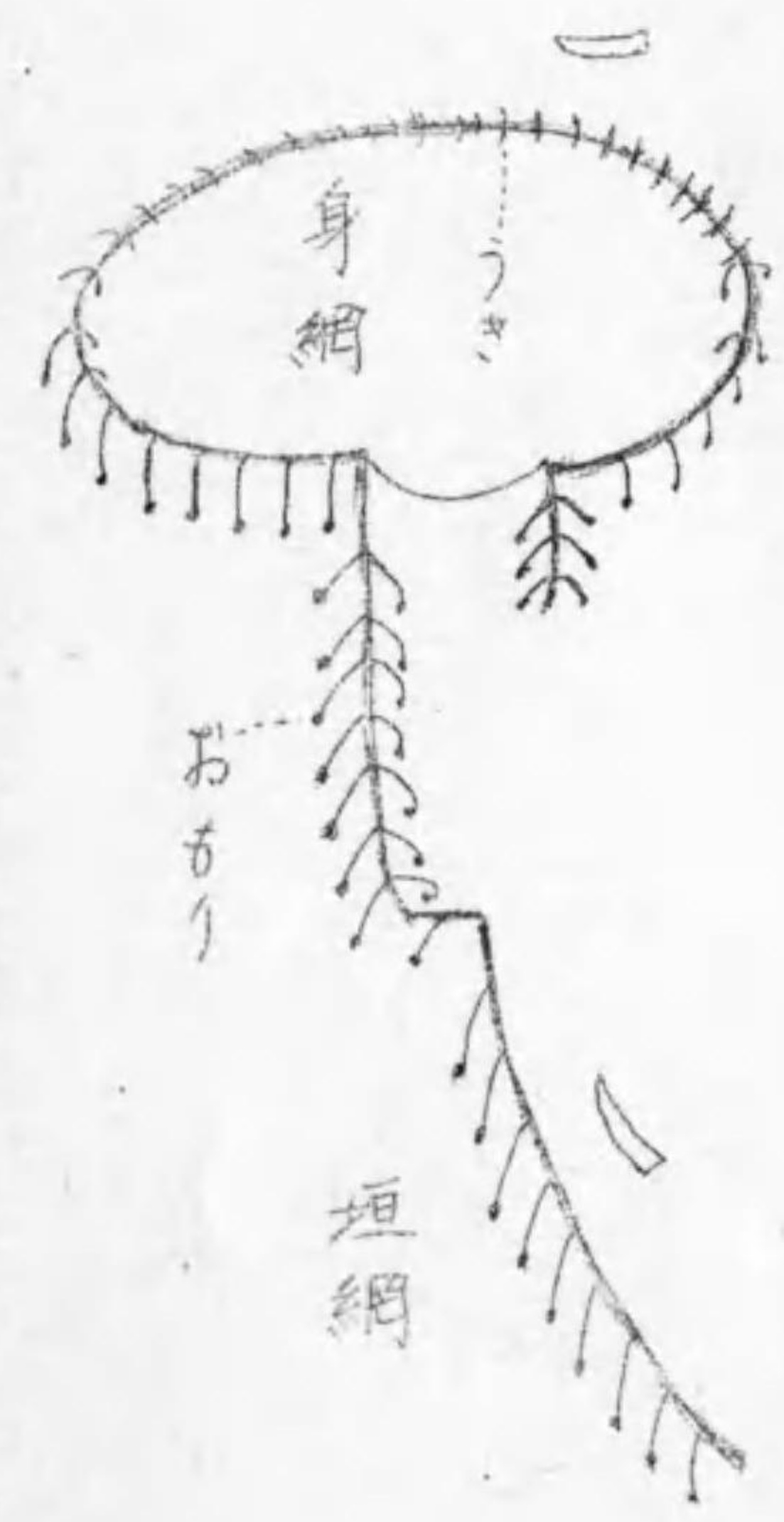


引く

7 いか形 (けい)

舟ではじきを引いてとる。主としていかをさる。





大敷に従事する者は本村民は少なく、遠く鹿兒島縣よりやミひ入れて魚獲に従事させてゐる。津摩米谷繁太郎氏は萬事を世話督勵してゐられる。濱田漁市場に毎日出るまぐろは本村よりの移出である。

周布川よりは鮎(三二〇圓) 鰻(二〇〇圓)等の漁獲がある。本村の鮎は風味の優良な点では特に名高いもので、六月一日の解禁には周布川の上流、下流には若人も老人も競つて鮎掛に出る。又遠く濱田地方よりも盛に来て楽しんでゐる。

十月、十一月落鮎時期に於ける鮎釣の壯觀も亦格別である。七八寸の大鮎銀鱗を見せて、はねる様、喜びに満ちた大公堂、重さうに擔ぎゆく籠、本村でなくては見られぬ情景である。

鮎産額表

昭和元年	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一
九〇〇圓	一〇〇〇圓	一、一〇〇圓	一、二〇〇圓	一、三〇〇圓	一、七〇〇圓	二、一〇〇圓	二、二〇〇圓	二、三〇〇圓	二、四〇〇圓	三、〇〇〇圓

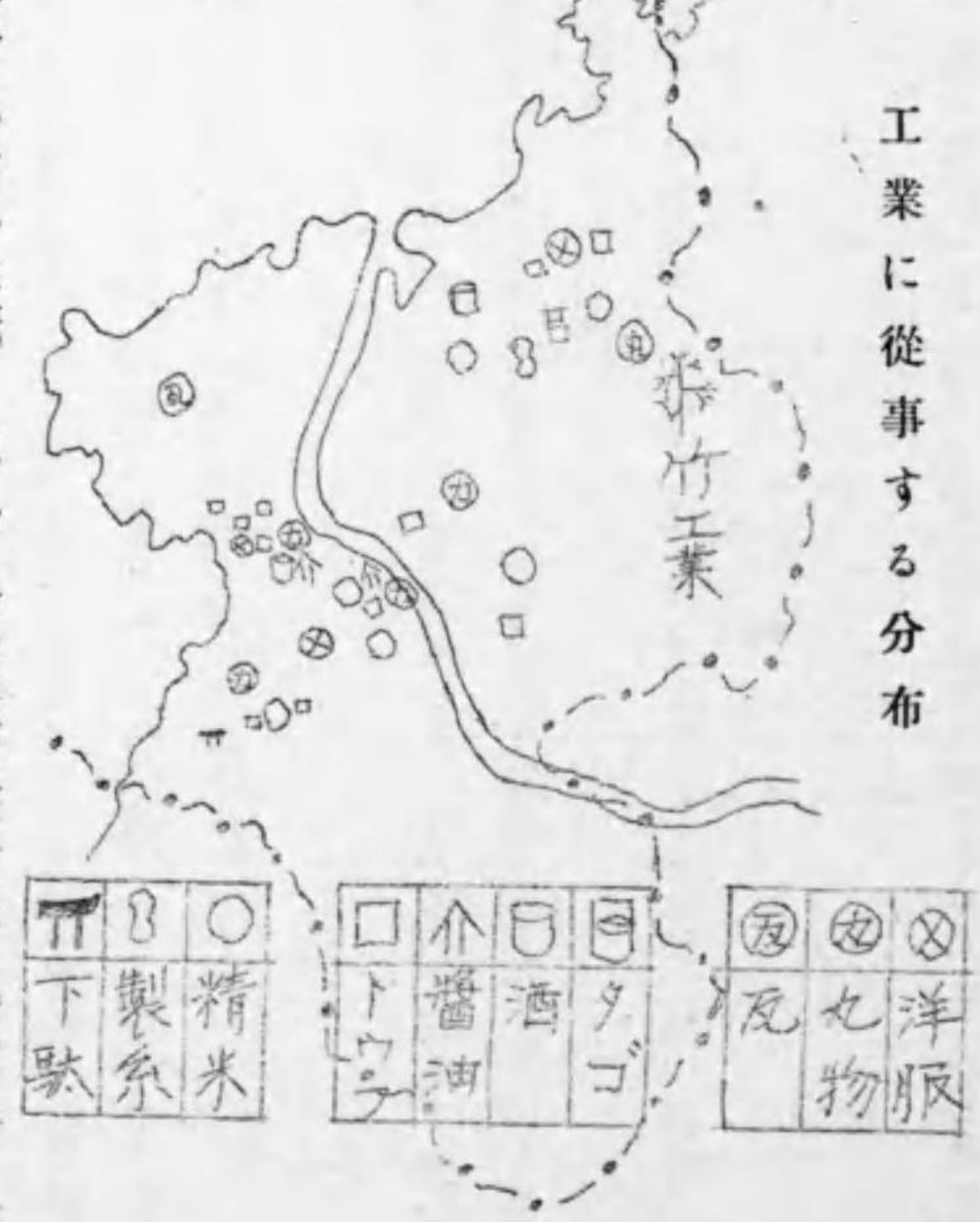
表を見るに年々増加しつゝ、ある。漁獲した鮎は生魚にして濱田方面へ送つてゐる。

第四節 工業上より見たる郷土

1 工業形態

周布村に於ける工業は其の性質から見るに、概ね手工工業であつて極めて小規模であり、又機械や動力なきの力をかるこは少なくさちらか言へば工藝的性質を多分に有つたものが主体をなしてゐる。而して其の産額規模等の點から見るに赤瓦製造、粗陶器、清酒醬油等の製造が村の工業を代表してゐる。其等の原料は大部分郷土より得られ郷土人によつて作られて行くものであるから餘程郷土的特性がある。其の販路は随分廣い。

工業に従事する分布



2 瓦粗陶器工場

出雲から石見に入る時でも、山口縣から石見に入る者でも、石見に近づくにつれて黒瓦の家が赤瓦に移り變つて行く景觀に氣づくであらう。實に石見瓦は我が國に於ても名高いものである。其の赤瓦は主として石見中央地域で製造されてゐる。本村も其の産地の一つで日脚津摩の二ヶ所にある。其の工場は第三紀古層よりなる赤土の丘陵の末端及丘陵上に立つてゐる。故に良質の粘土が容易に得られる。

瓦は普通一竈に三千枚乃至四千枚焼く事が出来、竈の配列が傾斜面に並ぶのは火を下の竈から入れるので上は逐次温まり燃料の経済にもなり、土地の経済的使用にもなる。

作業は一般に農閑期を利用してゐる。職工を雇ふ關係上、寒い時期が主製造期となり土と水との仕事は餘り能率が上らないが、併し製作された赤瓦は霜や雨に對して極めて強いので黒瓦等に比して遙に山陰の氣候には適してゐる。

年産額三二八〇圓位で多く奥部へ送る、現在日脚工場では瓦製造をやめてゐる。又粗陶器も之等の工場で製造され製品の大部分は附近の地に捌かれ、一部は海を越え遠く北海道、朝鮮等に送られてゐる。産額は一八〇〇圓である。昭和十一年度驛より發送された瓦は一五〇〇、煉瓦陶器土器八屯、摺鉢二五越で此等は主に太田淺利方面に移出されたのである。

3 清酒と醬油

本村第一の農産物は米である。村内に於て需要を満した余りの米は他に移出してゐるけれども、一方清酒の原料として供給されてゐる。酒場は二ヶ所にあつて村内に供給され附近の町村に朝櫻、長壽として移出されてゐる。昭和十一年度の産額は二三六〇〇餘圓で一四屯の移出をなしてゐる。移出先は岡見、鎌手、益田方面である。

醬油製造所も二ヶ所あつて村内の需要を充す位の事で止まつてゐるが、昭和十一年度に於ては二〇屯位が三保、三隅、益田、横田方面へ移出してゐる。年産額一二〇〇圓である。

4 其他の工業

菓子製造として五〇〇圓、村内だけでなく美川、長濱方面へ移出してゐる。上品な菓子は他より移入してゐる様な状態である。

飲食用器物一五〇〇圓、和洋服裁縫品四三〇〇圓、金物一八〇〇圓、竹細工一五〇〇圓等で、工業戸数は二五戸で工業者三一人、全戸数の三・八パーセントで職業者より見るに二・八パーセントになつてゐる。工産總額三四五一〇圓で従業者に比

して相當の生産をあげつゝある。

工業製造調

品名	戸数	職工	價額
和服裁縫品	三	五	三〇〇圓
提灯	一	二	五〇〇
傘	一	一	一〇〇
履物	一	一	五〇〇
豆腐、油揚	一	一	一〇〇
葯	一	八	三〇〇
醬油	二	二	一〇〇

第五節 村の交通と商業

村内の道路分布状態を考察するのには海岸線に畧々並行して走るもの、他は周布川に沿ひ之に畧々直交して走るものこの二型を幹線として數多の支線を派出せしめてゐる。

A 海岸線に並行せるもの

國道

長濱方面から西走る國道は本村の東境日脚峠に於て二十米の高所を蛇行して日脚部落に出る。これより原井、新市部落を縫つて大麻村に入つてゐる。日脚峠を下れば直ちに周布平原で之から大麻村界迄は海拔五米を出ない坦々たる直線路で、運輸能率の最も大なる所である。

舊道

國道と畧々並行して走るものに舊道がある。舊道は長濱脇から宮山と高野との間なる二十米の峠を越へて山崎に出るものである。國道の迂回線に比し距離が短かいから古來重要な交通線として利用された譯である。山崎を出てからは國道に並行して田圃の中を西走して新市に出る。

B 周布川に沿ふもの

河の兩岸を上流に向つて走るもので後背地との連絡に資するために設けられたものである。河谷が交通路として選ばれてゐることは何れの河でも見受ける所である。

其他の里道

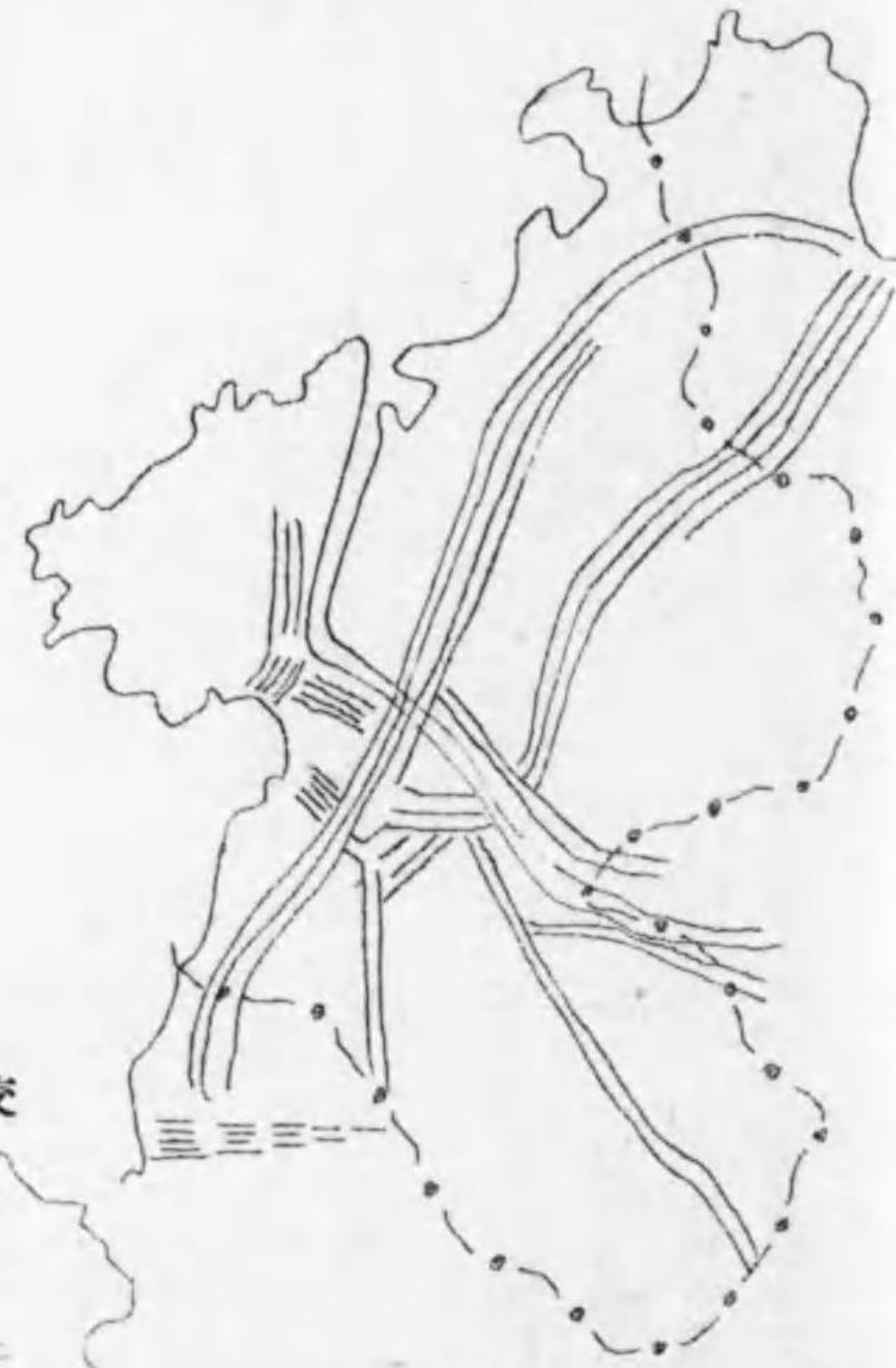
以上の線路を幹線として幹線と幹線との連絡各部落間の連絡のために平原及び各谷線にそひ設けられてゐる。

交通量

A 通行者の最も頻繁な所は新市、原井、津摩、日脚のやうに聚落の密集してゐる所を中心とし、之を去るに随つて少くなる。殊に驛前道路に於ては汽車乗降客が本村は勿論、隣村の一部からも吸収されるため交通量が最も大である。他村への通路について見るのに山崎、長濱越が一番多い。これはこの峠が古來交通上如何に重要性をもつかを如實に物語るものである。國道の東端が西端に比し少數であるのも一つはこの峠を利用するからである。次に周布川へ沿ふ大内への通路は兩岸に各一條宛あるけれど、人は多く聖徳寺前の道路を通行し、吉地道は馬車道になつてゐる。要するに道路交通は交通機關の發達した今日に於てはたゞ部落と部落、本村と隣村の連絡をなしてゐるに過ぎない。

B 諸車の通行量について見れば國道の利用率が最も大である。奥部への連絡は地勢の關係上諸車の通行困難なる爲に頻

(人) 量 通 交



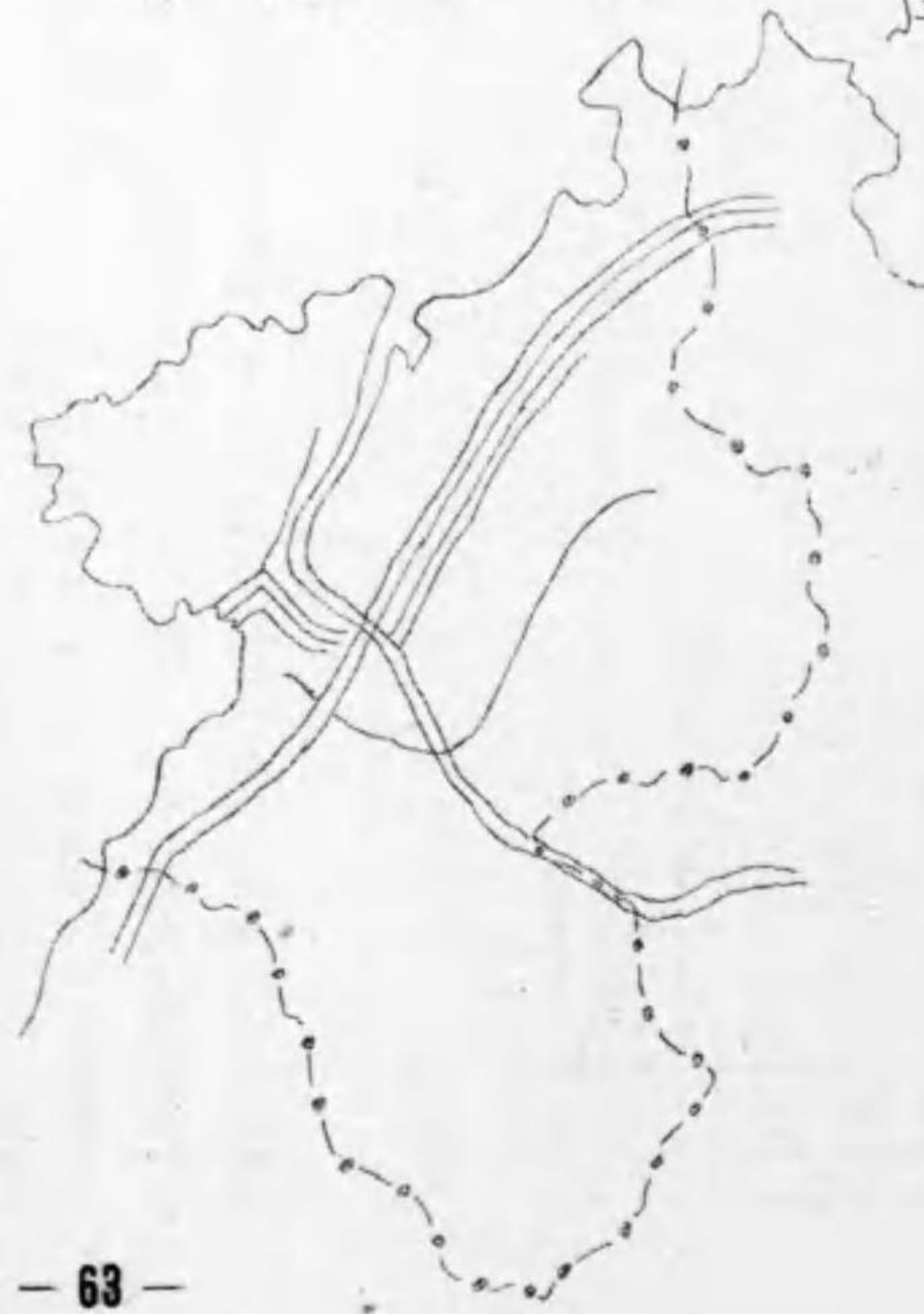
諸車數

- 荷車 六五
- 自動車貨物 一
- 人力車 一
- 馬車 一一
- 自轉車 二二八
- 自動自轉車 一

鐵道

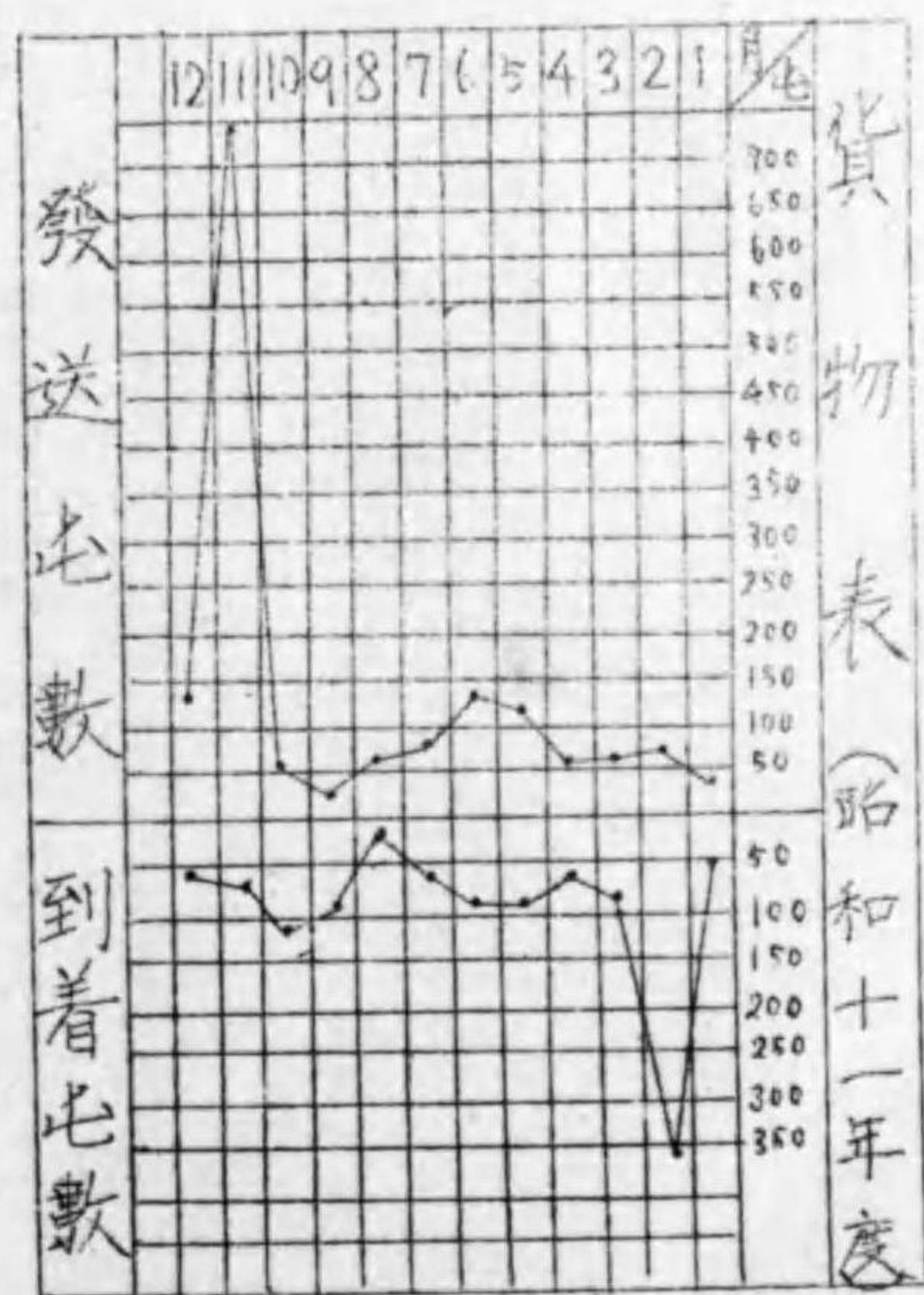
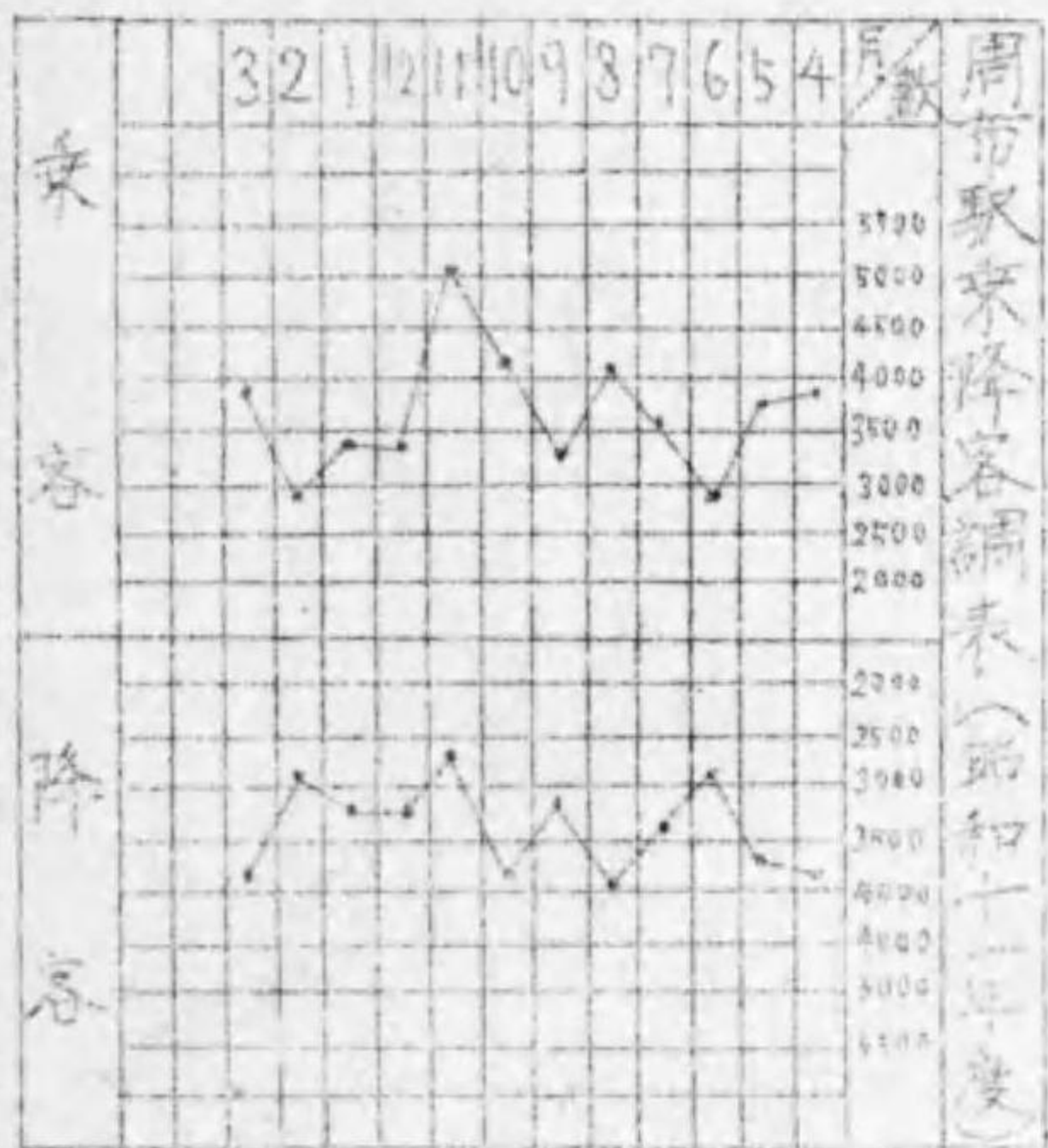
周布驛の乗降客總數は昭和十一年乗者四四一〇四人、降者四一〇四六人である。輸送量については大と云ふことは出来ない。これは周布村そのものが農村である關係上、人の往來が頻繁で

(車 諸) 量 通 交



繁ではない。特に注目すべきは周布川の上流を控へてゐるのに關はらず、之が後背地との連絡が十分であることである。これは大内村より奥部の貨物や人等は本村へでないで高野越で長濱に出るからである。このコースを選ぶことは距離を餘程短縮することになるから縣道、里道等が設けられて奥部物質の輸送をはかつてゐるのである。

ないのミ、相當な後背地を控えながら石見長濱驛へ吸収されるからである。これを各月について考察するのに最多月は十月、十一月で乗客に於て十月四一四〇人、十一月五〇二一人、降客に於て十月三九三四人、十一月三九七四人を示してゐる。これは地方的な行事である祭日がある關係上、祭客の移動を示してゐるものと思はれる。その他三四月の旅行シーズン、八月の盆に於て山があるのは注意すべき現象であらう。最小の月は六月で乗降客總數五九五一一人、降客者二九八六人である。これは農繁期即ち田植時である。純農村の特徴を明瞭にあらはしてゐる。尙十一月の收穫時、二月の寒氣で家に引籠つてゐる時季に谷を示すのは



面白い事である。貨物の輸送状況は總屯數一七三九屯(昭和十一年度)で米子事務所管内中第八〇位である。周布驛に於ける發送貨物の主要なるものは木材類、木炭、薪、鹽干活鮮魚等で、木材類は全体の五割以上も占め主として大阪、京都、名古屋方面へ移出されてゐる。

到着貨物は木材を第一とし、肥料これに次ぎ石炭、砂糖、セメント等である。發送屯數十一月が最も多いのは木材、果實等が移出されるからである。到着屯數二月に多いのは肥料を多く移入し、來る耕地の準備にあつたためである。通信については後述する。

第六節 村の商業

商業は大正十一年鐵道開通以來日々隆盛になりつゝある。開通以前迄は繁榮地帯を遠ざかつてゐた關係上、商取引も金融も不活潑で、加ふるに工業は家内工業の域を脱せず商品の如きも原料を移出して、製品を購置する原始産業村の特色を發揮してゐた。

商業戸數は五一戸で、全戸數の八・九パーセントに該當してゐる。反物、日用品、雜貨商、が主なものである。是等の商家は各部落を商圏として活動してゐる。商家の多いのは新市、原井の左岸で本村の商業地區をなし、種々の商家軒をつらねてゐる新市、原井を取り去つたなら本村の商業は見るべきものはない。

主として大阪、廣島方面より綿糸、綿織物を移入し、活鮮魚を下關、大阪名古屋方面へ移出してゐる。移出總額は一三〇〇〇圓で、移入總額は一七〇〇圓で移出が大である。喜ばしきことではあるまいか。

商業としては將來尙ほ發展の餘地があらうと思はれる。然し日用品は濱田に近い爲に其處から買入れて役だたすから商家にこつては打撃である。

移出品は米、木材、魚類、摺鉢、醬油、瓦陶器類、下駄甲、果物等である。

(第十六章其他周布驛移出品參照)

昭和十一年主なる移入品を商店について調べる。

品名	移入総額	移入先	品名	移入総額	移入先
肥料	九〇二八〇圓 三三四〇圓	廣島 大阪	綿	二〇〇貫	廣島
木綿	一二〇〇反	廣島 大阪	呉服	八〇〇反	廣島 大阪
洋反物	五〇〇反	大阪 廣島	足袋	三五〇〇足	廣島 大阪
帽子	三五〇圓	廣島 大阪	雜貨品	三〇〇〇圓	廣島 大阪
其他	二〇〇〇圓	大阪 廣島			

第十章 聚落

聚落の分布形態

人家の分布形態を見るに、人の生活が如何によく自然的要素に關係してゐるか、知られる。灣岸に沿ひ二つの密集した聚落（日脚と津摩。）平原中に四つの聚落、山麓線を環狀に取り巻く孤立聚落、丘陵台地に疎集聚落を形成して居る。山崎の高野越は昔から重要な交通路でありながら、聚落の發達を見る事が出来なかつた等は特に注意すべき事である。次に部落別に調べて見よう。

一、日脚

日脚の主要部は周布川沖積土、砂土の上に百七八十戸許り密集してゐる集落である。家屋の分布状態より考へるに國道開通以前から既に聚落は形成されてゐたものだと思はれる。家屋の立地は整然せず不規則である。自然道路もそれに沿ひて形成されてゐる。海岸に向かつて四本の道路がついてそれを横に結ぶ小路が數多ある。國道に沿ふては新に商業の色彩を帯びた人家が出来た事は圖によつても知られるであらう。これ等商家の商圏は日脚部落を顧客として活躍してゐるものである。商家でも工業をする家でも大抵は農業をしてゐる。生業は大部分が農業で半農半漁が數戸あるに過ぎない状態である。人家の間は多くは桑園で周布川の重要な養蠶地帯をなしてゐる。小規模舊式なる製絲工場もあつて生糸及絹織物を産してゐる。家屋を見ても養蠶期に空氣の流通に便する爲に屋根をくり抜いた空氣抜が設備されてゐるのが澤山ある。東部山麓には農を主とし竹細工を副とする聚落があり。台地上には純農の聚落がある。

二、周布

周布には次の二つの集團がある。
1 原井部落は國道を挟んで各所に散在し、所謂散在型をなしてゐる農家の集りで耕地に近いのは地理的に大切な事である。一方村政の中心なる役場、教育の中心の學校、金融關係の産業組合もこの靜かな農家に

日脚國道に沿ふ職業別分布



圍れてゐて、其の他には菓子屋一、鍛冶屋一、雑貨商一、醫院一ある位である。川の右岸だけは稍都市的形態を見せてゐて、商家が多い様である。

呉服雑貨商一、菓子屋一、料理屋一、自轉車屋一、理髮店一、雑貨商二があつて小範圍の場所に並立してゐる。

2 周布部落は周布川に沿ひ不規則に散在した農家がある。

此處は純農家であつて商家は一軒もなく日用品は原井に行つて求めねばならないのである。周布區に於ける使用水は多く周布川及小川の水を使用してゐる爲に井戸を掘つた家は少い。

原 井 部 落



周 布 川 右 岸 の 部 落



吉 地 部 落



三、吉地
吉地は現戸數三十五戸の小部落で、山麓或は谷に沿ふた散在型の純農家聚落である。

四、治 和

1 新市は其の名の示すやうに新しく開かれた部落で、國道開通以前は聚落の見るべきものはなかつた。國道開通以後は此の地が周布平原の入口であること、奥部へ入る結節點である爲に漸次發達し停車場の敷設と共に一層隆盛となり、周布に於ける最も活氣のある所で小規模ながら都市的色彩を帯びてゐる。分布圖を見ると肥料屋、菓子屋、呉服屋、金物屋、下駄屋、雑貨屋、料理屋等、があつて都市的景觀を呈してゐる。こゝは交通の中心であつて周布驛郵便局があり多くの人々が入出している。

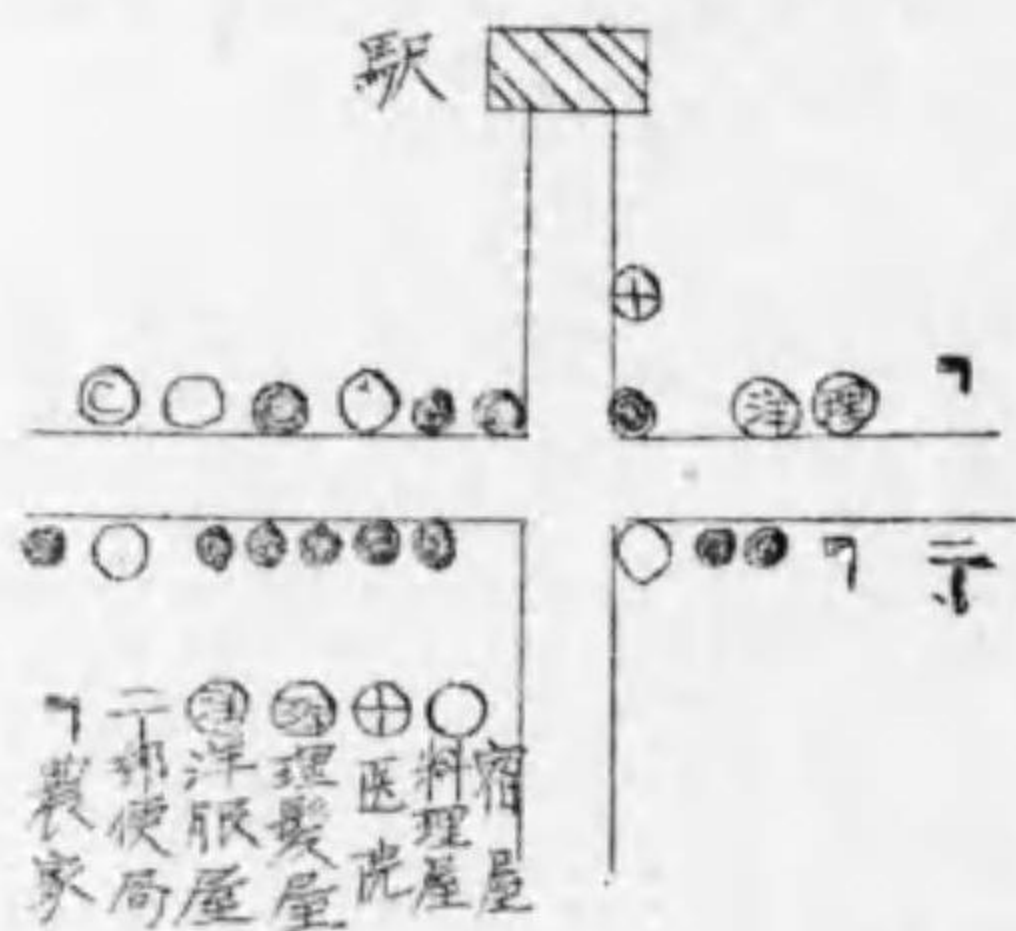
2 門田の純農村部落は散在して立地してゐる。

三 宅 部 落

3 三宅は三宅台地の上に立地してゐる散在型の聚落であつて、家の周圍に樹木多く家の立地も南面し又は南側のくほい所を選んでゐる。此等はすべて北風を防ぐ爲である。

4 鰐石部落は家の前面は周布川に面し背後は津摩丘陵である。此の聚落も三宅聚落と同じ關係あり。

新 市 に 於 け る 職 業 分 布



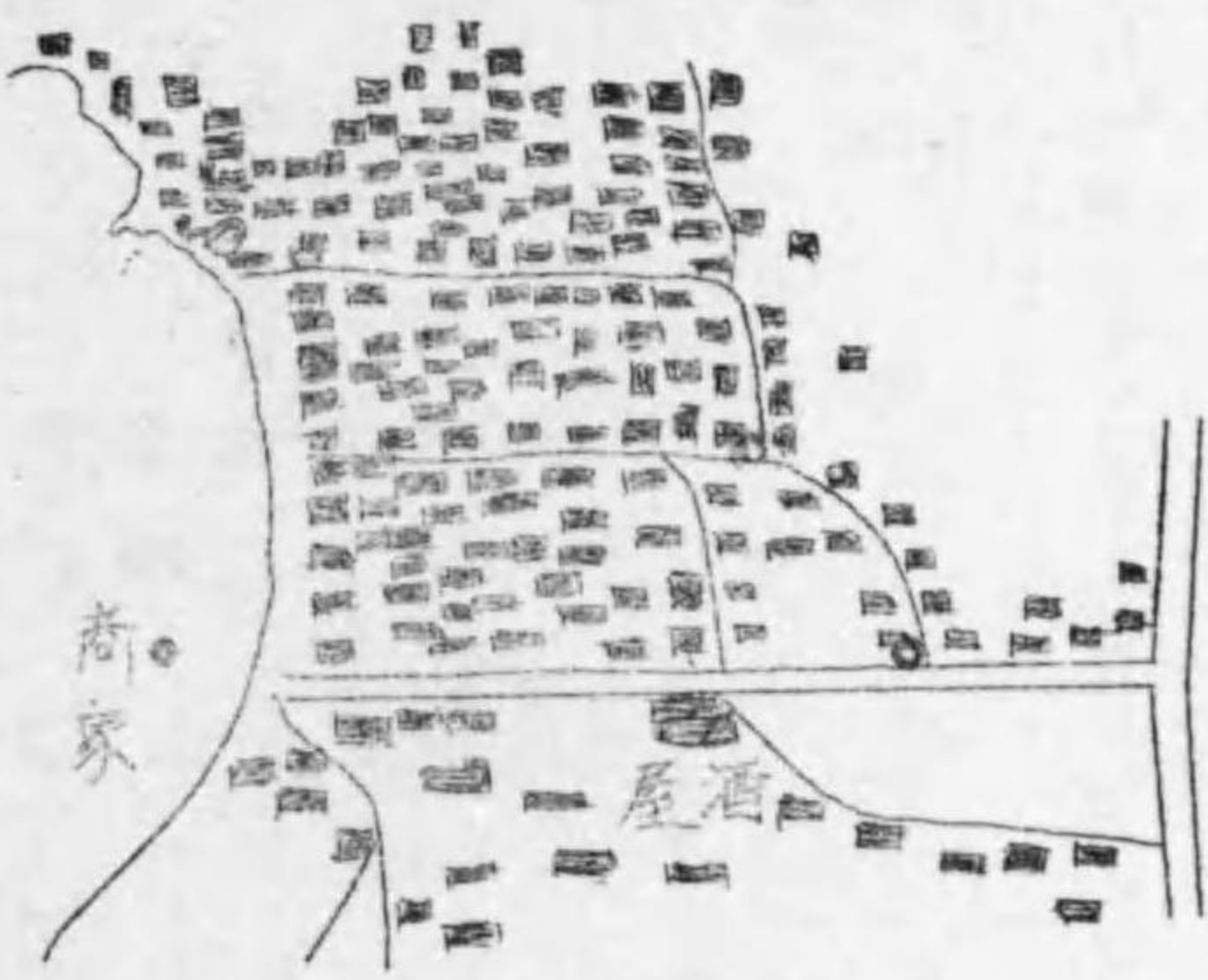
二、津 摩

津摩灣沿岸に百六十戸密集してゐる聚落で、本村唯一の漁業地として活氣を呈し本村にとっては見逃す事の出来ぬ地位を占めてゐる。



部落 津摩

漁業を本業としてゐる者も副業に農業をするから、時化の續く時は畑に出て耕作に従事してゐる。近時沿岸漁業は益々不振に陥り然も魚族の減少と漁價の低落は一般漁民を苦しめ、出稼出漁しても不満に終る状態である爲に、この津摩も生活程度は漸次低下して来たやうである。防波堤は昭和四年三万余圓を投じて築いたものである。(水産業から見た郷土参照) 道路は海岸に至る大通り、それに並行する二本の小道があつてその間に不規則に密集して聚落發達し、北は津摩丘陵によりて寒風を防ぎ、南は三宅台地に及び西部だけ海に面して漁船が出入してゐる。人家は海岸に側面或は後を向けてゐる。これは風を寒さを防ぐ爲である。側面は小さい窓をあけて光を入れるに過ぎない。概して衛生上には余り良好とは云はれない。部落内には商家として菓子屋、煙草屋、酒屋があつて漁民生活の特色を表してゐる。



一郷土の沿革

第十一章 自治

上古王政時代に當つて縣守、國造等がこの地方を統治したのは明かである。下つて鎌倉時代には本村は御神本二郎左衛門兼定の據處であつた。これが周布地頭職の祖である。その子兼氏は南朝に従つた勤王の土豪である。三代時兼に至つて姓を周布と改め蔦巢城に居た。十代和兼は戰國時代の城主で旺んに朝鮮地方と往來し貿易してゐた。元龜元年五月第十四代左近將監元兼毛利氏のために終に之に降つた。後輝元に従つて播州上月城に尼子勝久を攻めた

時戰死した。十五代少輔九郎元盛は豊公の朝鮮征伐に従ひ晋州城攻撃に際し大功を顯はし戰死した。十六代周布吉兵衛尉長次に至り毛利氏の城下長州阿武郡片役村に移住した (三百餘年前)

爾來本村は衰微し昔時の隆盛であつた形は留めてゐない。徳川幕府時代に於ては濱田藩に屬し、古田、松平(周布守)本田、松平(右近將監)諸氏の領する處となつた。慶應二年徳川家茂が長州を征伐する際、藩主松平武聰は幕府の中堅であつた紀州、福山、因幡、松江諸藩の兵と共に防戦した。長軍よく戦ひ幕府意氣昂らず遠田、三隅に敗れて退いて此の地に防がうとして大塚、日脚、内田等を本陣として屯した。七月十六日長軍が不意に大塚方面から直下し突撃進軍して來た。舊式の武器服裝であるために幕軍は利あらず數時間で潰走して濱田に退いた。長軍が代つて入村、吉地大谷氏邸を本陣として屯營し、越えて十七日濱田に進軍した。藩主は防ぐこゝが出来ないのを知つて火を城中に放ち松江に逃れた。そこでこの地方は一時毛利氏の占領する所となり、維新に至るまでその配下となつた。時に本村三宅の村民が一揆を起して長軍に抗したものがあつた。之に組した高原、佐々木、中田、細川某等の五人が長軍のために撃殺せられたといふ。

明治四年廢藩置縣の制が行はれ濱田縣に屬した。明治九年四月濱田縣も合併して島根縣となつた。戸長佐々木小七郎氏が就任し本村全部及び大塚村の一部を支配したが、自治制發布に際し現今の様に五大字を以て組織せられた自治となつた。實に明治貳拾貳年貳月拾壹日時の戸長は佐々木保太郎氏である。以後歴代の村長を経て今日に至れり。

二、納税

藩政時代の税は現物殊に米を以て主税とし、所によりては特殊の税を課し又賦役をも行ひたり。玄米の税をおたかといつてゐた。庄屋は土地の肥瘠に應じて各耕地に按分して課し、秋口郷倉に納める。おたか一石以上を納める者は更に大豆を納める米は家中の飯料に、大豆は味噌の材料になるのである。現在は大字別に納税組合なる機構を設け奨勵に勉める。

納税組合	周	布	第一區納税組合	不良	津	摩	第一區納税組合	不良
------	---	---	---------	----	---	---	---------	----

大体に於て不良部落も年々良効になりつゝ、ある喜ばしい現象を表してゐる。

三、歴代村長

日脚	治和
第一區納稅組合	第一區納稅組合
第二區納稅組合	第二區納稅組合
第三區納稅組合	第三區納稅組合
第四區納稅組合	第四區納稅組合
第五區納稅組合	第五區納稅組合
第六區納稅組合	
第七區納稅組合	
第八區納稅組合	
吉地	
第一區納稅組合	
第二區納稅組合	

四、本村歴代助役及收入役

氏名	就職年月日	主	要	行	事
佐々木保太郎	明治貳拾貳年五月拾六日	耕地整理			
山崎定道	明治四拾貳年七月貳拾貳日	神社会併			
中村豊年	明治四拾四年九月貳拾貳日	事務整理			
桑原顯介	大正四年拾壹月九日	隔離病舎改築、産業組合改立、産業組合事務所新築、部落財産統一、津摩簡易水道設置、周布驛開通			
佐々岡利文	大正拾壹年五月參拾日	八幡宮郷社昇格			
大谷茂	昭和參年八月貳拾五日(現在)	津摩漁港の修築、小學校及奉安殿改築、美川行縣道改修			
助役					
齋藤三五郎	明治參拾貳年五月拾六日	就職	桑原兵五郎	明治參拾壹年	
川北勘二郎	明治參拾參年五月貳拾貳日	就職	森脇利吉	明治四拾年四月拾七日	就職
佐々木利三郎	大正三年九月七日	就職	川崎嘉兵衛	大正八年四月十日	就職
佐々木鐵之助	大正八年六月三日	就職			
收入役					
大谷暉	男(明治貳拾四年)	佐々木治兵衛(明治貳拾五年)	荒木安吉(大正三年)		
荒木安吉	(大正拾五年)	栗栖弘毅(昭和七年)	肥後惣太(昭和八年)		
内田啓太郎	(昭和拾壹年)	(内は就職年)			

五、現在役場吏員(昭和十二年十月現在)

村長 大谷茂

助役 佐々木鐵之助
 書記 戶籍 畜産 赤十字 愛國婦人會 佐々木賢雄
 庶務 社會 柿谷熊次
 書記補 稅務 土木 釜江憲次
 庶務 衛生 大館信行
 勸業 志波清次郎

六、各種委員調(昭和十二年九月現在)

1 學務委員 桑原顯介 栗柄弘毅 山根運太 佐々木利三郎
 原田保吉 田中賢二郎
 2 家屋調査委員 大谷茂 原田保吉 佐々木利三郎 末田平治
 佐々木平太郎 桑原顯介
 3 村會議員 日脚 末田平治 志波虎市 北谷助市 中川新衛門
 佐々木利三郎
 周布 佐々木平太郎 大庭東逸
 治和 原田保吉 清井富市 大野稔太郎
 津摩 桑原顯介 米谷繁太郎
 4 米生産調査委員 佐々木利三郎 熊谷唯一 北谷助一 中川新衛門 佐々木平太郎
 田中兵吉 大庭東逸 花岡繁市 原田保吉 高原時太郎

5 選舉肅正委員

清井茂市 赤尾吉次郎 官本國市 大野倉太郎
 大谷茂 桑原顯介 栗柄弘毅 原田保吉 大野稔太郎
 細川芳太郎 赤尾兼太郎 大庭東逸 佐々木利三郎 末田平治
 志波貞市 北谷助市 山根運太 牛尾壽太郎 田原一雄
 高橋晃雄 栗柄忠市 山崎忠義 熊谷繁太郎 佐田瑤
 佐々木平太郎 佐々木辰三 中川新衛門 米谷繁太郎 大谷彦一郎
 荒木安吉 桑原三郎 佐々木豊太郎 齋藤壽丸 肥後惣太
 内田啓太郎 佐々木賢雄 佐々木鐵之助 柿谷熊次

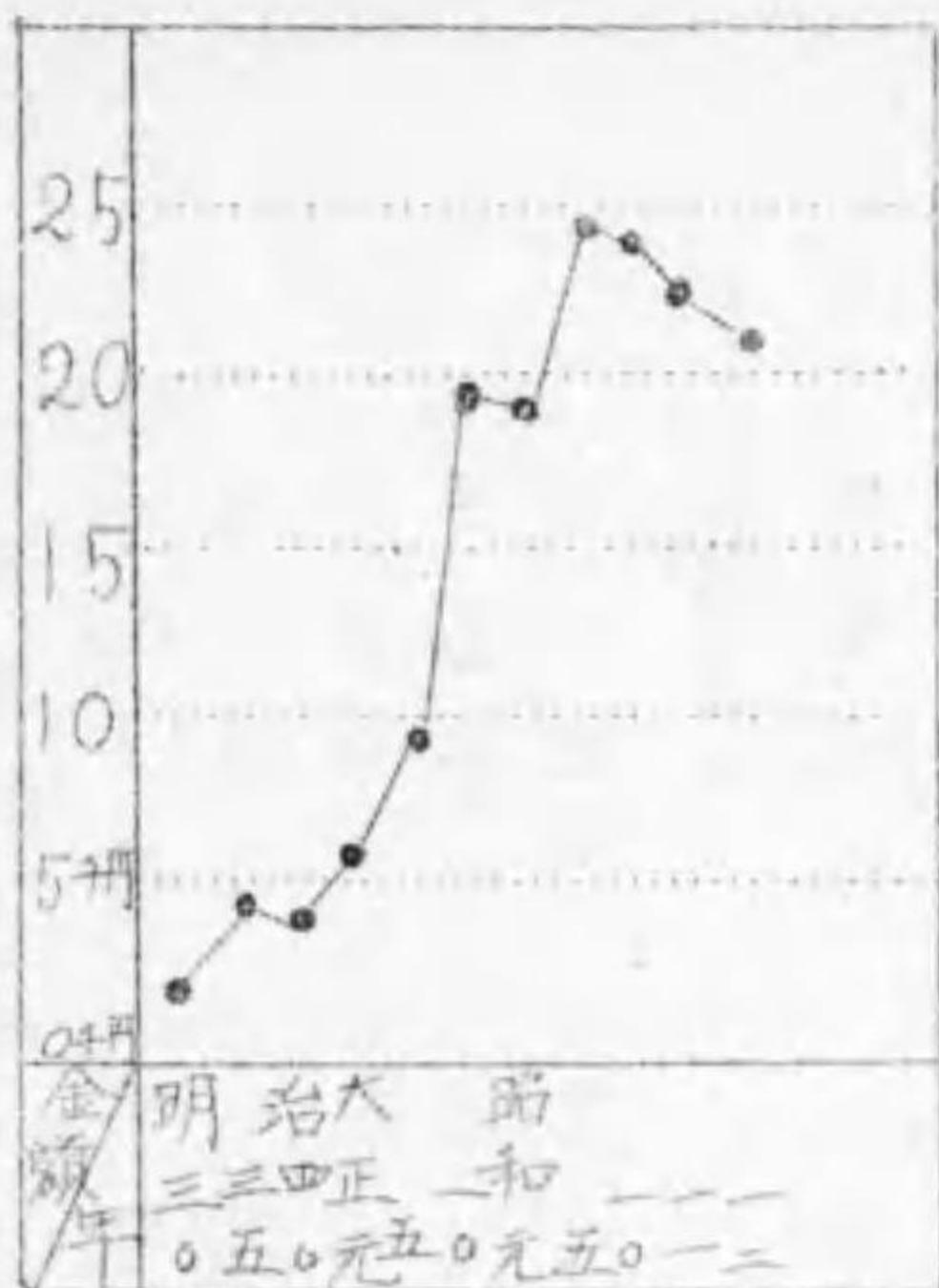
6 振興委員

熊谷 黨 桑原顯介 佐々木利三郎 原田保吉 末田平治
 北谷助市 中川新衛門 志波虎市 大庭東逸 佐々木平太郎
 米谷繁太郎 清井富市 大野稔太郎 山根運太 大谷彦一郎
 牛尾壽太郎 田中賢二郎 飯塚守次 藤井宗三 佐田瑤
 佐々木豊太郎 荒木安吉 栗柄弘毅

7 社會教育委員

桑原顯介 山根運太 熊谷 黨 荒木安吉 原田安吉
 佐々木利三郎 大谷彦一郎 佐々木平太郎 佐々木鐵之助 三浦トメ
 藤井宗三 彌重正巳

七、村の財政の推移



明治三十年以後五年毎の歳費上表の如し
基本財産(現在) 1 現 金 四九六〇〇一・一六圓

2 株 券 三〇〇〇〇圓

3 土地 三九三反二二六
田 〇・三二八反
畑 〇・四〇〇
山林 三八一・三〇九
原野 〇・六一三
雑地 一〇〇・五〇六

八、行政區

村政處理上五大字別周布、日脚、津摩、治和、吉地に分ち各區をもうけ區

周布	第一區	大庭 東逸	三八戸	第二區	佐々木 長二	二二戸
日脚	第一區	佐々木 平太郎	三六戸	第二區	中川 新五門	二八戸
津摩	第一區	佐々木 利三郎	二二戸	第四區	佐田 瑤	二二戸
	第三區	砂取場 藤市	二二戸	第六區	松本 熊五郎	二四戸
	第五區	北谷 助市	二五戸	第八區	山崎 要造	一二戸
	第七區	熊谷 唯市	一二戸	第二區	濱本 文三郎	四〇戸
	第一區	金田 六市	二四戸			

長を置きて區内の世話をなさしめてゐる。

九、周布村自治協會

大正拾四年佐々岡村長、戸主を以て自治協會を創立す。本村の自治の作興、教育産業の發達其の他一般本村の改善を期するを以て目的としてゐる。

事業としては地方發達に關する調査研究、地方改良の講演會、自治功勞者の表彰及死亡者の追悼、地方改良に關係ある事業の援助等をなしてゐる。各部落には男戸主會、女婦人團體の組織あり。部落戸主會は自治協會を小さく部落に適用したもので部落の改善を期するを目的としてゐる。婦人團體は周布村自治會に屬し思想善導地方改良民力漸養を目的としてゐる。各部落支會について見るに六つの支會を設立し大いに活躍しつゝある。

團體名	所在地	代表者氏名	員數	設立月日
周布村婦人會	周布	田原 一雄	三四人	大正十四年四月壹日
原井支會	原井	竹田 スエ	五三	大正八年七月六日
日脚支會	日脚	山根 運太	一八四	大正四年七月五日
津摩支會	津摩	桑原 顯介	一五六	大正拾貳年六月五日
治和支會	治和	大谷 彦一郎	一一三	大正拾貳年一月
吉地支會	吉地	大谷 茂	三五	全上

第十二章 郷土の各種団体

一、各種教化及宗教団体

1 帝國在郷軍人會周布村分會

明治四十三年十二月十一日帝國在郷軍人會周布村分會として創立、當時の分會長は荒木安吉氏であつて引續き田原理太郎、佐々木泰助、熊谷薫の諸氏を経て現在佐田瑤氏に及んだのである。會員二一七名（現在一一〇名、出寄留一〇四名、退營海外移住四名）である。分會は本會の設立趣旨に依り聖旨を奉体して軍人精神の鍛練軍事能力の増進を計り、延いて社會の公益を増進し風教を振作し國家の干城、國民の中堅たるの實を擧ぐることを以て目的として、初代分會長より會員までその達成に努めて來てゐる。分會は班（行政區劃による）及び組に區分し班長及組長を置いてゐる。

周布班（第一組第二組）

日脚班（第一組第二組第三組）

津摩班（第一組第二組）

治和班（第一組第二組）

吉地班

主なる事業は戰病没者招魂祭（村と共催）、入營入會報告祭（村と共催）、入退營兵の送迎、未教育補先兵の教育、講演、研究、演練、武術大會、遺族慰安、召集事務の援助、奉仕諸事業、雜誌の購讀等である。本村分會はよく統一され優良分會として昭和十二年二月十一日に帝國在郷軍人會濱田支部より表彰を受け、昭和五年及び十年に銃劍術優秀に付二回帝國在郷軍人會濱田支部より表彰を受けてゐる。

2 軍友會（從軍團）

戰役從軍せし將兵にて組織す。現在會長は陸軍歩兵少尉荒木安吉氏である、

日清戰役 一四

日露戰役 九一

北清事變 二二

滿洲事變 七

3 周布村青年團

明治三十八年迄の本村の青年團は若連中と稱し、世話人を置いて監督にあたらしめてゐた。明治三十九年若連中の名義を改め青年會とした。大正五年八月三十日時の青年會長大谷現村長は舊青年會を解散し周布村青年團と組織を變更された。歴代團長は桑原顯介、河上惣市、赤尾住太郎、佐田瑤、佐々木啓介、栗柄忠員、佐々木忠夫、釜江憲治（現團長）氏等にして村會議員其他村有志を顧問に載いてゐる。村内を周布、日脚、治和、原井、津摩、吉地の六分團に分け、各分團に分團長一名、幹事若干名を置き統制及團務の發展を計りつゝある。主なる事業は

總會 毎年一回行ひ退入團式、前年度決算本年度豫算の發表、役員改選

幹部會 月二回行ひ修養及奉仕事業計劃等を協議す。

一日講習會（八月十四日）、体育大會、義士會、道路愛護團編成、雪中行軍、耐熱行軍、青年學校出席督勵。

施設として 團報發行

現在の基本財産は本團は五十圓位で貧弱であるが、各分團は二百圓以上の基本財産を有し、多い分團は五百圓以上に及んでゐる。かくて各分團の事業は益々發展をなしつゝ、ひいては本團の隆昌に貢献してゐる。

4 周布村女子青年團

男子青年團と同じく早くより結成されたことを考へられるけれども、其の沿革は明かでない。昭和三年十月十二日迄は處女會として栗柄敏子氏が團長であつたが、十三日の御大典御盛儀を迎へるにあたり周布村女子青年團と改名され、團長に前團長栗柄敏子氏副團長に竹田愛子氏が當選された。各部落に二三名の幹部を置き團の世話向上にあたらしめて現在團長竹吉正秋氏、副團長三浦トメ氏に及ぶ。事業としては洗はり、洗濯作業、講習會（料理、作法、編物、洗はり等）、賣店及バザー（運動會品評會）、見學旅行、男女聯合運動會等。

5 日本赤十字社島根支部周布村分區

會員は特別會員二名、普通會員八十三名で日本赤十字社の事業を助けつゝある。

6 國防協會

昭和八年十月に設立され、防護團を組織して防空演習等に盛んに活躍してゐる。會長は現村長大谷茂氏で會員は百八十七名である。

7 周布村婦人會

大正十五年に設立され、會長は村長兼務であつたが昭和五年頃より栗栖忠員氏就任、現在は佐々木鐵之助氏である。事業は主として部落婦人會で實行されてゐる。

8 國防婦人會

昭和十二年三月六日に設立され、會長としては大谷リエ氏、會員は四五〇名ある。舉國皆兵の精神にもこづいて日本婦徳を發揮し、日本婦人としての護國の大義を實踐履行して、國防上銃後の力となることをその目的としてゐる。事業としては

(イ) 心身共ニ健全ニ子女ヲ教養シ以テ護國ノ任ヲ遂行セシムルコト。

(ロ) 兵役ニ服スル夫子兄弟等ニ精神的ニモ物質的ニモ後顧ノ憂ナカラシムル如ク家事ヲ整ヘシムルコト。

(ハ) 一旦緩急アル場合ニ善處スル爲ニ必要ナル精神的教養及訓練ヲ遂ゲシムルト共ニ家庭經濟ニ寄與セシムルコト。

(ニ) 皇軍將兵ニ對シ婦人トシテ後援ノ誠ヲ致スコト。

(ホ) 傷病軍人及其ノ家族、戰病死者遺族並ニ皇軍將兵ノ家族ニ對シ母性愛ヲ基調トスル慰恤ノ誠ヲ致スコト。

(ヘ) 前各號ノ外國防思想ノ涵養、會員ノ一致和偕本會ノ目的ヲ普及徹底セシムル爲メノ施設其ノ他本會ノ目的ニ適合スル事業。

その他多くの事業に著々従事して現在の國防婦人會の活躍は目ざましいものである。

9 宗教上の諸團體

宗教上の諸團體は信仰信念の涵養を目的とした團體で、寺院直屬のもの、有志の企劃したものもあつてその實狀は明瞭でない。

聖徳寺觀音講

百五六十名

部落毎に團體をつくり、月の十八日に一定の場所に集合して札所三十三ヶ所の御詠歌を唱へる。

聖徳寺詠歌講

六七十名

これも觀音講と同じく部落毎に月の二十一日に集合して御詠歌を唱へ佛を拜む。

聖徳寺佛教婦人會

五百名

その他弘法講(四月八月二回) 地藏講で弘法大師、地藏菩薩の徳をいつまでも讃へ道を行き交ふ男女に對して接待をしてゐる。又眞宗には六百年以前より小寄講が行はれてゐる。

神社方面では日祭がある。以前は代古屋に行つて其の年とれた初穂を神様に奉るので、集合した人は朝まで神に奉仕する習慣であつたが近年は代古屋に行くことは廢止され部落毎にお祭をしてもらふやうになつた。

二、各種産業及金融團體

1 周布村農會

明治二十年頃から村内の有志語らひ合ひ農談會といふ私設團體を組織し、農業に關してお互ひに相談し合つてゐた。後年村役場に於て勸業會なるものを組織して農業に關する一切の事務を執つてゐた。明治三十三年農會申請の處全年四月農會令發布により新法を以て認可された。大正十一年四月法律第四十號農會法改正により現在に至つてゐる會員は七百十名。土地所有者及農業者である。又役員として會長、副會長、評議員。職員として技手及書記がある。議決機關としての總代會は總代三十二名を以て組織され、本村農業の改良發達のため必要と認むる一切の事業を評議してゐる。その他講習講話會、各種品評會、病虫害共同豫防驅除、農産物の共同收賣、種子苗木の購入斡旋、蔬菜市場の開設、採種圃の設置、試験

地の設置先進地の視察部落農會の指導等を行つてゐる。

2 部落農會

大正四年既に部落農會設置を縦懸したるも、設立の年月日は不明である。現在十一の部落農會がある。系統農會の最小單位にして各農會に於ては其の部落の状態に應じ、普通作物の外副業として畜産業、養蠶をしてゐるが、特に周布部落の松茸は近郷に於ける特産物として名聲が高い。門田部落農會は普通作物に於て縣内に認められ、昭和六年全國小麥多收穫競技會で一等賞を得、農林大臣賞を獲得した榮譽を有してゐる。往年時の部落農會長清井貞次氏は苦心研究の結果水稻新品種を選出した。現在小雄町と稱し盛んに栽培せられてゐる品種が即ち氏の發見名命によるものである。之等もこよりに賢明なる理解者村農會長を戴き、優秀なる技手の手腕によるものであると共に、部落民の強固なる愛郷的團結心と旺盛な研究心のたまものによるのであつて、大いに他村に誇るに足るものである。

3 耕地整理組合

從來の水田整理及灌溉用水等の方法を改善するために組織されてゐる。明治二十四五年頃門田耕地整理組合、治和耕地整理組合、吉地耕地整理組合は第一回耕地整理を行つた。明治四十一年頃周布耕地整理組合、周布治和耕地整理組合は第二回耕地整理を行つた。現在千疊敷に上つて見渡すと耕地整理の行き届いた水田は四季とりどりの色彩を以て雄大な美觀をなしてゐる。耕地整理面積は約百一十町に及んでゐる。

4 養蠶實行組合

昭和十二年二月に設置され、蠶種の配付、飼育上の指導、繭の取引、協同飼育、協同桑園等をしてゐる。各部落に組合を置き部落單位としてゐる。

原井(周布原井)養蠶實行組合	六〇戸	佐々木平太郎
日脚養蠶實行組合	一〇〇戸	佐田瑤

門田養蠶實行組合

三〇戸

大野倉太郎

周布川西養蠶實行組合

三〇戸

米谷寛

5 那賀郡畜産組合周布村部

部長は現村長大谷茂氏で家畜の治病、家畜品評會、種牡の購入斡旋等を行ふのである。此事業も漸次隆昌になりつゝある

6 門田養雞組合

昭和六年設置せられ共同育雛共同出貨(卵)等をなしてゐる。組合長は串崎衆一氏である。

7 周布村漁業組合

明治三十六年四月津摩に漁業組合を創立、昭和十二年八月法律改正により保証責任周布村漁業協同組合と改名せられた。

組合長は桑原顯介氏、組合員百四十四名である。主なる事業としては

(イ) 魚介の蕃殖保護及増殖施設

(ロ) 船溜の設置

(ハ) 資金の貸附

(ニ) 遭難防止及遭難救恤

(ホ) 貯金斜旋

組合長及組合員は一致協力、組合の發展向上に全力を注いでゐるから津摩漁業の隆盛を見るのも近い事であらう。

8 周布村信用購買販賣利用組合

大正六年六月二十六日に設立し組合員の金融及購買利用の便宜を目的として今日に及んでゐる。組合長第一代は桑原顯介氏で現在の組合長大谷茂氏は第二代である。設立當時組合員の數は四百十名であつたが現在は五百二十九名になつてゐる
現在職業別組合員及出資口數

農	業	三三九名	一二五二口	工	業	二五名	八五口
---	---	------	-------	---	---	-----	-----

商 業	四〇	一七〇	水 産 業	八 八	二〇二
其 他	三七	二三八	計	五二九	一九四七
出資拂込金	一九四七〇圓	準備金其他積立金	二〇〇八三圓		
借入金	ナシ	貸付金	一六二九六七圓		
貯金	二五八九〇四圓	剩餘金	一一二〇圓		

尙購買部にあつては肥料、飼料、石油、カーバイト、農具、學用品、雜貨、家庭薬、砂糖等を取扱ひ、販賣部では米、小麦、大麥、菜種等を販賣し利用部では水道を經營し、大いに活躍してゐる。組合幹部職員は一致して組合精神鼓吹事業の進展に努めつゝある。従つてその事業も又見るべきものが数多い。

大正十五年五月四日産業組合島根支會より表彰を受けた。

表 彰 状

無限責任周布信用組合
 右者其成績優良ト認め本會表彰規程ニ
 依り茲ニ之ヲ表彰ス
 大正十五年四月四日
 産業組合中央會島根支會長從五位 土居通次

何れも金融上大切なものである。日別講は津摩新市等に行はれてゐる。

組合役員(現在)
 組合長理事 大 谷 茂
 専務理事 佐々木 豊太郎
 理 事 大谷彦一郎 原田保吉
 佐々木利三郎
 監 事 荒木安吉 佐々木鐵之助
 佐々木平太郎 佐田瑤

9 頼母子講及日別講

第十三章 郷土の教育

第一節 小 學 校

一、沿 革

明治五年學制頒布せられるや翌六年五月元、治和村大字三宅に始めて治和小學校を創設した。當初民家を使用して居つたが同八年金五百余圓を投じて約七〇坪の校舎を新築、然して其の敷地二百坪は時の戸長桑原善執氏の寄附であつた。

當時の校舎の宏壯な事は郡内第一の稱があつた。續いて日脚村及び元、周布村に於ても夫々學校を新設したが其の沿革は詳かでない。

明治十八年元周布村小學校を治和小學校に合併し周布校を分教場とした。

明治二十二年町村制が發布せらるるや同年四月、

元 周 布

日 脚
治 和
吉 地
周 布

の五ヶ村を併合して新たに周布村とし、

元 治 和

日 脚

の兩小學校を合併して校地を村の中央部字原井に選り、元治和小學校舎を移轉増築して周布村尋常小學校と改めた。

明治二十五年四月高等科を併置、同時に周布村尋常高等小學校と改稱し現在校地に移轉改築した。

三十五年更に約七千余圓の工費を投じて桁行三一・五間梁行五・五間の新校舎及附屬建物を建築した。

明治四十一年義務教育の年限延長に伴ひ高等科の修業年限を三ヶ年とし、同時に工費約四千五百余圓を投じて桁行二三・五間

梁行五・五間の校舎其他の附屬建物を増築した、

大正八年職員室、應接室、小使室、宿直室、唱歌室等に充てるため桁行一二・五間梁行五間の校舎を増築した。その工費約三千六百圓。

大正十一年に至り更に工費一万余圓を投じて現在の講堂及附屬建物を新築。

同十四年四月高等科の修業年限を三ヶ年とした。

其後逐年就學兒童を増し随つて學級増加の必要を生じ、斯くて在來の校地校舎の狹隘年々共に甚だしきを見るに至つたので

昭和五年十月一日附校地擴張校舎改築の認可を申請し、同月二十九日附を以て認可せられ同年十二月十五日新築起工、翌六年

九月上旬全部竣工、總工費約三萬余圓、内四千五百圓は一般村民、一千圓は本村信用組合の寄附による。

校舎の改築に伴ひ當然御眞影奉藏庫の移轉改築を要するを以て、昭和六年六月十九日附之が認可を得、九月三日地鎮祭及起工式を擧げ七年二月下旬に落成した。その工費中金三百圓は大字治和原田保吉氏の指定寄附により、且、桐製御内殿は貴族院議員男爵周布兼道閣下の寄附によるのである。

二、小學校基本財産

土地、畑 三・一〇九圓

山林 一三・一二三圓

計 一六・三〇二圓

現 金 九七四・三一〇圓

三、兒童數累年表

兒童數は明治より大正、大正より昭和と増加して現在は十四學級に編成されてゐるが、更に學級増加を行はなければならぬ状態になつて來た。

過去數十年間の兒童數を調査した結果左の通りである。

年 度	就 學 步 合	尋 男 出 席 步 合	尋 女 出 席 步 合	高 男 出 席 步 合	高 女 出 席 步 合
大正十年	九九, 五	九七, 八三	九六, 三三	九五, 七三	九三, 二
十三年	九九, 七	九八, 四二	九七, 七一	九八, 〇三	九八, 三
昭和元年	一〇〇, 〇〇	九八, 八九	九八, 八	九八, 三〇	九七, 三五
二年	一〇〇, 〇〇	九七, 九四	九八, 七	九八, 三	九五, 九〇
三年	九九, 七	九八, 七二	九八, 三	九七, 五	九六, 二四
四年	一〇〇, 〇〇	九七, 五	九八, 三	九七, 三	九五, 八〇

年 度	就 學 步 合	尋 男 出 席 步 合	尋 女 出 席 步 合	高 男 出 席 步 合	高 女 出 席 步 合
明治三十六年	八八, 〇六		九二, 三〇	七八, 九七	
四十年	九六, 四八		九四, 一一	八七, 六一	
四十四年	九九, 七六		九六, 〇三	九一, 九〇	
大正元年	九八, 九八		九六, 三五	八九, 三四	
三年	九九, 七五		九四, 七七	八七, 七五	
五年	九九, 七六		九五, 三七	九三, 一〇	

四、兒童就學出席狀況

年 度	尋 常 科		計	高 等 科		計	總 計
	男	女		男	女		
明治三十六年	120	95	215	26	6	32	247
四十年	150	120	270	65	14	79	349
四十一年	150	125	315	13	5	18	333
四十二年	192	155	347	19	0	19	366
四十三年	194	169	363	21	3	24	387
四十四年	193	164	357	12	5	17	374
大正元年	185	171	356	19	4	23	379
二年	178	176	354	20	2	22	376
三年	180	184	364	23	3	31	395
四年	187	185	372	18	5	23	395
五年	181	183	364	29	4	33	397
六年	188	197	385	29	5	34	419
七年	193	185	378	22	6	28	406
八年	197	182	379	21	4	25	404
九年	213	192	405	38	8	46	451
十年	220	179	399	38	15	53	452
十一年	235	183	419	24	12	36	455
十二年	223	170	398	39	20	59	457
十三年	226	176	402	42	15	57	459
十四年	219	163	382	53	16	69	451
昭和元年	207	177	384	42	12	56	440
二年	205	180	385	47	15	62	447
三年	191	192	383	51	17	68	451
四年	204	203	407	44	16	60	467
五年	205	209	414	43	18	61	475
六年	200	220	429	40	16	56	485
七年	225	236	461	41	25	66	527
八年	222	242	464	44	32	76	540
九年	226	227	453	46	33	79	532
十年	220	229	449	54	37	91	540
十一年	212	223	435	58	32	90	525

五年	六、八	六、七	七、八	七、八	七、三
六年	九、四	六、六	六、六	五、四	六、六
七年	九、四	六、七	六、六	六、二	五、四
八年	九、七	六、六	七、六	六、六	七、〇
九年	九、七	六、七	六、元	七、七	七、〇
十年	九、三	七、七	七、四	六、四	五、三
十一年	九、八	六、六	六、四	六、五	七、七

五、卒業生

大正元年の卒業生 尋常科 六六人 高等科 三人
 昭和元年の卒業生 尋常科 五九人 高等科 一八人
 昭和十一年の卒業生 六七人 高等科 四四人

で高等科に入學する児童が多くなつて來た。これは父兄の教育熱が増し児童の向學心が發達した理由によるのである。現在尋常科を卒業する児童中、數名が家事に従事するもの位で他は中等學校以外は殆ど高等科に入學する。女兒も大部分は高等科に入學するけれども男兒に比較して劣つてゐる。

卒業児童累計は尋常科二二二一人、高等科四六一人(昭和十一年度)である。高等科を卒業した児童の大部分は家事を扶け余暇を利用して青年學校に入學して修學に勉めてゐる。

六、歴代校長

歴代	氏名	就任年月日	退任年月日
第一	桑原顯介	全二十年十二月	
第二	兒玉幸中	全二十六年四月八日	全三十年四月十二日
第三	丹生柳之助	全三十年四月十三日	全三十二年十月二日
第四	藤田鹿太郎	全三十二年十月二日	全三十四年九月一日
	桑原泰次郎	明治六年五月	
	栗栖純	明治八年九月	明治十年二月
	山崎幸雄	全十年二月	全十一年五月
	今井正物	全十一年六月	全十六年五月
	小野敬恩	全十七年九月	全二十年十一月
	桑原顯介	全二十年十二月	
	桑原顯介	明治二十五年七月二日	明治二十六年二月二十四日

第五代	西澤金助	全三十四年九月一日	全三十五年八月二十七日
第六代	花本磯七	全三十五年八月二十七日	全三十九年六月十五日
第七代	山本穉	全三十九年七月二日	全四十二年三月三十一日
第八代	金田源太郎	全四十二年三月三十一日	大正五年三月三十一日
第九代	佐藤喜一郎	大正五年三月三十一日	全七年三月三十一日
第十代	河上惣市	全七年三月三十一日	全十五年五月三十一日
第十一代	田原鶴吉	全十五年九月三十日	昭和三年三月三十一日
第十二代	栗栖忠員	昭和三年三月三十一日	全十一年三月三十一日
第十三代	田中賢二郎	全十一年三月三十一日	

七、職員

現在職員は男十一人、女六人、計十七人、中男一人女人は青年學校専任である。其他看護婦が一人居る。大正七年頃は職員數、男女併せて九人であつたが現今はその約二倍に増加してゐる。如何に兒童教育に村民が熱心であるかが之によつて見ても諒解される。

八、教育費累年表

最近の村教育費總額を調査してみると、昭和十二年度の教育費は村經常費總額の五割四分に當り一戸當り二十四圓四十六錢になつてゐる。郷土の教育のために、村當局及郷土民が如何に力を傾注してゐるかを窺ひ知る事が出来る。

九、兒童貯金調

現在、尋常科人學當初に當り本村信用組合から兒童に貯金を奨勵する意味で金十錢を與へてゐるので、全兒童が自ら進んで貯金を毎月して居る状態である。随つて郵便、銀行貯金は少く組合貯金が大部分を占めてゐる。

年 度	在籍兒童數	貯金人員	金 額 (一人平均)
明治四十四年	三六八人	二二六人	二三四、八二 〇、三
大正二年	三八三人	二八八人	二二五、〇一 〇、六
五年	四〇二人	二九七人	二四七、〇六 〇、三
十年	四四九人	二九〇人	一、四四四、〇三 四、七
昭和元年	四五四人	三五五人	一、七〇六、三七 四、六
二年	四三九人	三〇一人	一、二二一、七五 四、五
三年	四四七人	二七五人	一、四六七、七〇 五、三
四年	四五五人	四五五人	一、五八二、九九 三、七

五年	四六九人	四六九人	二、五三〇、三七	五、五九
六年	四七四人	四七四人	二、九九二、一〇	六、三三
七年	四八八人	四八八人	二、九五八、八二	六、〇六
八年	五二六人	五二六人	三、一一八、二九	五、九三
九年	五三九人	五三九人	五、二五八、五三	九、七五
十年	五三五人	五三五人	二、八七七、三七	五、三七
十一年	五四五人	五四五人	三、〇二三、九八	五、五四
十二年	五二八人	五二八人	三、二二〇、五六	六、〇九

十、學校經營の伸展

學校の教育經營も、年を追うて進展を見つゝあるのであるが、最近の我學校經營は「郷土に即し全體觀に立つ、生活指導に據る國民教育」を目指して、すべての教育機構を經營し、特に教育精神を振興せしめ、師道の確立、校風の刷新に邁進し、一而して其の基調をなすものは

校訓
職員信條
校歌

である。

左に我が校の校訓、職員信條並びに校歌を掲げる。

一 校 訓

(昭和十二年一月制定)



2 職員信條

(昭和十二年四月制定)

感謝——聖旨ヲ奉體シテ感恩奉謝ノ生活ニ起テ

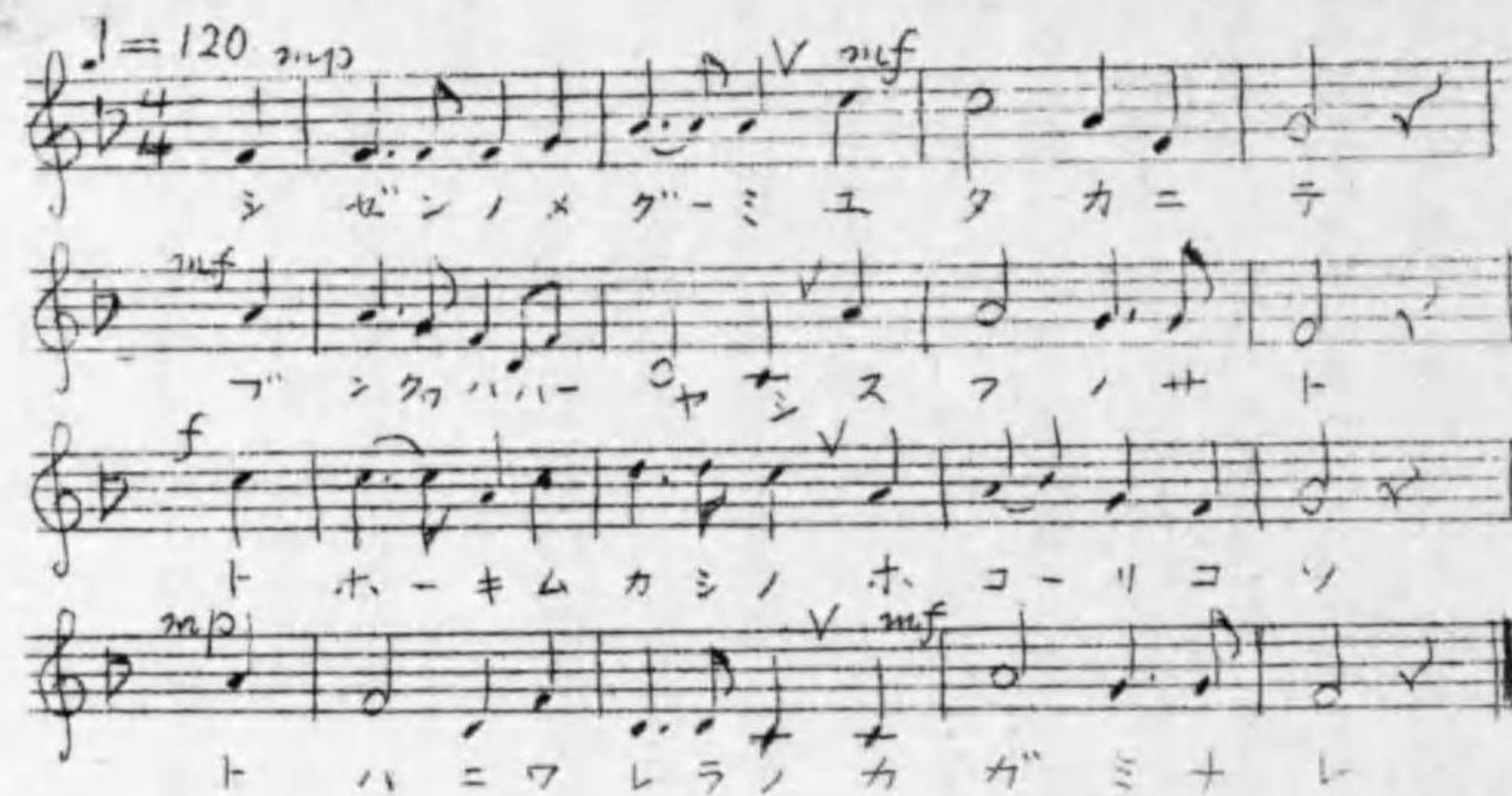
△優渥ナル聖旨ヲ奉體シテ常ニ教育者タルノ自覺ヲ失ハズ

▽萬事ニ恩德ノ深キヲ感得シテ常ニ報謝ヲ以テ生活ノ基調トス

周布村高等小學校々歌

活氣を以つて莊重に

田中賢二郎作歌作曲



一、自然の恩恵豊かにて
 文化は早し周布の里
 遠き古昔の誇こそ
 永遠に吾等の龜鑑なれ

二、鳶巢城に勤王の
 旗ひるがへし丈夫が
 樹てし武勇の譽こそ
 永遠に吾等の龜鑑なれ

三、深き恩徳に報ひんご
 教育勅語 畏みて
 心を 協せ 勤みて
 我が郷土の名を揚げん

文 (周布村の誇り) 武 (私にちよのかがみ)
 化 (私にちよのかがみ) 勇 (私にちよのかがみ)

我が周布村は、よく肥えた田
 や島等よくその山や川や海
 ばかりでなく産物が豊か
 然るに他のところを石見位
 國では一番早く開けて中
 心となつて文化の先頭に立
 たるはなほ文化の先頭に立
 たるはなほ文化の先頭に立
 たるはなほ文化の先頭に立

今から六百年餘りも昔、後醍
 醐天皇の御代、足利氏が天
 皇に勤王の旗を立てて周
 布村の本陣を築き、大活躍
 した。その時、周布村の
 武勇の譽は、遠くまで
 轟々として、人々の心
 を驚かせた。この時、周
 布村の武勇の譽は、遠く
 まで轟々として、人々の心
 を驚かせた。この時、周
 布村の武勇の譽は、遠く
 まで轟々として、人々の心
 を驚かせた。

自然の恩恵
 文化の開發
 古代文化の中心地
 周布古墳
 昭和十二年六月五日
 文部省より史蹟と
 して指定せらるる
 日進月歩の文化
 に遅れざる精進

報徳精神に依る
 聖勅の體現
 感 謝
 協 和
 勤 勞
 至誠
 人本日いよ

3 校 歌

(昭和十二年六月五日文部省認定済)

- 協 和 —— 一圓融和、小我ニ執ハレズ、和シテ同ゼズ
 ▼ 區々タル小我ニ執着スルコトナク、一圓融合、大我ニ生キ
 ▼ 有機的ニ結束ヲ鞏ウシ、連帶責任ヲ以ツテ協心戮力事ニ當ル
- 勤 勞 —— 職務ニ忠實ニ、明朗精進シ
 ▼ 全身全靈ヲ教育道ニ捧ゲ、職務ニ忠實ナル所常ニ明朗ナル心境開ケ
 ▼ 不退轉ノ精進ニ依リ自ラ進ム者ニシテ始メテ人ヲ導ク資格アリ
- 至 誠 —— 以テ教育報國ノ至誠ヲ盡サントス
 ▼ 至純ノ教育愛ニ燃エ
 ▼ 兒童ヲ導クニ親心ヲ以テス

第二節 青年學校

一、青年學校概況

明治三十六年四月二十九日周布村立農業水産學校を創設して、爾來屢々學制の改正をしたけれども毎年豫算が極めて僅少であるため、漸く男子のみを收容する季節的夜間教授を行ふに過ぎず、極めて不振の状態であつたが、昭和八年八月三十一日附を以て縣訓令第五號實業補習學校細目に基いて學則を改正し、男女を收容する常設的晝間教授として専任教員を常設する事の認可を得た。

昭和十年六月九日青年學校の開校式を舉行して以來、着々學校の經營に努めた結果生徒並に父兄も亦漸次學校設置の趣旨を理解して其の實績を挙げ、十一年末の如きは村内在住の入學資格該當者の全部入學を見た事は眞に喜ばしい次第である。出席歩合も漸次良好に向ひ十一年度に入つては、學級編成を改め能力別に適切な教授をして良結果を得つつある。之が後授會を組織して一層の向上を圖りつつある。

教育方針としては、設置の制度に鑑みて青年男女の心身を鍛練し、特に國體觀念を明徴にし、規律、節制、協同、忍耐等の諸徳を漸養し、併せて國防能力の増進を圖り、一面に又職業上の知識、技能の收得練習によつて地方農業の開發に資せん事を期し、經營上に於ても種苗配給、水田の試作、蔬菜の共同栽培、家禽の飼育等によつて理論と實際との併進に努め、その傍ら専任教員の巡回指導、短期講習會、農産物品評會等を開催して農業意識の伸展に努力しつつある。

津摩漁業部落生の便を計り特別班を設置し、且つその業態に適應する教育を施すため、特に指導員を置いてゐる。天候その他の支障を考慮して臨時教育を行ひ、又非常、水難に資するため水泳、手旗信號、救急人工呼吸法等を教へて居る。

二、生徒數調

周布村立農業水産補習學校

實業公民學校

昭和三年 五八人

昭和八年 男三八人

全四年 六五人

女〇

全五年 六八人

男九八

全六年 四七人

女二八

全七年 三七人

青年學校

年 度	性 別		普 通 科		本 科		科 研 究 科		計	就 學 率
	女	男	女	男	女	男	女	男		
昭和十年六月一日現在	4	1	7	4	12	19	6	10	37	82%
今十一年四月一日現在	5	5	9	20	12	10	8	16	37	73%
全十二年四月一日現在	6	1	11	15	13	23	15	8	34	83%
全十二年九月一日現在	5	1	14	14	10	18	7	5	32	74%
	1	2	7	7	18	14	5	8	69	101%
			5	8	13	23	8	7	69	100%

生徒數について見ると周布村立農業水産學校時代には主として男子だけで、その數少なく實業公民學校時代になつて男、女俱に收容した爲、生徒數は増加し青年學校時代になつて更に増加し現在に及んでゐる。

三、出席調

昭和十年度百分比
男 四七・八〇%
女 四一・九〇%

昭和十一年度百分比

男 五二・二九%
女 三二・二九%

四、昭和十二年度部落別出席統計表(時數)

班別	性別		四月	五月	七月	八月
	男	女				
一班(日脚)	九五	二一	九四	七四	六九	七三
二班(高野山崎)	五五	二七	九一	一七	四四	四
三班(周布原井)	九五	一〇	七二	七四	五四	三六
四班(吉地)	八七	八八	二二	九六	六六	四六
五班(門田新市)	五	八	九	一五	一	七三
六班(三宅假屋)	九五	九七	九二	六七	五五	七五
七班(津摩)	四七	八二	一〇	八〇	三九	二五
合計	八六	八二	九五	七六	五四	四六
平均	七五	六〇	六〇	五八	四七	四〇

青年學校出席歩合は年々良好になつてゐる。

五、職員(昭和十二年度)

専任教員として教諭(男)一名 助教諭(女)一名 其他助教諭(男)五名 指導員二名 教練科指導員が四名居る。

六、過去五ヶ年間の教育費

昭和七年 一一〇六・四八〇
 全八年 一五二六・〇〇〇
 全九年 一五三〇・一八〇
 全十年 一二七八・〇〇〇
 全十一年 一一九九・〇〇〇

第十四章 郷土民の生活状態

一、年中行事

壹 月 農事 麥の踏壓補肥 乾田耕起 葱頭甘藍補肥 大根の漬込 味噌 果樹の剪定 楮の刈取
 一日 四方拜(學校に於て新年宴會を開く)
 二日 元始祭
 七日 本村消防出初式
 八日 入營兵見送
 九日

三 日 産業組合定期總會
二 月 農 事 麥中耕土寄せ 馬鈴薯の定殖 果樹の剪定 桑園の施肥 春播蔬菜種子の準備

三 日(四日)
四 日(五日)
立 春
十一 日 紀元節(建國祭)

海軍志願兵身體検査

三 月 農 事 菜種中耕土入 甘藷床設置 接木

六 日 地久節
陸軍記念日 在郷軍人分會本村從軍團忠魂碑參拜

十 五 日 春日神社祈年祭

二十 一 日 春季皇靈祭(彼岸の中日)
二十 四 日 八幡宮祈年祭

四 月 農 事 糶鹽水選 甘藷の押木 蔬菜露地播種 茄子、胡瓜、西瓜、落茄、牛蒡、馬鈴薯、果樹病氣防

除 桑園解策 造林

三 日 神武天皇(雛節句)

八 日 灌佛法會(花祭)

十 一 日 マートル法記念日(大正十年)

十 七 日 自治制記念日

二十 七 日 結核豫防デー

二十 九 日 天長節(學校に於て村民合同拜賀祝宴)

三十 日 靖國神社春季例祭

五 月 農 事 糶浸漬 播種 麥黑穂抜き 紫雲英刈取 苗代管地 茄子、蕃茄、胡瓜等定殖 春蠶播立飼育

一 日 全國乳兒愛護週間

二 日 八十八夜

四 日 端午の節句

六 日 立春

二十 五 日 楠公記念日

二十 七 日 海軍記念日

三十 一 日 大正天皇行啓記念日

六 月 農 事 苗代管理 水田整地 田植 小豆大豆播種 菜種麥の收穫 脱穀 甘藷手入 馬鈴薯收穫

梅干、ラッキョウ漬 甘藷收穫 春蠶上簇 收繭 桑園施肥 果樹の袋掛

全國虫歯豫防デー

時の記念日

十 一 日 入梅

二十 一 日 夏至 徴兵検査

七 月 農 事 水田除草手入追肥 甘藷蔓返し 胡瓜、南瓜、越瓜、茄子、西瓜、蕃茄收穫 夏春蠶掃立飼育

元寇記念日

ごろおとし

七、八 日 國旗制定記念日

十 一 日 土用

二十 日 明治天皇崩御

八 月 農 事 水田除草管理 害虫驅除 甘藷蔓返し 果菜類の收穫 越瓜奈良漬 山林間伐 推肥用草刈

九 月 一 日 ラジオ体操會
 七 日 七夕
 八 日 立秋
 十三日 孟蘭盆(魂祭)
 十四日 青年團一日講習會
 農 事 堆肥用草刈 秋馬鈴薯定殖 晚秋蠶の掃立飼育 白菜、甘藍、ホウレン草、葱、玉葱播始
 栗梅等の落葉 果樹の芽接ぎ

一 日 關東大震災記念日 二百十日
 十三日 乃木祭
 二十三日 秋季皇靈祭

十 月 農 事 芋類收穫 麥の鹽水選 根菜類の收穫 柿共同出荷
 十三日 戊申詔書御下賜記念日
 十四日 郷社八幡宮、村社春日神社例祭
 十五日 体操祭
 十六日 小學校運動會
 十七日 神嘗祭、青年團運動會
 二十三日 靖國神社秋季例祭
 三十日 教育勅語御下賜記念日
 十一月 農 事 麥の温湯浸法播種 芋の切干 柿の加工 稻刈調製

三 日 明治節
 七 日 立冬
 十 日 國民精神作興詔書御下賜記念日
 十七日 二宮尊徳先生記念日
 二十三日 新嘗祭
 二十四日 八幡宮新嘗祭
 二十五日 春日神社
 二十六日 井戸正明記念日
 三十日 満期除隊兵出迎

十二月 農 事 米調製 麥の踏壓中耕作施肥 甘藍、葱定殖 白菜、大根、人參葱、收穫 柑橘收穫
 澤庵漬 大根切干 桑園の手入 株の整理 病虫害驅除
 八 日 針併養
 十四日 義士會
 二十、二十一、二十二日 冬至
 二十三日 皇太子殿下御誕生日
 二十五日 大正天皇祭 クリスマス
 三十一日 大祓

二、郷土の人情風俗

本村民は一般に淳朴にして良農民たるの性情を有し、勤勉にして事に當るの概あり。近來戸主會、青年團、婦人會等を組織

して風俗の矯正、各自の修養に務め且つ團体的活動をなすに至り年々欠陥を補ひつゝある。

1 民性

イ職業略々一定し、貧富の懸隔比較的になく、概して生活が安定してゐる爲に、人心の動搖が少ない。

ロ上下融和、村治極めて圓滿で、階級争闘、小作争議等絶無なること。

ハ村民の殆ど全部が信用組合に加入し、よく理解活用し成績良好である。

ニ人情厚くお互に親切を盡しあふ。

ホ敬神崇祖の念厚く、祖業を遵守する。

ヘ一般に稍利己的な傾向があつて勤儉貯蓄の美風はあるが、共存共榮道義並に公共心に乏しい。

ト時間的觀念乏しく、諸種の集會葬祭日における定時勵行不十分である。

チ部落的觀念強く、之が爲に時として平和を害することがある。

リ向上進取の氣象に乏しく、獨立自治の精神に缺けてゐる。

ヌ家庭の教養程度一般に低い。

ル衛生思想一般に低級、婦女子は育児並に看護上の智能に乏しい。

日脚、津摩部落

1 恬淡、磊落にして開放的。

2 粗野輕躁に流れやすい。

周布、原井、吉地部落

1 従順、勤儉能く産を治める。

2 因循、姑息になり易い。

本村として注意したいのは、團体的奉仕的生活を奨勵し部落的根性を緩和し、總ての交際上友誼上に於て交換的打算的

な悪習慣を改めたいと思ふ。

婦女子は一般に純朴質素親切である様に見受けられる、民性の短所の改革は若き青年男女をしつかり指導するにあると思ふ。

2 風俗習慣

良風美俗

△一般に質素勤勉にして自己の職務に熱心である。

△不幸時に於ける組中區中の責任を以つて葬送の行事するなまは美風である。

缺點

部落的觀念が強く一團融合の精神が乏しい。自己反省のない他人の批評や、井戸端會議等の風習がある。時間に對する村民の態度は寒心すべきものがある。道路は一般に清潔なれども人家の周圍の不潔等は將來改良しなければならぬ。氏神例祭の時神輿を擔いで祭れ廻る弊風がまだ残つてゐる。

此等は今後當局、教化團體及び有志の指導に俟たなければならぬ。

三、郷土の民謡

田植歌

一、見たか 見て来たか 松江の城を

大工手柄か 金せきか

二、立てば しやくやく 座ればぼたん

歩く姿は 百合の花

三、殿ごよを来た 五里ある道を

三、見ても 見たいのが 鏡ミ親よ
三里さ、山 二里の田に

五、あなたあ 百まで 私しや九十九まで
まだも見ないのが しのび妻

六、櫻 三月 あやめは五月
共に白髪の はえるまで
咲いて年とる 梅の花

七、可愛 がらにや
ながしうはをらぬ
やまで五日か 三日かよ

盆 歌

一、盆が来た来た おぎり子がそろをたよ

二、今夜こうして 明日分れても
稲の出穂よりや よくそろた
磯に打波 もぎりやあよ

三、紺のまいだり 松葉のしるし
松にや今度の様あ 知らせえやう

四、鮎は瀬に住む 鳥や木の枝によ
人は情の下に往む

酒 歌

酒屋々々を好んでは出たが

酒屋すんだら春早う歸れ

酒屋藏のしは麥種そだち

酒屋杜氏さんは大名の暮し

酒ミ名をつけよきちがひ水を

酒屋杜氏さんにねんごろすれば

よいにやもさするよ夜中のこしき

務めかねますこの冬は

冬の寒さを寝て忘れよ

内で年を取るこまはない

五尺六尺すえならべ

たれがのましてさわがせる

藏の窓からかすくれる

朝の洗湯がつらうござる

餅 つき 歌

餅をつくなら一石二石

これのお家は昔から繁昌

これのお家は目出たいお家

だんな大黒おかみは惠美須

枝が榮えて葉がしげるなら

一の枝より二の枝よりも

祝目出たよ若松さまよ

これの親方だんごか餅か

二斗や三斗はうすよごし

今は若世でなほさかる

つるが御門に巢をかけた

一人ある子は福の神

おるせ小松の一の枝

三の小枝が影をさす

末は鶴龜五葉の松

餅は餅だが金持だ

津 摩 民 謠

一、もだん津摩浦わかめの産地

かわゆい乙女が歌うて干した

塩抜きわかれは日本で一よ
賣れて行きます大阪へ

二、緑色増す春景色

岡の彼方のあけほのに

はまばの明りもつゆみ消へ

そよ風そよぐ出船時

三、港春風出船時

磯に夕日のかけがさしや

沖に白帆のかけを増し

歸りを急ぐわかめ船

四、花の港の津摩浦に

さいた一つの戀の花

乙女心のその胸に

なさけに咲いて愛に散る

四、新聞雑誌講讀狀況

絶へず變異する爲に正確なる數の調査は困難である。併し大體に於て本村民の精神生活の狀況の一面が知れると思ふ。

▲新聞及それに準ずるもの

大阪毎日新聞	七九	大阪朝日新聞	七一	小學生新聞	一五
松陽新報	三二	山陰新聞	四	島根民報	一〇三

石州日日新聞	一一	濱田商工會報	二〇	濱田商報	五
帝國在郷軍人濱田支部報	一五				

▲雜誌

家光	一二七	主婦の友	一五	婦女會	七
婦人の友	一	婦人世界	三	婦人俱樂部	一二
令女界	二	キング	二〇	現代	三
雄辯	二	富士	五	文藝春秋	一
講談俱樂部	六	少女之友	三	少女俱樂部	五
少年俱樂部	一〇	日本少年	五	少女世界	二
幼年之友	一〇	譚海	一〇	サンデー毎日	
週間朝日					

戸數の割合に新聞を講讀する家が少ない様である。これは農村としてやむを得ない現象であらふ。小學生新聞の十五は余りにも物足らぬ感がある。これは學校にて毎日兒童に講讀さす爲であらふ。

雜誌を見るに組合雜誌である「家の光」が一二七の多き上つてゐることは、如何に組合精神が村民によく理解されてゐるか如何に組合向上に盡力してゐるか、如何に組合員が熱心に其の職務に盡してゐられるか、知れる。村民達はこのよき組合を一層利用しなければならぬ。

其の次は婦人雜誌、キング等である。子供の雑誌は少年俱樂部、少女俱樂部である。

五、食物の狀況

▲食物の變移

今より四十年前に於ては、米飯を食する者は殆どなく、麥飯、大根飯、つは飯、芋飯、菜飯、粟飯、こうきび飯等を主食物としてゐた。麥と米との比は八三二位であつた。餅なごも米の餅は殆どなく、こうきび、粟、木の芽等で作つたものを食べてゐた。

副食物としては野菜を主として、魚肉は鹽からこしたものを食べてゐた。

醬油から醬油代用として用ひてゐた爲に、砂糖は平常は餘り用ひなかつた。食事の回数は一日に四回又は五回であつたそれが交通の發達により、漁業法の進歩により、或は農村の振興して來た等の爲に、食物の質に於ても量に於ても大きな變化が齎らされて來た。

▼一般食の種類

A 主食物

イ、米食の状況

現在精米所が五つあり、自然白米を食する家が多い。營養上より見て滋養價の損失は莫大なるものである。現在は搗粉を入れるが、これは身体を害する事が多い。そればかりでなく、白米の分量に於ても損失を來してゐる。本村の様な農村に於ては一考すべき事ではあるまいか。

ロ、麥は昔から食べて來たもので、今も尙食べてゐるけれども段々と少くなりつゝある。營養價に於て米と大差はない故に畑作として出来るだけ水田を利用して二毛作とし、多額の生産を圖りたいものである。

ハ、甘 藷

段々多く栽培されて來た。然し蒸して食する事が多く、昔の様に粥、干芋等にはあまりしない。

もう少し調理上變化を與へる事は出来ないだらうか、考ふべき問題である。

ニ、其の他用食

粟……餅にして食べる事が多い。産額は極く少ない。

稗……現在稗を作つてゐる家は一軒もない。

B 副食物

野 菜 類

たかな、ちさ、せり、ほうれんさう、つはぶき、竹の子、わけぎ、わらび類、よめな、さやえんさう、蠶豆、キャベツ、みつば、たまねぎ、かぶ、しそ、じやがいも、茄子、きうり、せうが、南瓜、トマト、うり、めうが、らつきやう、さけ、ねぎ、さつま芋、なが芋、松茸、大根、蓮根、人參、ごぼう、白菜、かぶ、春菊、里芋、水菜、つくねいも、うき、ハセリ、其他。

魚 類

鱈、鯛、たこ、いか、なまこ、さば、さびうを、ばんじろ、わかな、くろだひ、しいら、いさき、ほうほう、あじ、いわし等。

海 藻

のり、わかめ、かじめ、天草、むかでな、ミリのあし、海ぞうめん、もづく、うきうと等。

貝 類

にな、さえ、あはび、たちかひ、かに等。

G 調味料

イ醬 油

本村には醬油製造所が二ヶ所あつて村内の需要を充してゐるが、此の外他の地方より移入する者があつて一般に家庭に於ては多く使用してゐる。

農業者の中には、少量を製造して、自給してゐる家もある。

ロ味 噌

農家に於ては製造者多く、其の他は他より移入してゐる。醤油に比べて使用量が少い。自家製造のものは味が少々おちる様である。

ハ酢

本村には製造者なく、他より移入して小賣をしてゐる。

ニ砂糖

日常多く使用してゐる。農家にあつては大白よりも赤砂糖を多く使用する。餅、だんご等には黒砂糖を多く使用して食べてゐる様である。

▼調理法

イ野菜

たかな—浸し物 和へ物 塩漬
ちさ—浸し物 和へ物 酢の物 刺身のつま
せり—浸し物 和へ物 刺身のつま 海苔巻き すしの心
ほうれん草—浸し物 和へ物 つはぶき—煮ノ よめな—浸し物 和へ物
竹の子—茹で、甘煮 木の芽和へ 味噌和へ わけぎ—汁の實 わらび—煮ノ
さやえんどう—胡麻和へ 煮ノ たき飯 蠶 豆—甘煮 飯 みつば—味噌汁 澄汁 浸し物
きやべつ—生 又は茹で、酢のもの 煮物 漬物 刺身のつま たまねぎ—牛肉のすき焼 煮物
かぶ—酢の物 煮ノ しそ—梅漬けの中 てんぷら
馬鈴薯—コロッケ あん きんまん 煮ノ 茄 子—甘煮 焼茄子 浅漬 粕漬 塩漬 辛子漬
きうり—酢のもの きぶ漬 浅漬 せうが—刺身 おまんすし
南 瓜—甘煮 トマト—生食 酢のもの 刺身のつま うり—きうりと同じ 奈良漬

めうが—澄汁 味噌汁 刺身のりり合せ 煮ノ らつきやう—酢漬 さゝけ—煮ノ 御飯

ねぎ—味噌汁 ねぎあへ なが芋—酢のもの お汁 煮ノ

さつまいも—飯粥にませる 蒸す 甘煮 松茸—吸物 焼く 酢のもの 松茸飯

大根—おろし大根 酢のもの 煮ノ 浅漬 たくあん 粕漬 味噌汁 干切

蓮根—酢のもの 甘煮 人參—煮ノ 雑煮 酢のもの あけもの

白菜、水菜—塩漬 浸し 胡麻あへ 春菊—刺身のつま 浸し 海苔巻きすしの心

里芋—甘煮 つくねいも—酢の物 汁の味 煮ノ うき—酢の物 刺身のつま

ロ魚類

ぶり—吸物 刺身 いか—するめ 甘煮 照焼 酢の物 木の芽和へ 刺身

なまこ—酢の物 鯖—煮付 塩焼 鯛—刺身 煮付 照焼

まび魚—焼く 煮付 わかな—刺身 煮付 しいら—刺身 塩物 煮付

いさき—刺身 煮付 ほうほう—煮付 鱈—塩焼 煮付 おまんすし

鯛—塩焼 味淋干し 油揚 酢の物 おまんすし

ハ海藻

のり—のり巻 醤油をつけて食す 天草—まころてん わかめ—お茶漬のお菜 味噌汁

かしかめ—ぬた 煮る 海ぞうめん—酢の物 刺身のつま もづく—ぬた

うきおこ—精進料理の刺身

ニ貝類

さゞえ—つぼ焼 甘煮 酢の物 あはび—刺身 酢の物 甘煮

木果 樹

梅 — 梅漬 枇杷 — 間食 盛込み 桃 — 間食 盛込み 梨 — 間食 盛込み
柿 — 干柿 あはし柿 みかん — 盛込み 無花果 — 間食

▼食物の度数

現在は大部分三回であるけれども、日の長い時には四回乃至五回食す。

▼食物の將來

營養素は人により、土地によりて異り、又人の勞働、安靜の状態によつて左右される。腹一杯食べたて、身体の爲にはならない、寧ろ有害である。

大体日本人の標準食量は、熱量二二〇〇カロリーより二四〇〇カロリーである。此の点を考慮し、經濟的で營養價のある献立を作る必要がある。

これまでの様な方法によらず、營養方面を考慮し、調理法を考へて同じ品物でも、注意して美味しく食べる事が必要である。

六、衣服

▼一般の服装

大部分は農家である故に、木綿物で余り上等でない。子供も小學生は洋服で和服の者は少い。

夏は女子は簡單服を着る。一般女兒も簡單服を使用する者が多くなつて來た。男青年は多く青年學校服及作業服を着る者が多い。

大体に於て質素である。

よそ行着としては色々挙げられるけれども、餘り高價なものを用ひない。

然し、若い女子は服装が一般に華美になりかけてゐる様である。

毛織物は漸次盛になりかけてゐる。手編の主なものにはチョッキ、肩掛、袖なし、帽子、スウェーター、靴下、腹巻等である。

秋から冬にかけて防寒用としては毛織物以外に眞綿が用ひられてゐる。

▼仕事着

農業者は一般に木綿の手中、脚絆を用ひ、草鞋、地下足袋、草履をはく。男子は股引を用ひ女子はもんぺを使用す。

田で仕事をする場合は、着物を短く着る。雨天の時は、かさ、みの等を用ひる。若い男子は作業服を用ひる者が多い。

漁業者は短い着物を着、夏季の様に暑い時は、ふんどし一本で働いてゐるが冬季、朝夕の寒い時には、袴の着物又はきてらを用ひてゐる。

雨天の時はかつばを用ひる。

台所で働く女子は割烹服を用ひる事が多くなつて來た。

七、住居

1 農家

山麓地方や水田の中に住居を選んでゐるのは主として農家である。それは耕地へ往來するのに便利な爲である。交通路運搬路も自然に耕地の最も多く分布してゐる地方に多い。農業を主業としてゐる住居の構造を見るに間口は奥行に比べて長く商業地の住宅よりは余程違つてゐる。又戸口に広い扉ミ縁がある。土間も割合に広い、土間には穀物入（ネズミ入らずミ稱す）を置いてある、道路に近く厩納屋を設けてゐるのは出入に便利な爲である。便所も仕事の性質上所に設けてある。

2 漁家

漁業を主としてゐる家は海に近く立地してゐる。住居の構造を見るに海岸に對して横向であつて小さい窓が海に面する側にもうけてある。これは冬の風や寒さを防ぐ爲である。間口農家と同じく奥行よりも長く土間も相當廣い。この土間には漁具や穀物入を置いてゐる。穀物入のあるのは農業を副業として行つてゐるからである。寢所は波の音を避けたり冬の寒い風を避ける爲に海より遠い方の側に選ばれてゐる。

3 商家

商家は國道並に其の他の道路に面して立地してゐる。之は道路を通行する人々を相手として商賣をするからである。この事は農家が耕地の中に、魚家が海岸に面して立地するのと同じ理由である。特に人通りの多い國道筋には商業又は之に類する仕事をする家が多い。住居の構造を見るに道路に最も近く商品が陳列され、商品棚が設けられてゐる。土間も品物を買ふのに都合よく奥迄通り抜けて造られてゐる。居間は商品置場所に近く設けられてゐる。土間に於ては農漁商の住宅が最もその特質を表してゐる。

六、郷土の方言

此の方言は言語矯正の資料に供するため、昭和十一年當校に於て出來得る限り各方面から集めたもので、随つて總ての方言を網羅してはなない。

種別	標準語	當地方の言葉	標準語	當地方の言葉
人	ぼく きみ わたし あなた	ワシ ワレ オノレ オラ オノレ ワシ アンタ	おむこさん およめさん おやかた	モコサン ヨメンジヨウ オヤカツアン

時	日	挨拶	稱
毎日	今日 きのふ おまごひ	お早う おやすみ ごめん下さい さやうなら	〇〇君 お父さん お母さん 兄 弟 姉 妹 おぢさん おばさん 男の子 女の子 大人 わかもの(青年)
一日	オトツヒ ヒテ ヒンゴテ	又來マシタ 又來マセウ	オトツアン オツカア オカカ ニー ネエ オツサン オツツアン オボサン アキ アキンウ ビク ビチ オセ アンジヨウ
	夕方 朝方 よごほし	はい 有難う	おくさん
	ヨツヒテ	ヘー ハイ オホケニ	オカツアン

具	道	住	物
まり	かま 飯櫃 ござら おいこ さな	座敷 ふすま うしろ 神官屋敷	なす かぼちや 馬鈴薯 さつまいも 里芋 はくさい さうびき あんす いちぢく 松竹 さかな あまだい 小だい
サマ テマル	ハガマ ハンボ テシヨ トリノス サマ	シヤシキ カラカミ セド ヨコヤ	ナスビ ケホチヤ カブチヤ キンカイモ リエウキユウイモ エグイモ ヒラグキ トウビキ アンス トウガキ イオタヒ クヅナ パンシロ
むしろ	洗面器 きれ みづがめ ほうちよう	便所 ゑん ながしもこ 分家	おやつ
ミシロ	キ セシメンキ チヨウダラヒ ホウチ ハンドウ	センチ チヨウグ エンヤ エンニ ハシヨ スイパン ハヤ	ハスマ

食	眼	衣	體	身	人
そらまめ ねぎ おかつ おかゆ ごはん	すぼん 帽子	きもの そでなし ぼたん すぼん	かがと 足 せ 小ゆび ゆび	はぐき した(舌) ゆび 小ゆび	ばか おし つんぼ
ナツマメ ネアカ ソヘモノ カヒ ママ	ホシ パツチ	アツボ アボ ドノ キリモン ベツチ セチ セチメン	ホナシ ウナシ ホナクレ キビシヤ	マシゲ マヒゲ 横ピンチヤ ホホベタ ホホピンチヤ ハブ ベロ イビ シノコイビ シリコイビ ウナシ	ホケタレ ホンクラ ウブシ ガズンボラ ホタ
菓子 蒲鉾 香のもの 昆布 わかめ	わらじ	高下駄 ぞうり ぞうり 下履ぞうり	きづあこ たん つば	もも ひざ つば たん きづあこ	どもり めつかち 左きき
エエモン カマアコ カウ メノハ コブ	ワランシ	タカアクリ アクリ シヨウリ セキダ ワランシ	キツボ タンコロ ツツ ヒザボウズ ヘザ	モモタアラ ヒザボウズ ヘザ ツツ タンコロ キツボ	ドドクリ ガンチ ギツチヨ ヒダリギツチヨ

他	其
おせじ おかれ ぬかるみ たやすい なんぎな きれいな たくさん 大きい 暑い(熱い) なぜ たしかに 思つた時以上の時に すこしも もう いきなさい あげませう 休まして下さい します しなさい いひなさいました 何ですか 何々ではないかしら 何々です 何々でございました あのやうな	おせじ おかれ ぬかるみ たやすい なんぎな きれいな たくさん 大きい 暑い(熱い) なぜ たしかに 思つた時以上の時に すこしも もう いきなさい あげませう 休まして下さい します しなさい いひなさいました 何ですか 何々ではないかしら 何々です 何々でございました あのやうな
オベン ゼニ ゼンゼン シルイトコロ ミヤスイ イタシイ アツベイ アバイ ジヨウニ イカイ アチイ ナシテ テヨウセキ ガイニ イツソ ハア イキンサイ ヤロー ヤライイ 休モ一ナ スラーナ シンサイ インハツタ ナニカナ 何々テナアカ 何々テナア 何々テナア アガーナ	おせじ おかれ ぬかるみ たやすい なんぎな きれいな たくさん 大きい 暑い(熱い) なぜ たしかに 思つた時以上の時に すこしも もう いきなさい あげませう 休まして下さい します しなさい いひなさいました 何ですか 何々ではないかしら 何々です 何々でございました あのやうな
あんなに 何々しなさる ねえー こより(擦) じまい 電燈のかさ ひどい きたない すこし 小さい 寒い いつも 思はず しまつた 割合に 来なさい 下さい しなさいませ しました いひました 何々ではありませんか 何々でない このやうな こんな まつて下さい	あんなに 何々しなさる ねえー こより(擦) じまい 電燈のかさ ひどい きたない すこし 小さい 寒い いつも 思はず しまつた 割合に 来なさい 下さい しなさいませ しました いひました 何々ではありませんか 何々でない このやうな こんな まつて下さい
アガーニ 何々シナハル ノウ カンゼヨリ グツ ビヨツコ ホヤ ムゴイ キシヤナイ ゼゼイ チビツト コマイ サパイ ビツシリ ケンゴ シモクラカシタ タツカト キンサイ ヤンサイ スラーナ シターナ イツターナ 何々ヤナ一カ 何々テナ一 ニターナ コガーニ マヤガレナウツドシテナレ	あんなに 何々しなさる ねえー こより(擦) じまい 電燈のかさ ひどい きたない すこし 小さい 寒い いつも 思はず しまつた 割合に 来なさい 下さい しなさいませ しました いひました 何々ではありませんか 何々でない このやうな こんな まつて下さい

物	動	物 然 自	作	動
さりぎりす めだか たにし つく／＼ほし ごり たぬき 太陽 かび やに	さりぎりす めだか たにし つく／＼ほし ごり たぬき 太陽 かび やに	太陽 かび やに	手なたく ならむ おほれる おほぐ おどろく あそぶ うごく 返す とまる 走る 歸る 行く ころぶ	マクレル イキヤアガル イヌル モドル カケル ナス イゴク アスブ タマゲル アベル ウアエル ネラム シヤク シハク ドウ ズク テウタタク
ギイス タイロウ タノシ タノシ タノシ	ギイス タイロウ タノシ タノシ タノシ	オヒサン オテントサン コウベ ヤネ オヒサン オテントサン	よこどり すてる なめる しやべる さけぶ 呼ぶ 言ふ すれる こはす さわぐ 泣かす 叱る ほゝをたく	ペンチヤヲハル クシチクル ピラカス ツバエル メク ハブテル イヤア一ガル ヒヤエル イガル シヤマクル ネブル シテル チヤイスル チヤクネル
アリス アリス アリス	アリス アリス アリス	オヒサン オテントサン コウベ ヤネ オヒサン オテントサン	よこどり すてる なめる しやべる さけぶ 呼ぶ 言ふ すれる こはす さわぐ 泣かす 叱る ほゝをたく	ペンチヤヲハル クシチクル ピラカス ツバエル メク ハブテル イヤア一ガル ヒヤエル イガル シヤマクル ネブル シテル チヤイスル チヤクネル

第十五章 衛生

1 本村に於ける衛生の概況

周布川の下流左岸に隔離病舎があるが、大分古くなつてゐるために現在改築問題が起つてゐる。右岸に水道が設置されて津摩治和部落はその恩澤を受けてゐる。河川水の使用約一七〇戸、その他湧泉水戸数は約四七戸である。本村の井戸個数は二一五で全戸数の三七パーセントを占めてゐる。水道使用を除く他の各戸は井戸を使用したり周布川を使用してゐる。周布川は下流になるに従ひ不潔の度をましてゐるが、矢張り使用をつゞけてゐる者もある。河川の使用については今後も一考を要するこゝであらう。

本村は農家が多いためか一般に清潔さは言はれない。村當局は年二回清潔法を實施してゐる。

トラホーム患者は年々減少して來てゐるが、概して多い津摩部落は漁村部落で海風海水の影響が多い。又日脚部落に多い原因は砂のために目をいためることに起因してゐると思はれる。醫師、日脚に一名、周布一名、治和一名、製薬者一名、賣薬營業者三名、産婆一名。

2 家庭常備薬

おき薬のある家 大部分の家にはおきぐすりがあつて、一戸平均二組位になつてゐる。多い家には十組位もある家がある。その他の賣薬を常備薬として持つてゐる家も多少はある。

メンソレタム オキシフル ヨードホルム 仁丹 胃散 征友丸 アスピリン ヨードチンキ 硼酸

近年組合よりは組合薬を出してゐるために、これを家庭に備へて使用する家が多い。

3 死因調査(昭和十一年度)

昭和十一年の死因を見るに、八十四人の死亡中肺及喉頭結核で死亡する者が一番多く二十四人、全体の二八パーセント強になつてゐる。本村の青年男女は都會地に出稼する者が多い關係上、工業地から病原菌を持ち歸る者も多い、又一方衛生思想の幼稚なために年病者の増加しつゝある傾向は今後大いに戒心しなくてはならぬ事であらう。月別による三八月が最も多いがこれは傳染病の増加や幼児の寢冷が増すためであらう。左に年別病類別死亡表をか、ける。

昭和九、十、十一年ノ月別死亡表

月 別	昭和九 年			昭和十 年			昭和十 一年		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
一 月	一	一	二	四	八	一二	五	八	一三
二 月	四	二	六	三	二	五	四	四	八
三 月	五	一	六	六	二	八	四	三	七
四 月	二	二	四	四	一	五	三	二	五
五 月	四	一	四	一	一	二	六	二	八
六 月	二	七	九	一	一	二	三	二	五
七 月	四	二	六	三	一	四	四	二	六
八 月	三	二	五	二	三	五	五	八	一三

病類別	傳染病及寄生蟲病			肺核及喉頭結核	其他ノ腫病	レウマチス性疾患 榮養障礙內分泌腺 ノ疾患其他全身病	血液及造血臟器疾患	アルコール中毒及 其他ノ慢性中毒	神經系及感覺器ノ 疾患	血行器疾患	呼吸器ノ疾患	消化器ノ疾患	昭和十一年 計	昭和十年 計	昭和九年 計	
	其ノ他	毒	其ノ他													
男	四	一	四	一	一	二	二	一	三	四	三	二	男	八	五	九
女	二	一	五	一	一	三	二	一	二	一	一	四	女	五	二	三
計	六	二	九	二	二	五	四	二	五	五	四	六	計	一三	七	一二
男	二	一	八	一	二	一	一	二	一	九	二	四	男	一〇	六	八
女	一	一	五	一	一	一	一	一	一	六	二	二	女	五	三	四
計	三	二	一三	二	三	二	二	三	二	一五	四	六	計	一五	九	一二
男	二	一	一〇	一	三	二	一	一	五	二	二	二	男	一〇	七	九
女	一	一	四	一	二	一	一	一	三	一	一	七	女	四	一	六
計	三	二	一四	二	五	三	二	二	八	三	三	九	計	一四	八	一五

昭和九、十、十一年ノ病類別死亡者表

年 齡 別	昭和十一年 計	昭和十年 計	昭和九年 計	昭和十一年		昭和十年		昭和九年	
				男	女	男	女	男	女
一才	一〇	三	二	一	一	一	一	一	一
二才—五才	一七	七	八	二	三	一	二	四	三
六才—十才	二	六	一	二	一	一	一	一	一
十一才—十五才	一	一	一	一	一	一	一	一	一
十六才—六十才	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六十一才以上	二	一	一	二	一	一	一	一	一
計	八三	四二	六五	四一	五八	二五	三三	二七	三八

昭和九、十、十一年々齡別死亡表

年 月	昭和十一年	昭和十年	昭和九年
九 月	六	一	二
十 月	二	三	三
十 一 月	一	五	一
十 二 月	三	七	七
計	一二	一六	一五

年 度	五 年	六 年	七 年	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年	十 三 年	十 四 年	昭 和 元 年	二 年
赤 痢	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
腸チブス	一〇	一	一	二	二	二	五	三	三	五	三	五
チフテリア	一	一	二	一	一	一	三	一	一	一	二	一
パラチブス	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
計	一四	一	四	二	〇	四	四	七	三	六	五	八

年 度	大正二年	三 年	四 年
病 赤	四五	一	二
腸チブス	一	二	一
チフテリア	一	一	一
パラチブス	二	一	一
計	四九	二	二

傳染病患者累年表

計	外 因 死	老 衰 病	乳兒固有ノ疾患	骨及運動器ノ疾患	皮膚及皮下結締	妊娠及産ニ依ル疾	泌尿及生殖器ノ疾
三九	二	五	五	一	一	一	一
二六	一	五	一	一	一	一	一
六五	二	一〇	六	一	一	一	二
三三	一	三	一	一	一	一	一
二五	一	二	二	一	一	一	一
五八	一	五	三	一	一	一	一
四一	一	七	三	一	一	一	二
四二	一	五	三	一	一	一	一
八三	一	一二	六	一	一	一	三

十一年	十年	九年	八年	七年	六年	五年	四年	三年
		一	一		一		二	一
一	五	二				二	六	二
	二				一		一	
二	一						五	
三	八	三	一	〇	二	二	一四	三

第十六章 其の他

▼周布郵便局

一、沿革

明治三十五年業務取扱を開始した。それ以前は驛停ミ云ふ機關が設けられて事務を取扱つてゐた。普通三等郵便局にして電話は明治四十四年十月十六日、電信は大正六年一月二日、交換電話は昭和七年十月一日より事務を開始せられ、以前の所在地は治和口一四番地驛通りつきあたりにあつたが、現在は治和字細長八八番地にあつて壯麗な建築である。事務員四人。集配手八人何れも懇切忠實に勤務をしてゐるのである。

二、歴代局長

氏名	就學年月日
桑原顯介	明治三十五年三月一日
桑原尠夫	大正四年十一月八日
熊谷薫	昭和二年十一月十六日

三、昭和十一年度事務取扱状況

普通郵便	引受	一八四七一〇	電報	發信	二二四八
	配達	二七五六〇二	着信	三〇六六	
書留價格表記	引受	四一三七九	電話取扱數	五四五〇	
	配達	五一一七			
小包郵便	引受	一三四〇	爲替		
	配達	四五七	振出		
普通書留		四五四〇	金額數	三一六六七	
		四五七		三二七二六圓	

配達 普通留通 三〇一八
一二七八

振替貯金

拂込 金口額数 二五八三
五五〇三圓

拂出 金口額数 四三五
一三一七〇圓

國庫金 拂出 金口額数 二六二五
五二二七六圓

證券

受入金 二五二〇圓

拂出金 二七〇〇圓

保險

契約受持件数 二二九九

保険料額 一三六七・五〇圓

保險金額 二五二四五九・二〇圓

年金恩給

拂渡 金口額数 六一一五
六三八七圓

受持 金人員 三〇人
六四七八圓

郵便函

一三

局員の懇切忠實なる執務に對していわしや燒雲堂より感謝狀及置時計一個贈呈せらるゝに至つた。其の原文をかゝけて如何に職務に忠實であつたかを紹介しよう。

拜啓

時下益々御清祥の段奉賀候。陳者甚だ突然にて非禮の極み恐縮に存じ候。貴御管下の郵便局員の懇切町重なる郵便取扱に關して多大なる感動を受け弊店一同感激致し居り貴局長殿の平素の御監督御訓辭が局員をして常に懇切忠實なる執務たるを想ひ敬服に不堪候

事は同封符箋付きの四種郵便物を濱田町那賀郡畜産業組合の紹介により差出申候處符箋の理由にて返戻しを受け候へ共凡百の郵便員の返戻が等しく「心當りなし」又は「所在不明」の單一なる理由にて返戻しを受けるに周布局集配の方の返戻しは他の二つの組合にも調査し改名前の村名まで調査せし努力が充分に感取せられ候。洵に其職務に忠實親切なる態度に敬服感佩に仕候。一事が万事此の周布局員は業務に當りて飽くまで懇切町重の旨として管轄町村居住者より深甚なる敬愛の心を抱かれて居る事も確信仕候。弊店は開業後二十ヶ年の短日月ながら中央諸官衙の御用商人としての業務上全國各府縣殖民地にも日々數通の郵便物有之種々の取扱の經驗あれ共今回の如き感激を受けた事無之集配担任の好模範に接し欣快に不堪候。不幸にして此の周布局員の姓名不明の爲直接感謝すべき途なく殊に上司たる貴局長殿の御報告特に敬服の念を表する次第に御座候。符箋の筆蹟にて局員も判明致すと存候間調査の上弊店の深甚なる感謝の意を御傳へ下度祈上候。尙甚だ粗惡ながら置時計別封小包を以て御手許に御送り仕候間聊か感謝の印として局員に御手交被下度御取計ひの程願上候。先は最近になく欣快の念を抱きつ、御管下の局員の業務上に關して御報告申上候。如斯御座候。敬具

昭和十二年五月二十九日

東京市本郷區元町一丁目
いわしや曉雲堂
柴井良之助

▼周布村駐在所

一、沿革

明治三十一年周布村大字治和に創立せられ、大正十一年十一月現廳舎の新築落成を見た。本村任命の駐在巡察は職務に忠實にしてよく治安維持に盡瘁して來られた。

二、歴代駐在巡察

富永虎之助	原野兼吉	梶谷竹四郎
澄川吾三郎	永井尙香	塚本詞平
石賀喜一郎	兼松本春樹	石賀喜一郎
佐々木茂丸	兼畑野甚太郎	河野康右衛門
兼大庭正亮	左川次臣	兼大庭正亮
大庭正亮	兼澄川吾三郎	兼大庭正亮
金村彦三郎	兼松本春樹	兼白井眞充
坂村秀太郎	渡邊辨吉	房崎佐兵衛
兼田道太郎	川上辰市	兼田道太郎
錦織榮次郎	補助二宮秀市	近重兼一
渡邊健三郎	石橋喜代一	左田野半次郎
兼日高福一	原田辨次	日高福一
兼石橋喜代一	品川潔美	兼有福巖
兼中村與一	品川潔美	兼日高福一
山崎忠義	飯塚守次(現在)	

▼周布驛

一、沿革

周布驛は周布村大字治和にあつて大正十一年三月十日開通以來神戸鐵道局米子運輸事務所に屬し山陰本線の終點驛であつたが、同年九月一日本線が三保三隅驛迄延長した爲中間驛となり。昭和三年五月一日官制改正大阪鐵道局米子運輸事務所に配屬し昭和十二年四月一日より區域變更に伴ひ、廣島鐵道局下關運輸事務所に配屬せられたのである。

二、歴代驛長

後藤解三	田中市松	陶山芳雄
米村正	福本嘉太郎(現驛長)	

三、職員と表彰状

現在職員七人、何れも親切第一をモットーとして職務に勉勵してゐられる。

表彰状

昭和十二年六月一日以降九十六ヶ月間責任運輸事故皆無ナリシハ畢境驛員一同恒ニ職責ヲ重シ協心戮力職務ニ鞅掌セシ結果ニシテ成績優良ナリ仍テ當局表彰規程第一條ニ據リ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十年六月二十一日

大阪鐵道局長

日

淺

寛

調物貨六

調物荷小手五

年 月	發送屯數			到着屯數			發送個數			到着個數		
	十 年	十 一 年	十 二 年	十 年	十 一 年	十 二 年	十 年	十 一 年	十 二 年	十 年	十 一 年	十 二 年
一月	44	42	95	72	59	106	179	184	256	207	218	256
二月	73	73	53	123	351	353	97	155	157	181	230	274
三月	59	66	133	118	82	73	184	210	208	301	315	348
四月	50	63	94	105	63	66	231	205	214	293	340	311
五月	31	118	55	108	18	107	146	2.8	176	218	271	247
六月	59	132	81	65	93	97	101	148	200	174	233	260
七月	21	75	67	81	59	80	157	203	147	271	238	272
八月	33	74	54	54	19	71	203	186	187	217	259	310
九月	265	41		23	33		167	178		259	353	
十月	72	100		44	114		296	301		317	359	
十一月	33	794		110	62		184	253		293	272	
十二月	131	148		74	59		270	250		322	381	
計	855	1739		932	1124		2223	25.7		3085	3379	

年 月	乗客調					降客調				
	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年
四月	4192	4492	3836	3836	4811	4251	4290	3808	3303	4841
五月	3471	3143	3719	3713	3450	3313	3.26	3717	3717	3364
六月	2890	2864	2965	2965	2798	2754	2792	2188	2986	2764
七月	3316	3177	3585	3585	3701	3355	3142	3451	3451	3834
八月	3806	3741	4034	4034	4322	3813	3706	3974	3174	4256
九月	2760	2986	3276	3276		2761	2932	3136	3136	
十月	4077	4149	4143	4143		4168	4287	3934	3934	
十一月	3106	3040	5021	5021		3194	3016	2767	276	
十二月	3040	3191	3320	3320		3065	3165	3393	3193	
一月	3456	3394	3467	3467		3256	3236	3116	3116	
二月	2963	2951	2928	2928		2782	2883	2893	2893	
三月	3912	3920	3816	3816		3776	3718	3382	3882	
計	40931	41048	44104	44104		40492	40191	41046	41046	

四、周布驛乗降客調
乗客の多い月は一般に十一月、十月、八月で降客の少いのは八月、十月、三月である。

七、主要貨物發送屯數 (昭和十年)

品名	屯數	主なる仕向地
米	一三	石見江津、都野津、波子、津和野
木材類	三二一	名古屋、湊町、天王子、佐野
摺鉢	三〇	石見大田、淺利
醬油	二一	三保三隅、石見益田、石見横田
清酒	一四	岡見、鐮手、石見益田
鮮魚	一一	石見益田

同上 昭和十一年

米	五	江津、都野津、波子、津和野
果物類	四	大阪、神戸の市場
野菜類	一	大阪、神戸の市場
木材	三四八	大阪、名古屋
鹽干魚 貝蝦類	一〇	益田、松江
活鮮魚	九	益田、松江
肥料	一三	
摺鉢	二五	石見大田、淺利

八、季節的貨物發送屯數

醬油	二〇	三保三隅、石見益田、石見横田
瓦	一五	石見大田、淺利
下駄甲	一二	濱田地方

若柿	二	波子
柿	二	大阪市場、神戸市場

九、主要貨物到着屯數 (昭和十年)

肥料	一六四	新興、吉則、於福、目出
石灰	六六	吉則、重安
木材	一八六	三谷、地福、津和野、吉原、石見益田
セメント	二七	小野田、セメント町
砂糖	二八	下關
鮮魚	三	下關、益田

前表により本村の移出入の物産の大体がわかる。

▼周布村消防組

本村火災警備の沿革を尋ねるに明治二十五年六月時の村長佐々木保太郎氏村費を以て龍吐水唧筒一台を購入し爾來不慮の用

に備へたが、大正五年村長桑原顯介氏の計畫により村民各戸一日一厘貯金をなましめ、之が蓄積金を以て大正六年七月小型腕用唧筒一台を購入し三百二十圓を支出し、尙餘財を以て本村二十四區に輕便唧筒一台宛を配布した。後大正十年更に腕用唧筒一台(價格六百五十圓)を購入した。大正十一年十二月村費百圓の補助を受け日脚部落に於て腕用唧筒一台(價格二百八十圓)を購入設置した。而して之等器械の設備と共に公設消防組設置の必要を認め、大正十年其筋の認可を得て公設消防組を設置し組頭以下組員の任命を見た。兩來訓練に警備に鋭意消防精神の發揮と設備の充實を圖つて來た。昭和七年三月更にガソリンポンプ購入の議を起したが村財政を考慮して之を本村産業組合に於て購入の協調をなし、十六馬力ガソリンポンプ一台(價格千八百圓)を設備し、本村としては毎年之が購入資金の積立をして之が買受の契約をした。而して組員の指導監督に留意し萬一に備へ消防精神の發揚と訓育の練磨、設備の完成を期し本村警備の充實を圖つた。昭和九年二月其の筋の認むる所となり金馬簾一條使用の認許を得たのは本村消防組の名譽とする所である。更に消防組としては村費多端の上に各種税制限外の課税の賦課をする状態であるから、器械器具の修理改善に充分の經費を充て難いので村民に訴へ寄附金に依つてホース五本を購入し、之が資金三百圓を得る事を目標とし募集に着手したのに其の成績が甚だ良好で目下募集に應じた額は三百八十圓に達してゐる。月一回の訓練を行ひ變災の際の準備をしてゐる。水難等には消防組が率先して警備に當り地方人民の爲に大いに力を盡してゐる。

▼壯丁調

種年	昭和五	六	七	八	九	十	十一	十二
甲	九	八	十一	十二	十三	二十	十七	十二
乙第一	一三一	八二	四四	二七	四二	一八〇	四四	六一
乙第二	九	六	一七	八	八	一二	一〇	五
丙	九	六	一七	八	八	一二	一〇	五

丁	一	四	五	二	二	一	一	〇
病氣	二	〇	一	〇	〇	〇	二	一
其他	五	九	一一	七	一二	七	五	八
計	四〇	三七	五三	四八	四一	五八	四三	四三

昭和十二年度の結果を見るに甲種に三四パーセント強乙種は四八パーセント強丙は一四パーセント強である。年々丙丁が減少する事は喜ばしい事である。

第十七章 むすび

以上により我郷土の實相を大体知ることが出來た。要するに、我が郷土は、自然の恵豊かにして、古來文化の開發も早く、住民の生活も安定してゐたのであつた。けれどもこの秀麗なる郷土も今後年と共に、『我が郷土民のすべてを抱懐するには益々狹隘を告ぐるに至ることであらう。而して今や我國は滿州に、北支に、大に我國民の活躍を要望してやまないものがある。祖業を繼承し、我が郷土の天恵を開發せんとするものは此處にとゞまつて我郷土永遠の繁榮を圖るべきであるが、然らざるものは、人間到る處青山あり、大に海外發展を期すべきである。

惟ふに我郷土は從來天恵豊かなるためにとかく安逸に耽れ、小成に安んじて覇氣に乏しい傾向があつた、今後は自主獨往、不撓不屈、進取發展の氣魄を最も必要とするのである。

されば我郷土の青少年は古代文化の中心をなしてゐた郷土の誇りも、彼の鳶巢城に勤王の旗をひるがへした周布氏の忠魂義膽を龜鑑として、或は學業に或は家業に、己が全力を擧げて精勵し、以つて質實剛健、堅忍持久、如何なる困苦欠亡にも耐え

得る精神力ミ体力ミを、平素の生活裡に十分育成鍛錬して、我が郷土を双肩に擔ふ素地を作つて置かなければならぬのである。

周布村郷土誌 畢

周布村郷土誌正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
三	一	周布橋	周布大橋	一	四	和加布郎都去命	和加布郎都去命
一	九	六方料餘	七方料餘	一	二	阿武軍	阿武軍
四	四	本村は	此處は	二	八	かげて見ん	かげて見ん
七	七	三宅名	三宅の名	二	一	明治二十年	明治二十年
二	二	約一町	約一町	三	五	勤忠	精忠
二	二	箱徳寺	聖徳寺	三	四	工藤三郎	工藤三郎
二	二	箱徳寺	聖徳寺	三	九	杯	後醍醐
二	二	箱徳寺	聖徳寺	三	一	御世	後世
一	一	昭和十年十二月十二日	昭和十一年十一月十六日	四	八	故二周布ト詔リ	故二和加布ト詔リ
一	一	此後	今後	四	八	高百二十八石三斗	高百二十八石三斗
二	六	郷土誌	郷土地誌	四	八	故二我布ト云フ	故二我布ト云フ
二	六	祖光	祖先	四	八	和加布郎都去命	和加布郎都去命

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一五	一四	三宮	宮家	二七	一〇	人間の心を表した もの、昔支那 の……	人間の心を表した もので、魔を驅る 神が、魔を退治 する物語。
一六	四	響き渡ったと	響き渡ったと 謂はれてゐる。	二七	一五	魔を驅る……	昔支那の玄宗 皇帝が二病鬼神 のために病に罹ら れた時、その鬼神 を退治する物語
二四	一六	組	戸の一 郷社八幡宮祠 官中尾弘萬氏 弘萬氏が同村鍋 石の團學者藤井 宗雄氏と共に 作りあげたので ある。之は八調子 と稱し従來の舞 より、快速にして 形式内容もよく 整ひ一新機軸 を出したもので ある。	二八	五	那賀郡同布村 大字因布	那賀郡同布村 大字日脚
二六	一二	代官屋の廣 萬氏 廣萬氏が	那賀郡今布村 大字 川波、國分	二八	九	那賀郡今布村 大字下米原 那賀郡今布村 大字上米原 舞組のある 所は	那賀郡雲城村 大字下米原 那賀郡雲城村 大字上米原 八調子の舞組 のある所は
二八	一一	波子	那賀郡今布村 大字	二九	六	サバ アイワシ アノコ 一	煎除
三〇	一〇	周布村は 現周布村の	周布村の中央部は 現周布村の	三〇	九	熊形	熊形
三一	八	一周	(周)	三一	一六	川の右岸	川の左岸
三二	七	一周	周布	三二	一三	関係あり	周布川左岸 関係あり
三三	圖解	石見長瀨霞石 玄武岩	東部台地地質 横断面 石見粗面岩等	三三	三	不満足	不況に 至つたのである。
三四	一八	石見粗面岩等	石見粗面岩等	三四	一七	勉める。	勉めてゐる。
三五	一五	一〇村に對し六 である	一〇に對し二八 である。	三五	三	釜江憲次	釜江憲治
三六	一二	頭陸より	陸頭より	三六	一七	細川忠一	細川忠義
三六	一四	八月の三二度 十二月の二度	八月の二七度 二月の九度	三六	一七	北谷助一	北谷助市
三六	一四	蒸溜水	雨水	三六	一七	栗栖忠市	煎除
三六	一四	十二月の二度	二月の九度	三六	一七	山崎忠義	煎除

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
二八	一一	波子	那賀郡今布村 大字	四九	九	摩津浦	津摩浦
二九	一〇	周布村は 現周布村の	周布村の中央部は 現周布村の	五二	六	サバ アイワシ アノコ 一	煎除
三〇	一〇	周布村は 現周布村の	周布村の中央部は 現周布村の	六〇	二	熊形	熊形
三一	八	一周	(周)	六六	九	川の右岸	川の左岸
三二	七	一周	周布	六八	一	関係あり	周布川左岸 関係あり
三三	圖解	石見長瀨霞石 玄武岩	東部台地地質 横断面 石見粗面岩等	六九	一六	関係あり	周布川左岸 関係あり
三四	一八	石見粗面岩等	石見粗面岩等	七〇	三	不満足	不況に 至つたのである。
三五	一五	一〇村に對し六 である	一〇に對し二八 である。	七一	一七	勉める。	勉めてゐる。
三四	一二	頭陸より	陸頭より	七四	三	釜江憲次	釜江憲治
三五	一五	蒸溜水	雨水	七四	三	細川忠一	細川忠義
三六	一四	八月の三二度 十二月の二度	八月の二七度 二月の九度	七四	三	北谷助一	北谷助市
三六	一四	蒸溜水	雨水	七四	三	栗栖忠市	煎除
三六	一四	十二月の二度	二月の九度	七四	三	山崎忠義	煎除

終

